

## 第二章 租税ノ利害

租税ニハ  
害アリ又  
タ利アリ

### 第三十六節

#### 租税ノ善不善

租税ノ必要缺クヘカラサルモ

ノナル事ハ既ニ前章ニ於テ屢々述ヘタル所ナレハ今復タ多言ヲ要セ  
スシテ明カナリ然ラハ則チ租税ノ善ト不善トハ果テ論辨ヲ要セサル  
歟曰ク然リ然レトモ爰ニ一言其善不善ニ就テ尙ホ辨セサルヘカラサ  
ルノ必要アリ何ントナレハ租税ノ善不善ニ就テハ古來學者間ニ種々  
ノ極端説アリテ各偏倚スル所アレハナリ余ヲ以テ之ヲ見レハ租税ハ  
夫レ自身ニ善ナルニモアラス亦不善ナルモノニモアラス則チ絶對的  
ニ善ナリトモ不善ナリトモ未タ之ヲ斷定スルヲ能ハサルモノナリ凡  
テ租税ハ人民ノ感情ヲ損シ生産ヲ妨碍スルカ若キ害ヲ生スレハ亦タ

其使用ニ依リテ生スル所ノ利益實ニ渺カシサルナリ然レハ同時ニ利  
モアリ害モアルハ租税ナルヲ以テ若シ政府ニシテ其用ヲ誤リ賦課ニシ  
一旦其程度ヲ過グルトキハ實ニ云フニ忍ヒサルノ弊害ヲ生シ爲メニ  
國家ノ大患ヲ醸スニ至ル豈ニ恐レサルヘケンヤ是故ニ租税制ニ於テ  
ハ吾人ハ常ニ小心翼々トシテ謹慎ノ上ニモ尙ホ謹慎ヲ加ヘサルヘカ  
ラス是レ余カ其利害ノ明亮ナル事柄ニモ關セス敢テ重複ヲ願ミスシ  
テ茲ニ嗷々スル所以ナリ乞フコレヨリ租税ノ利害ニ付キテ左ニ兩極  
端説ヲ舉示セン

### 第三十七節

#### 租税ハ善ナリト云ヘル説

或ル論者ハ曰ク

租税ハ一度人民ヨリ政府ニ納ムルモノナレハ其租税ハ直ニ再ヒ物品  
ノ價トナリ若クハ勞力ノ報酬トナリテ人民ノ手ニ還ルモノニシテ唯  
コレヲ右ニトリテ左ニ移スニ過キサルモノナレハ租税ハ決シテ人民

租税ハ政  
府カ右ニ  
取テ左ニ  
移スモノ  
ナル故ニ  
害ナシト  
スルハ非  
ナリ  
租税ノ一  
部ハ外國  
ニ支出セ  
ラル

租税ノ收  
支ニハ費  
用ヲ要ス

租税ヲ收  
入スルト  
支出スル

ニ害アルモノニアラス、重欲モ亦決シテ憂フルニ足テサルモノナリト、  
其説ヤ甚タ巧ミナリト雖トモ之レ謬見ノ最モ甚タシキモノナリ、先ッ  
其根據ノ最モ非ナル所ヲ辨ヒンニ現今各國政府ノ支出ハ其幾分ハ内地  
ニ仕拂ハレスシテ外國ニ支出セラル者ニハアラスヤ、果シテ然ラハ租税  
ハ悉ク被税者間ニ還ルト云ヘルハ既ニ其根據ヲ誤レル説ト云フヘシ、  
然レトモ今假リニ一步ヲ譲リテ租税ハ毫モ國外ニ支出セラレストス  
ルモ租税ノ出納ハ固ト之ヲ金錢ヲ右ニトリテ左ニ移スカ如キ事ニ比  
スヘキモノニアラス、實ニ租税ヲ出納スルニハ數多ノ官衙ヲ設ケ數多  
ノ官吏ヲ置キテ之カ爲メニ少カラサル徵稅費ヲ要スルニアラスヤ、然  
レハコノ徵稅費丈ハ租税ヲ出納スル爲メノ贅費ニシテ前ニ租税ヲ納  
タル人民ノ手ニ還ラサルモノナリ、且ツ政府カ人民ヨリ租税ヲ徵收ス  
ル時ト之レテ人民ニ支出スル時トハ其間ノ關係全ク異ナルモノシテ

トハ其關  
係異レリ

租税ノ支  
出テ受ル  
人ハ元之  
ヲ納メタ  
ル人ニア  
ラス

ニシテ、初メ政府カ租税ヲ徵收スルトキハ強制ヲ以テシ、而シテ再ヒ之  
レテ人民間ニ配賦スル時ハ物品若クハ勞力ト交換スルモノニシテ則  
チ通常任意ノ賣買ニヨルモノトス、去レハ一ハ直接ノ報酬ナク一ハ  
直接ノ報酬アル者ニシテ其關係タル全ク異ナレリト云フヘシ、且ツ又  
タ政府ニ物品若クハ勞力ヲ致スモノハ必スシモ前ニ租税ヲ納メタル  
者ニ限ラサルカ故ニ租税ハ必スシモ前ニ納税シタル同一體ノ人民中  
ニ還ル者ニアラサルナリ、故ニ租税ハ政府ヨリ人民ニ再ヒコレヲ配賦  
スルカ故ニ不善ナルモノニアラストノ説ハ徹頭徹尾謬見ナリ、ハミル  
トン氏曾テ之ヲ駁シテ此説ハ恰モ賊アリテ或ル商家ノ金ヲ盜ミ其金  
ヲ以テ後日其商家ニ就テ貨物ヲ買ヒシカ故ニ賊ハ惡シキ者ニアラス  
又タ商家賊ノ爲メニ害ヲ蒙ラスト云フニ同シク誤レルモノナリト云  
ヘリ、是レ稍過酷ノ評言ニ似タレトモ尙ホ其誤謬ヲ指摘スルニ足ラン

### 第三十八節 租税ハ人民ノ勤儉努力ヲ獎勵スト云ヘ

租税ハ人  
民ノ勤儉  
努力ヲ強  
ユヘシト  
ノ説  
マクテッ  
グ氏ノ説

ル説 租税ハ常ニ善ニシテ租税ノ結果ハ常ニ利アリテ更ニ害ナシトスル他ノ論者ノ説ヲ見ルニ租税ハ常ニ人民ノ勤儉努力ヲ強ヒ若クハ之ヲ獎勵スルノ効アリト云フニアリ、租税論ノ著者英國ノマクラック氏ノ如キハ其著書ノ或ル場所ニ於テ此説ヲナシテ云ヘラク人民ノ負擔稍重キ時ハ人民ハ恰モ俄カニ生計費ヲ増加シ若クハ家族ヲ増加シタル時ノ如キ感アリテ大ニ節儉ヲ力ノ勤勉努力シテ其増費ヲ補ハントスルニ至ルヘキヲ以テ租税ハ時トシテ間接ニ人心ヲ鼓舞獎勵シ強心進取ノ氣象ヲ作興スルノ効アリト、氏ハ英國ノ實例ヲ取來リテ一六八八年ノ亂及ヒ一七九三年ノ戦争ハ英國政府ヲシテ巨萬ノ軍費ヲ消費セシメ政府ハコレカ爲メニ大ニ租税ヲ増加シタルニヨリテ英國人民ハ重税メ爲メニ生計ノ地位ヲ低クセンコトヲ恐レテ其勤勉心ハ大

アダム、  
スミス氏  
ノ説ハ之  
ニ反ス

ニ奮興セラレタリ(中略)若シ又第十八世紀ノ末ニ常テ米國獨立ノ爲メニ起リタル戦争及ヒ第十九世紀ノ始メニ當リテ佛國ニ於ケルナボレチン戦争ノ如キ亂ナクンハ英國人民ノ勤儉勉強未々曾テ斯ノ如ク盛ナラサルヘシ如何トナレハ之ヲナサスシテ可ナルヲ以テナリト然ルニ一方ニ於テハアダム、スミス氏ノ言ハマクラック氏ニ反セリ氏ハ其著書ニ於テ一六八八年ノ英國戰亂ノ結果ヲ論シ英國政府カ之レカ爲メニ租税ヲ増加シテ巨額ノ軍費ニ供シタル事ヲ悔ヒテ、コノ巨額ノ資本ヲシテ軍費ニ用フル事ナク人民ニ有セシメハ或ハ荒蕪ノ地ヲ開墾シ或ハ家屋ヲ建築シ或ハ製造所ヲ建設シ器械ヲ裝置シ凡テ生産的ノ事業ニ用ヒラレシナラン此ノ如クシテ農工商一般ノ事業ニ用ヒラレナハ生産ハ益々進歩シ英國ノ富ハ決シテ今日ノ比ヒニアラサルヘシト論斷セリ、然レ此兩説ヲ按スルニ前説ハ畢竟人間ノ萬事ハ其ノ結果常ニ

前説ハ畢

善ナリト信スル<sup>★</sup>世論者ノ考ヘナリ夫レ租税ハアダムス氏ノ説ノ如ク人民ノ手ニアラシムルモ思フニ必ス悉ク生産的ノ事業ニ用ヒラレ資本ノ用ニ供セラル、モノニアラサルヘシ然レトモ又ク或論者ノ説ノ如ク租税ヲ重課スルノ結果ハ常ニ人民ノ勉強心ヲ鼓舞ストハ云フコト能ハスコレ時トシテ或ル害少キ租税ヲ稍重ク課シタル時ニ於テノミ起ル事アリト雖モ畢竟カ、ル二三ノ例ヲ以テ常則トハ見做ス事能ハサルナリ況ヤ人民ノ奮起スルハ租税稍重クレトモ勉ムレハコレニ打テ勝テ得ヘキ時ニアルノミニシテ其負擔非常ニ重ク民力日々ニ疲弊シ到底人民コレニ堪ヘ得サルカ如ク賦課セラル、時ハ失望ノ極却テ自暴自棄ニ陥ルノ例ハ余輩ノ屢々各國ノ歴史ニ於テ見ル所ノ事柄ナルニ於テオヤ

(備考) マグラック氏ハ英國カ佛國ト戰半ハナルニ當テ製造ノ業殊ニ紡

績ノ業大ニ發達セシテ見テ戰亂租税ノ功ハ能ク勤儉勉強ヲ鼓舞スト云ヘル前説ヲ辨スルコトニ於テ稍々力ヲ過キタルモノ、如シ然レモ氏ヲ以テ租税ノ結果ハ常ニ善ナリトノ偏見ヲ抱ケル論者ナリトスルハ抑非ナリ氏ハ他ノ場所ニテハ重歛ノ害ヲ説クニ力ヲ用ヒタリ且ツ他ノ章ニ於テハ前説ノ過實ナルヲ説キテ曰ク凡ソ人民ノ賦課ヲ増シ勤勞節儉進取ノ氣ヲ發達スルハ徐々トシテ之ヲ施コシ漸々トシテ之ヲ行フニアリ決シテ急舉暴行國民ヲシテ其重キニ堪ヘス産ヲ傾ケ家ヲ破ルノ甚シキニ至ラシムヘカラス夫レ人ノ堪フヘシトスル所ノ艱難ハ敢テ之ニ屈セス益精神ヲ勵マシ辛苦ヲ厭ハス千思萬考之ニ勝タンコトカムヘシト雖モ到底忍フヘキノ望ナキ艱難ハ初ヨリ氣ヲ失ヒ敢テ之ニ當ルヲ欲セザルハ人ノ常情ナリ租税ノ賦課非常ニ重キ時ハ以テ民ノ勤勞ヲ獎勵スルニ足ラス初ヨリ之

ヲ避ケンテチカムヘシ孰レノ國孰レノ地方チ問ハス租税ノ賦課非常ニ重ク勤勞節儉ヲ盡スモ能ク之ヲ納ル、<sup>一</sup>能ハサルニ至レハ國民ハ却テ此勤勞節儉ヲ力メスシテ營業退歩シ國勢振ハサルニ至ル古人云ハスヤ壓制ハ能ク人ナシテ英雄タラシメ又能ク奴隸タラシムト租税ノ事タル亦然リ其徵課ノ法ニ據テ能ク人民ノ勤勞ヲ勵マシ進取ノ氣ヲ盛ニシ以テ富ヲ致サシムヘク又能ク懶惰無氣貧困ニ陷ラシムヘシ云々

第三十九節 重税ノ害第一、社會德義上ニ及ホス害 余

輩ハ前段ニ於テ租税ハ常ニ必ス善ナリト云ヘルニ説ヲ破レリ、今ヤ正而ヨリ重税ノ弊害ヲ述ル時ハ實ニ悚然トシテ恐ルヘキモノ多シトス、重税ノ弊害ハ知ラス識ラス屢々人民ノ德義ヲ腐敗セシムルニ至ルコト多シ、例ヘハ所得税法ニ於テハ各自ノ申告ニ因リテ所得額ヲ知ルニ

重税ノ社會德義上ニ及ホス害

アリ、然ルニ若シ課税ノ程度輕ケレハ人民ハ正直ニ其所得高チ申告スルト雖モ若シ税率少シク苛酷ニ過クル時ハ屢々コレヲ隱藏シテ其實ヲ告ケサルニ至ル、營業税ニ於テモ酒煙草ニ課スル消費税ニ於テモ若シ稍重キニ失スル時ハ營業者ハ物品ヲ密造シ密賣スルニ至ル、凡ソ人ハ生命ニ次キテ財産ヲ尊重スル者ナレハ之ヲ失フ程人民ノ厭忌スル者ハアラサルヘシ、故ニ租税ノ重キ時ハ此ノ如キ結果ヲ生スルハ必至ノ理ニシテ敢テ怪ムニ足テサルナリ、殊ニ密賣密輸出入ノ行ハル、ノ太甚シキハ關税ニ於テ殊ニ然リトス、其逋税ノ巧ミナル種々ノ奸曲其間ニ行ハレ實ニ底止スル所ヲ知ラサルナリ、是レ重税ニヨリテ財産ヲ奪ハル、結果ハ人民ヲシテ復タ廉耻ヲ顧ミ德義ヲ守ルニ違アラサラシムルニ因ルモノナリ、故ニ德義ノ敗類ヲ生セサラシメント欲セハ須ラク租税ハコレヲ輕課スルニ加カサルヘキナリ

### 第四十節 第二、經濟上ニ及ホス害 重税ハ社會經濟ノ自

然ノ運行發達ヲ妨害シ人爲チ以テ富財ノ生産分配等ヲ左右スルノ弊  
 アルヤ蓋シ争フヘカラス加之ナラス一國ノ生産力ヲ弱メ生産ヲ抑制  
 シ貯蓄ヲ妨ケ資本ヲ減殺スルニ至ルコトアリ甚シキハ國民ノ外移ヲ  
 促シ或ハ財產家ヲシテ外國ニ資本ヲ輸出セシムルニ至ル假令此ノ如  
 キ弊害ノ極ニ至ラサルモ人民ノ營業ニ種々ノ束縛ヲ加ヘ煩累ヲ與ヘ  
 生産ヲ障碍スルコトアルハ輕税ノ時ニ於テモ免レカタキ所ナリトス  
 況ヤ重税交々至ルトキハ單ニ一國ノ資本ヲ外國ニ驅逐スルノミナラ  
 ス人民自ラ外國ニ移リ産ヲ失ヒ妻子兄弟他郷ニ離散スルニ至ルカ、  
 ル例ハ余カ輩屢々史上ニ看ル所ナリ夫ノ第十七世紀ノ末路和蘭ノ衰  
 退セシハ主トシテ重税ノ爲ノニ人民ノ外國ニ離散セシニ職由セスン  
 ハアラス又一八七一年以來佛國ノ多種ノ工業ハ租税ノ爲ニ其損害ヲ

蒙ルコト鮮少ナラサルヲ以テ遂ニ外國ニ製造所ヲ移スニ至レリ亦ク  
 彼ノ西班牙ノ衰退セシモ主トシテ萬般ノ消費物品ニ一割乃至一割四  
 分ノ重キ税率ヲ以テ賦課シタルアルカヴラ税ノ影響ニ販スヘキナリ  
 又タ我國封縣割據ノ時代ニ於テ人民ハ故郷ノ一小天地ヲ家トシテ一  
 歩タモ其外ニ出ルニ忍ヒサリシ時世ニ於テステ尙ホ苛斂重税ノタメ  
 ニハ決然故土ヲ棄テ、遠ク他郷ニ流離セシニアラスヤ其例証一々數  
 フルニ違アラサルナリ之ヲ要スルニ重税ノ經濟上ニ及ホス弊害ハ第  
 一ニ生産ヲ妨ケ分配ヲ左右シ第二貯蓄ヲ減シ資本ノ集合ヲ妨グルコ  
 ト第三資本勞力ノ外移ヲ促カス等コレナリ猶ホ加フルニ下民ノ必要  
 ナル消費品ニ租税ヲ課スルトキハ之ヲ製造スルニ多クノ勞力ト費用  
 ヲ要スルニ至リシ時ト等シク物價騰貴シ下民ハ賃銀ノ下落シタル時  
 ト等シク生計活路愈困究スルニ至ルヘキナリ

重斂ハ常ニ政治上ノ原因ナリ

ガルニエ  
氏ノ言

### 第四十一節

### 第三政治上ニ及ホス害

猶ホ一步ヲ進メテ

重斂ノ政治上ニ及ホス影響ヲ見ルトキハ一層其害ノ恐ルヘキモノアリ則チ重斂ハ常ニ政治上ノ原因タル事コレナリ余輩ハ各國ノ史乘ヲ案シテ其苛斂之カ原因トナリテ内亂ヲ生シ政府ヲ轉覆シ國主ヲ虐殺スルニ至リタル例証ノ甚タ乏シカラサルヲ見ルナリ、カルニエー氏此事ヲ論シテ曰ク凡ソ人民ノ怨謗ハ殊ニ聚斂ノ苛酷ヨリ生ス、而シテ其國家ノ治亂安危ニ關スルモノ亦之ヨリ甚タシキハナシ、故ニ下民ノ自由ヲ得ント欲シテ陸續奮起セシモ夫ノ基督教中ニ於テカソリツ、グ、ロテスタント兩教派ノ分離セシモ皆是理財上ノ原因ニ根基スルモノナリ合衆國ノ本國ヨリ分離セシモ聚斂苛酷ヨリ起リ佛蘭西革命ヲ速カニセシモ理財上ノ紛亂ヨリ起レリ云々ト以テ重稅常ニ禍亂ノ原因ヲナセルノ一斑ヲ窺フニ足ルヘシ、假令重斂ノ害此ノ如ク甚タシ

租稅ノ不生  
途ハ不生  
產的ハ不生  
力故トス  
ナリトス  
ルハ生  
部ハ生  
的ハ生  
セラル

キニ至ラサルモ收稅ノ爲ノニハ官民ノ紛爭軋轢須臾モ絶エサルハ吾人日常見聞スル所ニ徴シテ既ニ明カナルニアラスヤ

### 第四十二節

### 租稅ハ不善ナリト云ヘル説

租稅ハ常ニ善

ニシテ絶テ害ナシト云フハ甚タシキ謬見タル所以チ余輩已ニ既ニ前段ニ述ヘタリ加之ナラス重稅ヨリ生スヘキ眞ノ弊害ヲモ併セテ之ヲ列舉シタリ然ルニ茲ニ復タ他ノ一方ニ偏シタル論者アリテ租稅ハ徹頭徹尾不善ニシテ絶テ利ナシ、寧ロ之ヲ最輕點ニ減スルニ如クハナシト主張スルモノアリ曰ク租稅ハ之ヲ人民ノ手ニアラシムレハ生産ニ供セラレ資本トシテ使用セラル、モ之ヲ政府ニ引上ル時ハ悉ク不生産的ニ消費セラル止熟々此ノ説ノ當否ヲ案スルニ租稅ハ果シテ論者ノ言ノ如ク悉ク不生産的ニ消費セラル、ヤ余輩ハ其一部分ハ經濟學上ニ所謂生産的ニ用ヒラル、ヲ見ル則官工官業郵便電信鐵道製造事

不生產的  
使用ト雖  
必要ナ  
リ

業ニ用ヒラル、租税ハ通常資本ト等シク再々ヒ有形ノ富財ヲ生産ス  
ルニアリ、去レハ是等ノ業ニ用ヒラル、租税ハ則チ生産的ニ消費セテ  
ル、モノニ非スシテ何ソヤ又タ政府カ國民ノ生命財產ノ安固ヲ謀  
ル國家ノ保安ヲ維持スルカ爲メニ常備軍ヲ置キ裁判所ヲ設ケ警察事務  
ヲ行フカ如キ事ニ租税ヲ用ユル時ハ之レ直接ニ有形ノ富ヲ生産スル  
トハ云ヒ難シト雖、之カ爲メニ國民ハ無形ノ幸福ヲ増シ社會ハ無形  
ノ利益ヲ享有スルカ故ニ之ヲ間接ニ社會ノ有形ナル富ノ生産ヲ資ク  
ルノ消費ト云フニ於テ毫モ太過ナカルヘシ、唯獨リ戰爭ノ爲メニ起シ  
タル國債ノ利子ヲ拂ヒ、若クハ元金ヲ償還スル爲メニ費ス所ノ租税ハ  
之ヲ不生產的支出ト云ハ、云フヘシ是レ併シナカラ國家ノ獨立ヲ保  
チ國家ノ安寧名譽ヲ保持スルカ爲メニ爲シ、戰爭ノ費用ナレハ強チ  
不生產的消費ナリトテ之ヲ排撃スルニ及ハサルヘシ何トナレハ此等

租税ハ必  
スシテ最  
輕ナルヲ  
要セス

ハ國家萬止ムヲ得サルニ出タルモノナレハナリ、由是觀之租税ノ消費  
ハ不生產的ナルカ故ニ害アルノミニテ絶テ利益ナシトスルノ説ハ單  
ニ經濟ノ一邊ヨリ國家ヲ觀察シタル偏見タルヲ免レサルナリ

### 第四十三節 最輕ノ租税ハ必シモ最良ノ租税ニアラ

ス 前節ニ述ヘシ如ク租税ヲ徹頭徹尾不善ナリトスル論者ハ常ニ  
租税ハ最輕ナラント欲シ最輕ノ租税ハ最良ノ租税ナリト考フルモ  
ノ、如シ夫レ租税ハ重キニ失センヨリハ寧ロ輕キニ失スルノ遙ニ勝  
レルニ如カスト雖、若シ税制善良ニシテ國民負擔ノ重キヲ嘆ヒス又  
税法ニシテ甚タシク生産ヲ抑制シ營業ヲ障害シ人民ノ德義ヲ腐敗セシ  
ムルカ如キトナクンハ必スシモ租税ハ之ヲ最輕點ニマテ輕減スルヲ  
要セサルナリ、顧フニ國家ノ職務ハ單ニ人民ノ權利生命財產等ヲ安全  
ニ保護スル消極的ノ事務ニノミ限レリトセシ狹隘ナル國家ノ解釋行



ハレタル當時ニアリテハ租税ハ其警察裁判等ニ必要ナル經費ヲ拂フ丈  
 ケ徵集スルヲ以テ足レリトシタルナラン然レモ今日國家ノ職務ハ單ニ  
 消極的ノ事ノミニ止マラス猶ホ進ンテ公益公益ノ事業ハ政府自ラ取  
 テ爲スヘキノ理顯然掩フヘカラサルニ至リタレハ若シ之ヲ一私人若  
 クハ私立會社ニ放任シテ完全ナル結果ヲ得ラレサル事業アルモハ設  
 ヒ稍租税ヲ重フスルモ政府ハ自ラ進ンテ之ヲ爲スヘキナリ其ノ積極  
 的職務ノ著シキモノハ教育ノ如キ衛生ノ如キ築港ノ如キ燈明臺ヲ設  
 置スルカ如キ兵備上欠クヘカラサル鐵道ヲ敷設スルカ如キ等はナリ  
 實ニ租税ハ一方ヨリ見ルモ強迫貯蓄ノ一良法ニシテ蓋シ國富民繁  
 榮ナルトキハ如何ニ租税ヲ最少點ニ減スルモ人民ハ必スシモ其輕減  
 セラレタル額ヲ生産的ニ使用スルモノニアラス或ハ奢侈ニ用ヒテ之  
 ヲ浪費スルモノ少カラサルヘシ此ノ時ニ方リテ若シ政府ニシテ銳意

租税ハ強  
 迫貯蓄ノ  
 一良法ナリ

熱心公利公福ノ爲メニ事業ヲ經營シ之ヲ政府ニ聚メテ鐵道ノ如キ築  
 港ノ如キ專ラ有益ナル大土工ニ供セハ其ノ國家ヲ益スル實ニ尠少ナ  
 ラストセヌ是レ則チ租税ハ強迫貯蓄ノ一大良法タル所以ナリ然レモ  
 若シ國民貧ニシテ既ニ其負擔ノ重キヲ訴フルニ至ラハ政府ハ如何ニ  
 有益ナル事業ト雖モ斷然之ヲ停止シテ再ヒ民力ヲ休養シ其國富ノ發  
 達ヲ俟ツヘキハ復タ多言ヲ須ヒスシテ明白ナリトス  
 以上論述セシトコロヲ約言スレハ租税ハ常ニ必スシモ善ニシテ利ア  
 リトモ又常ニ必スシモ不善ニシテ害アリトモ斷定スルヲ能ハス唯其  
 ノ善惡利害ノ分ル、所ハ其租税ノ使用其賦課ノ方法及ヒ其徵課ノ輕  
 重如何ニアルモノトス請フ次章ニ於テハ其徵課ノ程度ニ就キ聊カ述  
 ル所アラントス

### 第三章 租稅徵課ノ程度

#### 第四十四節 租稅徵課ノ程度ハ何ニ憑テ定ムヘキカ

行政費ノ  
租稅徵課ノ  
程度ヲ定  
ムルハ困難  
ナリ

租稅ハ巨大ナル利益ヲ社會ニ生シ又時トシテハ非常ナル害毒ヲ社會ニ流スニ至ル是畢竟其徵課ノ輕重如何及其徵課ノ程度如何ニ由テ分ル、者ナリトハ前章ニ於テ既ニ陳ヘタル所ナリ然ラハ則チ租稅徵課ノ程度トハ何ヲ云フカ又何ヲカ重欲ト云ヒ何ヲカ輕欲ト云フヤ是將ニ余カ此章ニ於テ研究セントスル所ノ問題ナリ或ル財政學者ハ云ヘラク租稅徵課ノ程度ハ豫メ理論ヲ以テ定メ得ヘシト而シテ其程度ハ之ヲ政府ノ經費ノ點ヨリ觀察シテ定ムヘシトグ<sup>ギ</sup>氏ノ如キハ此種ノ論者ナリ氏ノ言ニ曰ク「租稅ニ最低點アリ最高點アリ最低點トハ

何ソヤ行政上ニ於テ欠ヘカラサル額是レナリ之ニ反シ最高點トハ人民若クハ會社カ之ヲ行フニ難スル所ノ者ニシテ政府カ之ヲ爲スニ易キ百般有益ノ事業ヲ起スニ要用ナル總額是ナリトエツワール、ビーヌ氏ノ如キモ之ニ類似セル說ヲナシテ政府カ租稅ヲ徵課スルニ當リテハ第一政府ニ須要ナル經費ヲ支フルノ額ハ之ヲ得サルヘカラスト即チ須要ノ經費ヲ以テ最低點ト爲ス者ナリ而シテ氏ハ第二ニ租稅ヲ徵課スルニ何レノ點マテ徵課スヘキヤト云フニ答テ之ヲ人民若クハ會社ニ委任スルヨリハ寧ロ政府ニ於テ爲ス方社會ニ利益アリト思惟セラシ、事業ヲ爲スタメニハ租稅ヲ増加スルヲ得ト云ヘリ即チ氏ハ有益ノ經費ヲ以テ最高點トナスモノ、如シ此等ノ說タルヤ理論上甚タ巧ミナリト雖モ惜ラクハ不幸ニシテ實地ニ迂濶ナルヲボリ、<sup>ユ</sup>氏ノ駁論ハ以テ其謬點ヲ示スニ足ルヘシ氏曰ク

其妄ヲ辨ス

論者ハ何等ノ事業ヲ以テ行政上ニ欠ク可ラサル者即チ必要ノ經費トナスカ余輩ハ之ヲ定ムルニ苦ムナリ凡ソ人種ヲ異ニシ氣候ヲ異ニシ開明ノ度ヲ異ニセハ行政ノ事務モ又從テ異ナラサル可ラス即匈牙利ノ魯西亞ニ於ケル魯西亞ノ墾地利若クハ以太利ニ於ケル以太利ノ佛蘭西若クハ日耳曼ニ於ケルカ如キ是ナリ凡政府カ國家民衆ノ財產ヲ保佑スルヤ自カラ過不及ナキ能ハス乃チ東西必ス法ヲ異ニシ南北必ス式ヲ同フセサルナリ顧テ最高點ヲ見レハ何等ノ事業果シテ人民カ之ヲ行フニ難ク政府カ之ヲ爲スニ易キモノ(有益ノ經費)ナルヤ又均シク之ヲ知リ易カラサルナリ然ラハ則チ此說タル奇巧ハ則チ奇巧ナリト雖モ以テ之ヲ用ヒント欲セハ曖昧模糊トシテ未タ其適從スル所ヲ知ラサルナリトホリニ氏ハ余カ前ニ陳述セシ必要ノ經費ト有益ノ經費ノ分界ヲ知リ易カラサルノ故ヲ以テ租稅ノ程度ハ經費ノ最低點ト

最高點トチ以テ定ムヘシト云ヘル說ノ實地ニ迂ナルヲ排撃シタルモノナリ

故ニ租稅徵課ノ程度ヲ政府ノ經費ノ點ヨリ觀察シテ定メントスルハ非ナリ然ラハ則チ租稅ノ程度ハ何ニ憑テ定ムヘキヤ抑租稅ハ其來ル所人民私有財產ノ一部ニ在ル者ナレハ之ヲ人民ノ財產ニ比較シ以テ得タル比例ニ準シ其經費ヲ定ムヘシトナス說アリ其說ヤ稍當ヲ得タル者ナレモ之速モ理論ヲ以テ其比例ヲ知ルヘキニアラス唯僅カニ各國ノ實例ヲ比較ノ實際上ヨリ概念ヲ作ルニ過キサルナリ請フ次節ニ於テ之ヲ細論モン

第四十五節 租稅ヲ人口ニ割當テ、一人ノ負擔額ヲ見

ル法 世人往々租稅負擔ノ輕重ヲ計ルニ之レヲ人口ニ割當テ而シテ一人ノ負擔額ヲ知リ以テ其輕重ヲ論スルモノアリ之レ直接ニ租稅徵

各國人民  
一人ノ負擔額

課ノ程度ヲ知ルノ方法ニアラサレモ亦世人ノ慣用セルモノナレハ茲ニ其方法ニ據リテ計出セル各國ノ租稅比較統計表ヲ示ス左ノ如シ

各一人ニ付キ租稅負擔額

佛蘭西	一九三〇
英吉利	一七八〇
北合衆國	一五三〇
以太利	一三〇〇
和蘭	一三〇〇
白耳義	一二五〇
西班牙	一二三〇
日耳曼	一一五〇
丁抹	一〇三〇

一人ノ負擔額ハ租稅ノ輕重ヲ示スニ足ラサルナリ

埃地利	一〇〇〇
葡萄牙	九八〇
瑞典、諾威	八〇〇
魯西亞	五〇〇
日本	二五三

(右表ハ一八八四年出版マルホール統計字典四三六頁ニ據ル)

右ノ表ニ據ルルハ日本ノ如キハ殊ニ輕稅ニシテ現今歐洲ニ於テ重稅ト稱セラル、以太利ノ如キモ之ヲ英佛ニ比シテ尙ホ輕稅ト云ハサルヘカラス然レモ此方法ハ只人口一人ニ付テノ負擔額ヲ示スニ止マリテ眞ニ其負擔ノ人民ヲ壓スル輕重如何ヲ示スニ足ラサルナリ何トナレハ同一ノ人口ヲ有スル國ト雖モ必スシモ其貧富ノ度一ナラス人口ハ倍スルモ富ノ度ハ却テ劣レル國アリ同シ一圓ノ負擔モ或ル國民ハ

各國資本ノ額ニ對スル租稅ノ比例ヲ見ル法

之レニ堪ヘルヲ輕ク或ル國民ハ之ニ堪ヘルヲ重キカ如キトアルハ明白ナレハナリ故ニ世間此方法ニ由テ租稅負擔ノ輕重ヲ論セント欲スルカ如キ人アラハ是レ大ニ其當ヲ失シタルモノト云ハサルヘカラス

**第四十六節 租稅ヲ資本ノ總額ニ比スル法** 租稅ハ國民私有財產ノ一部ヨリ來ル者ナレハ租稅ヲ人民ノ財產ニ比較シ以テ得タル比例ニ準シテ其輕重ヲ判スルハ稍其當ヲ得タル者ナリトハ前ニ述ヘシカ其財產ト比較スルニ當リ之ヲ資本ノ總額ニ比較スルハ果テ正確ナリヤ否余輩ハ往々斯ル比較法ヲ見レテ是レ亦其當ヲ得タル者トハ云フ能ハサルカ如シ何トナレハ假リニ二國資本ノ高ニ於テ同一ナリトスルモ其資本ヨリ生出スル一國ノ生産物ハ必シモ一樣ナルト能ハサルト等ク各國ノ所得高モ亦同一ナラサルヘケレハナリ凡ソ租稅ハ概シテ各人ノ所得ヨリ出ツル者ナレハ之ヲ資本ノ總額ニ比スル

租稅ヲ各國民ノ所得ニ比シテ其輕重ヲ判スル法

ボリユー氏ノ說ニヨレハ白

決(モ)シテ租稅負擔ノ眞ノ輕重ヲ判スルヲ能ハサルヘシ然ラハ則チ如何ンセハ其負擔ノ輕重ヲ知ルニ最モ適當ナル方法ナリヤト云フニ余輩ハ矢張り或ル財政學者ノ用非タル如ク之ヲ國民ノ歲入所得ノ總額ニ比較スル方法ノ優レルヲ信スルナリ

**第四十七節 租稅ヲ國民所得ノ總額ニ比較スル法** 租稅

カ國民ヲ壓スルノ輕重ヲ知ルニハ之ヲ國民ノ富財產ニ比較スルニ如クハナシ而シテ租稅ハ固ト各人民ノ所得ヨリ來ルモノナレハ之ヲ國民ノ所得ニ比較スルニ如クハナシ然レモ豫メ理論ヲ以テ其租稅カ國家總所得ノ幾分ニ當レルトハ重シトカ輕シトカ之ヲ定ムルトハ極メテ困難ナリ故ニ其比較ハ之ヲ各國ノ實例ニ就テ爲シ而シテ其比例ニ付テ略租稅徵課ノ程度ヲ見ルヲ得ヘキナリボリユー氏ハ氏ノ著書財政論ニ於テ綿密ナル比較ヲナシテ結局實際上ヨリ租稅徵課ノ程度

耳義ノ租  
稅ハ國民  
歲入ノ六  
分ニ當ル

佛國ニ於  
テハ一割  
二分五厘

英國ハ八  
分ニ當ル

ヲ定メ得ヘシトナセリ氏ハ一八七四年ノ豫算ニ出タル白耳義政府ノ租稅(租稅以外ノ收入ハ盡ク扣除セリ)ヲ同國民ノ歲入ニ比例シテ略其六分ニ當レルモノナレハ頗ル輕稅ニシテ之ヲ歐洲全國ニ求ムルニ此ノ如ク租稅ノ輕キ者ヲ見スト論斷シテ五六分ヲ以テ租稅ノ最輕點トセリ次ニ氏ハ一八七七年佛國政府ノ豫算ニ出タル租稅ヲ以テ同國民ノ歲入ニ比例シテ殆ント一割二分五厘ニ當ルト説キ而シテ之ヲ以テ最高點トシ此ノ如キ租稅ハ輕稅ニ非スト雖凡國民力尙ホ堪ヘ得ヘキノ租稅ナリ若シ之ヲ過クルニ至レハ國民ハ縱ヒ能ク其賦課ニ堪ユルモ國家ニ於ケル富ノ進歩ハ必ス遲滯ヲ免レサルヘク且ツ重斂ノ弊害並ヒ起ラント論斷セリ而シテ氏ハ亦タ一八七三年度ノ英國政府ノ租稅ヲ其國民ノ歲入ニ比較シテ凡ソ八分ニ當レルモノトシ之ヲ以テ白耳義ト佛國ノ中間ニアルモノナリトセリ而シテ尙ホ終リニ臨ンテ一割

五分若クハ一割六分マテハ尙ホ恕スヘキモ若シ此程度ヲ超過スルトキハ人民ニ害アルノミナラス國民資本ヲ外國ニ逐ヒ殆ント回復スヘカラサルニ至ルヘシ方今以太利ノ租稅ハ殆ント極點ニ達シ大ニ社會ヲ亂タセリ只ニ社會ヲ亂タスノミナラス稅法モ亦從テ亂レ私曲好計從テ起リ其弊ヤ實ニ云フヘカラサルニ至レリト説ケリ氏ノ説果シテ當レリヤ否ヤ斷言シカタク雖凡之ヲ各國ノ事實ニ徵シテ見ルトキハ稍租稅徵課ノ程度ヲ見ルノ標準トナスニ足ルモノ、如シ然レトモ各國ノ租稅ト各國民所得ノ比例トハ到底正確ニ知リ得ヘカラサルモノナルカ故ニ此ノ比例ト雖トモ只タ其ノ概略ヲ示セルニ過キス併シナガラ此ノ如キ比例ハ租稅ノ輕重ヲ計ルニ必要ナルモノナレハ請フ備考ノ爲メ余カ得タル一統計表ヲ左ニ示サン(統計集誌第四十五號ヨリ拔萃)

各國々民  
ノ所得ト  
租稅トノ  
比例

國名	國民所得	租稅	百分比例
伊太利	一一三〇〇〇	三、九五〇〇	三五、〇
奧地利	二一、二五〇〇	四、一〇〇〇	一九、三
葡萄牙	一、六〇〇〇	二、八〇八	一七、五
西班牙	八、七五〇〇	一、五二九五	一七、四
佛蘭西	四六、五〇〇〇	七、五〇〇〇	一六、四
魯西亞	三五、一〇〇〇	四、五〇〇〇	一六、〇
日耳曼	二八、〇〇〇〇	五、三〇〇〇	一五、〇
日本	六、八七九八	九、二六八	一三、五
英吉利	五六、〇〇〇〇	六、九〇〇〇	一二、一
瑞典	三〇、四〇〇	三、三三六	一〇、二
和蘭	六、二五〇〇	六、二五三	一〇、〇

百七十

北合衆國	七二、四五〇〇	七、三〇〇〇	一〇、〇
白耳義	六、三〇〇〇	六、一三八	九、七
諾威	一、五五〇〇	一、二七四	八、四
丁抹	二、〇五〇〇	一、三六四	六、八

右ノ表ニ掲ケタルモノト雖凡國民ノ所得高及ヒ租稅ノ如キニ至リテハ果シテ正確ナリヤ否十分保證スルヲ能ハサルナリ然レ凡此表ニ據ルキハ伊太利ノ如キハ租稅徵課ノ程度ヲ超過シ事實上弊害ヲ生スルノ亦偶然ニアラサルヲ知ルヘク佛蘭西ノ如キハ一割六分ニシテボリユ一氏ノ所謂最高ノ程度ニ達シタルモノニシテ若シ此度ヲ超過スレハ重斂ノ弊必ス生スヘキヤ明カナリ右表ニ於ケル比例ハ概シテボリユ一氏ノ計算ヨリモ多シトス是レ蓋シ年度ノ今日ニ近キニ由リテ各國ノ經費租稅ノ増加セシト又々右ノ表ニ於テハ租稅ト云ヘル項ヨリ

租税ノ程度ハ實際ノ上ヨリ之ヲ定ムルノ外ナシ

純粹ノ租税ニアラサルモノヲ除カサルトニ由ルナルヘシ之ヲ要スルニ租税徵課ノ程度ハ必須ナル經費若クハ有益ナル經費ヲ標準トシテ定ムルト至テ難シ去レハトテ之ヲ人口ニ割當テ資本ニ比較シ所得ニ比較シテ定ムルトモ亦甚タ難シト雖元來租税ノ出ツル淵源ハ各人ノ所得ニアルヲ以テ先ツ之ヲ所得ニ比較スルヲ以テ最モ其實ニ近キモノトナサ、ルヘカラス然レモ各人ノ所得ニハ總收入グロウプ、インカムアリ純收入ネット、インカムアリ總收入ハ知リ易キモ純收入ノ如キニ至リテハ尤モ知ルニ難シ亦タ純所得中ヨリ生計ノ必要費ヲ引去リテ更ニ之ヲ貯蓄スルモ贅澤ニ浪費スルモ自由ナル餘裕則チ隨意所得フレイ、インカムノ如キハ各人何程ヲ餘スヤ到底知リ難キナリ然ラハ則チ租税ヲ以テ各人所得ノ幾割幾分ヲ奪フモ未タ各人ノ貯蓄ヲ甚タシク妨クルニ至ラス又幾割迄ハ各人生計ノ必要費ヲ奪フニ至ラストイヘルカ如キ確乎精密ナル比例ニ至リテハ到底

理論ヲ以テ之ヲ定ムルト能ハサルナリ故ニ余輩ハ唯各國々民ノ負擔スル租税ノ割合ト其國民苦痛ノ度ノ實況如何等ヲ比較シテ概略租税徵課ノ程度ハ何程ナルヘキヤヲ推知スルニ過キサルナリ



### 第四章 租税ニ關スル諸種ノ名辭

被稅者トハ何ソヤ

#### 第四十八節 被稅者

稅制ヲ布テ租稅ヲ人民ニ賦課シ之ヲ徵收スルニ方リテハ勢ヒ種々ノ租稅ニ關スルモノナキヲ得ス茲ニ稅制ニ關スル種々ノ名辭ニ付テ先ツ明解ヲ附スルハ蓋シ無用ノ業ニアラサルヘシ余カ第一ニ解釋ヲ與ヘントスルハ被稅者是ナリ被稅者トハ租稅ノ主格タルモノニシテ政府ヨリ租稅ヲ賦課徵收セラル、人ヲ云フナリ則チ之ヲ分ツトハ二種トスルヲ得曰ク

##### 第一納稅者

##### 第二負稅者

是ナリ納稅者トハ直接ニ政府ニ租稅ヲ上納スルモノヲ云フ則チ其者

納稅者トハ何ソヤ

カ課稅物件ヲ所有スルカ或ハ課稅セラルヘキ人カ若クハ課稅セラルヘキ行爲ヲナスカニ由レルモノニシテ政府ハ其人ノ姓名及ヒ納稅額ノ如キハ之ヲ明カニ政府ノ帳簿ニ記入シ其人ニ向テ租稅ノ上納ヲ請求スルナリ則チ地租臺帳ニ記入セラレタル地主或ハ其姓名ト年々ノ造石高ヲ政府ノ帳簿ニ記入セラレタル酒造家ノ如キハ即チ納稅者ニシテ凡テ課稅物件カ檢査ヲ受クヘキモノナレハ檢査ノ衝ニ當リ納稅ヲ怠レハ或ハ督促セラレ若シ又納稅ノ義務ヲ果サレハ處分ヲ受クヘキ人ヲ云フ

次ニ負稅者トハ實際ニ於テ租稅ヲ負擔シ自己ノ懷中ヨリ租稅ヲ拂フ人ヲ云フナリ故ニ負稅者ハ納稅者ト異ナリテ其姓名ハ政府ノ帳簿ニ記入セラレズ又政府ヨリ直接ニ上納ヲ命セラレスト雖モ眞ニ租稅ヲ負擔スル人ナレハ之ヲ負稅者トハ云フナリ故ニ負稅者ト納稅者トハ音

ニ區別スヘキモノナレトモ必スシモ同一ノ人ニアラスト云フコト得  
 ス去レハ時トシテハ納税者ニシテ同時ニ負税者タルコトアリ又時トシ  
 テハ納税者ニアラストシテ負税者タルコトアリ試ミニ例セハ地租ノ場合  
 ニ於テハ地主ハ其姓名ヲ政府ノ帳簿ニ記入セラレ納税ノ金額モ確定  
 セラレ即チ政府督促ノ衝ニ當レルモノニシテ是レ納税者ナレトモ又  
 同時ニ地租ハ自己ノ收入スル地代ヨリ拂フヲ以テ負税者トハナルナ  
 リ然ルニ之ニ反シテ酒造家ノ納ムル造石税ノ場合ニ於テハ酒造ノ檢  
 査ヲ受ケ年々ノ造石高ヲ帳簿ニ記入セラレ直接ニ上納ノ義務ヲ有ス  
 ルモノ即チ酒造家ナレハ是レ納税者ナレト若シ酒造家カ租税ノカ  
 リタルト同時ニ酒ノ代價ヲ引上ケ其租税ヲ酒ノ代價ニ籠メテ購買者  
 ヨリ之ヲ回収スル時ハ實際ニ租税ヲ拂フ人ハ酒ヲ購フテ飲ム人トナ  
 ルカ故ニ斯カル場合ニハ酒ヲ釀造スル者ハ納税者ニシテ負税者ニア

課税物件  
ノ解

ラス酒ヲ消費スルモノハ納税者ニアラストシテ負税者タリ則チ納税者  
 負税者判然別人ノ場合ナリ

第四十九節 課税物件 ノ目的物ノ謂ヒニ

シテ政府カ課税スルニ當リテ其租税ヲ賦課スル基本トシテ標準トシ  
 テ撰擇スル所ノ物件ヲ云フナリ抑々租税ハ各人ノ財力ニ應シテ各人  
 ノ富ニ課スルトハ云フモノ、政府ハ何ニ憑テ課税スヘキヤ將タ何チ  
 目安トシテ富ノ額ヲ算出スヘキヤ是レ課税物件ノ必要ナル所以ニシ  
 テ乃チ各人ノ富ヲ表示スルノ標準ヲ求ムル所以ナリ今日ニ於テハ各  
 國共ニ數種ノ課税物件アレトモ社會ノ未タ進歩セサル時ニ在リテハ  
 凡テ事物ノ簡單ヲ尊フカ故ニ課税物件ノ數モ隨テ少ク甚タシキハ唯  
 一ノミノコトアリキ第十八世紀ノ頃ニ重農學派フヒヤクシヤノ士カ地租單一税ヲ主  
 張セシカ如キハ課税物件ヲ土地トイヘル一物ニ定メント試ミタル例

課税物件  
選擇ノ必  
要ナルヲ

ナリ然ラハ則チ若シ課税物件ヲ唯一ニシテ夫ニテ租税ノ普及ヲ望ム  
ヘケンハ單一税説モ亦可ナリト雖モ如何セン富ハ土地ノミニ限ラス  
土地ヲ有セサル人ニモ租税ヲ賦課セサルヘカラサル必要アルヲ以テ  
課税物件モ亦一ニ限ルヲ能ハサルナリ故ニ租税ヲ國民一般ニ公平ニ普  
及セシムルト否トモ課税物件ノ選擇如何ニアレハ國庫ニ十分ノ収入  
ヲ得ルト否ヲサルト國民ノ怨恨ヲ招クト招カサルトモ亦實ニ此課税  
物件ノ選擇如何ニアルナリ然レハ課税物件ノ種類配合ノ如何ハ國家  
ノ財政上經濟上ニ種々ノ影響ヲ及ホスヘケレトモ課税物件ノ種類ハ  
必スシモ何々ニ限ラサルヘカラスト云フノ理ナシ則チ主權者ノ管轄  
内ニ屬スルモノハ如何ナル物件ト雖モ課税物件タルヲ得ルナリ往  
昔ハ主權者則チ君王ノ意志次第租税ヲ賦課セシテ以テ往々奇異ナル  
課税物件ナキニアラス佞令ハ人ソレ自身ヲ課税物件トシテ人頭税ヲ

課税物件  
ノ種類ニ  
及スル  
財產人  
ノ行為  
ノ三  
種アリ

課セシカ如ク猶ホ甚タシキハ之ニ飽足ラスシテ人ノ手足ニモ課税セ  
ント欲セシカ如シ或ハ英國ニ於テ徽章ヲ以テ課税物件トシテ徽章税  
ヲ課セシ如キハ實ニ奇異ノ感ナキ能ハサルナリ

**第五十節 課税物件ノ種類** 課税物件ハ何ト限ラサル故其

種類ハ甚タ多クシテ之ヲ列擧スルニ亦甚タ困難ナレトモ先ツ之ヲ大  
別スルトキハ左ノ三種トナルヘシ

第一 財產 (資本、土地、家屋、牛、馬、車、船等及ヒ茲ニハ財產ヲ廣キ意  
味ニ解シテ所得ヲモ包含セシム)

第二 人若クハ戸

第三 行為

茲ニ財產ト稱スルハ廣ク所有ノ動産不動産及ヒ他ヨリ得ル所ノ財產  
ヲモ包含セリ又タ人ヲ以テ課税物件トスルハ分頭税ノ例ニ於ケルカ

如シ又タ一戸則チ一家族ヲ以テ立國ノ基礎トシ社會ノ單位トスル所ニハ戸ヲ以テ課稅物件トシ戸毎ニ課稅スルコトアルハ本邦戸數割ノ例ニ於ケルカ如シ又タ人ノ行爲ニハ種々ノ行爲ニ課稅セラル、ナリ例ヘハ物品ノ消費ニ向テ消費稅ヲ課シ或ハ財産ノ移轉(則チ賣買贈與遺傳等)ニ稅ヲ課シ或ハ牛馬賣買營業ニ營業免許稅ヲ課シ或ハ酒造營業ニ營業稅ヲ課スルカ如キ皆ナ行爲ニ課稅スルモノナリ

第五十一節 各國ニ於ケル重ナル課稅物件 課稅物件

ノ種類ハ甚多ケレトモ各國政府カ採用シタル課稅物件ノ種類ニ至リテハ概テ大同小異ニシテ略ホ其軌ヲ一ニスルヲ見ルナリ其重ナルモノヲ舉レハ(第一)土地トス土地ハ今日ニ於テコソ各人純粹ナル所有權ヲ其上ニ立テタレ往古ニアリテハ土地ハ共有財産ニシテ又タ近世ニ至ルマテハ其所有權君主ニ販シ居タルヲ以テ土地ハ最モ早ク課稅物件

重ナル課稅物件

土地

家屋

所得

動產

人身

消費

トナリ本邦ニ於テモ又タ何レノ所ヲ問ハス君主ハ土地ヨリ貢物ヲ納メシメシヲ見ルナリ殊ニ佛國ノ重農學派ノ士ノ如キハ土地單稅說ヲ主張シタルハ余カ前ニ述ヘシ如シ今日ト雖モ日本英佛普魯士北米合衆國地租伊太利等地租ナキ國ハ殆トナカルヘシ(第二)家屋 家屋ハ財産中主ナル課稅物件ナリ上ニ舉ケタル七ヶ國中家屋ニ課稅セサルハ日本及ヒ合衆國ニ一般ノ家屋稅ナキノミナリ(第三)各人ノ所得ヲ課稅物件トナスコト諸國ニ行ハル右ノ七ヶ國中合衆國及ヒ佛蘭西ニ一般ノ所得稅ナキノミナリ曾テ合衆國ニ於テモ一度ハ所得稅存シタリキ(第四)動產モ主ナル課稅物件ノ一ナリ株券貸付證書其他利子ヲ生スル證書類及ヒ使用動產則チ車馬等ニハ各國租稅アリトス次ニ人ヲ課稅物件トスルコトハ分頭稅ノ例是レナリ亦タ人ノ行爲ニ至リテハ(第一)消費ニ稅アリ各國消費稅ナキハナシ只其稅セラル、消費物品ノ數ノ多

財產ノ移轉

營業

何ソヤ  
稅源トハ

稅源トハ  
稅物ト關係

少アルノミ酒類ノ如キ煙草ノ如キ茶咖啡ノ如キ飲料品砂糖鹽ノ如キハ課稅セラル、消費物品中ノ重ナルモノナリ(第二)財產ノ移轉ニ至リテハ賣買讓與遺傳等其重モナルモノナリ(第三)營業ノ如キ行爲モ課稅物件ノ重モナルモノ、一ニ居ルナリ亦タ同シク消費稅ヲ課スルニモ物品ノ運搬ニ於ケル中途ニ課稅スルモノアリ則チ入市稅ノ如キ亦タ各國一様ニ課稅スル輸出入物品ニ於ケル關稅ノ如キ是レナリ

第五十二節

稅源

稅源トハ租稅ノ源泉ニシテ人民カ租稅ヲ納ムル源ヲ云フナリ世ニ課稅物件ト稅源トヲ混同スル人アレトモ課稅物件ト云フハ政府カ人民ヨリ租稅ヲ徵收スルニ方リテ目安標準ト

スル所ノモノニシテ稅源ヨリ租稅ヲ汲出ス方法手段ニ過キサルナリ稅源トハ實際租稅ノ出テ來ル本源ニシテ全ク之レト別物ナリ去レハ稅源ハ猶ホ水源ノ如ク課稅物件ハ猶ホ人カ水源ヨリ庭池ニ水ヲ引カ

ントシテ用フル管ノ如シ故ニ課稅物件ノ撰擇如何ハ尤モ注意スヘシ何トナレハ庭池ニ水ヲ引クニ當リテ鐵管ト木樋ト土管トハ何レガ水ノ分量ヲ多ク供給シ流レカ水ヲシテ善ク清淨ニシ且ツ汚濁ナカラシムルカヲ注意スルカ如クナレハナリ然レハ課稅物件ノ撰擇如何ニヨリテハ普ク稅源ヨリ公平一様ニ租稅ヲ取出スヲ得レドモ究竟管ノ數ハ水源ノ水量ヲ増減スル能ハザルト等シク課稅物件ノ多少ハ毫モ稅源ノ分量ヲ増減セシムルヲ能ハザルナリ何トナレバ課稅物件ハ許多アリテ財產デモ人デモ人ノ行爲デモ何レニ於テモ勝手ニ主權者ノ撰擇ニ由テ増加セシムルヲ得レトモ稅源ハ固ト有形ナル人民ノ富ナレハ其分量ニ限リアリテ容易ニ増加シガタキモノナレハナリ則チ稅源ハ各人ノ所有財產カ若クハ所得ノ二者ニ過ギザルナリ租稅ハ必ズシモ人民ノ所得ノミヨリ出ツルトモ將タ人民ノ所有財產ヨリ出ツ

ルトモ未ク確然定マラザレドモ概シテ所得ヨリ出ヅルヲ以テ常トス  
 否所得ヨリ出デザルベカラズ何トナレハ抑租税ガ各人ノ所有財産若  
 クハ資本ヨリ出ヅルハ既ニ國ノ不幸ナレバナリ諺ニモ坐シテ喰ヘバ  
 山モ空シト若シ租税ニシテ資本ヨリ出ヅルアレハ早晚資本ハ減少シ  
 テ遂ニハ税源枯渴スルニ至ルベシ故ニ資本ヨリ租税ノ出ヅルカ如キ  
 ハ税制ノ惡シキモノニシテ租税ノ所得ヨリ出デザルベカラザルヤ明  
 カナリ且ツ租税ハ所得ノ大部分ヲ殺ガザルヲ要ス何トナレハ各人ノ  
 所得ヲ使用スルヤ左ノ二種ニアリ

各人所得  
ノ使用ハ  
消費ト貯  
蓄トニア  
リ

必要ノ消費

曰ク消費有用ノ消費

奢侈ノ消費

曰ク貯蓄……………即チ資本トナル

是レナリ

而シテ租税ハ何レヨリ出ヅルヤト云フニ各人奢侈ノ消費ヲ節スルカ  
 或ハ貯蓄ヲ減ズルカシテ出ダスナリ若シ奢侈ノ消費ヲナシ貯蓄ヲナ  
 スノ餘裕ナキ人ニ於テハ勢ヒ必要費ヲ儉約シテ之ヲ出サヽルヲ得ザ  
 ルナリ去レバ租税ニシテ重キトキハ下民ヲシテ生計ニ困難ナラシム  
 ルカ若クハ富民ノ貯蓄ヲ妨ゲテ資本ノ集合ヲ減ズルカ必ラスヤ種々  
 ノ影響ヲ税源ニ及ボスベキナリ故ニ税源ヲシテ富裕ナラシメント欲  
 セハ宜シク租税ヲ輕課シテ課税物件ノ撰擇ニ注意セザルベカラザル  
 ナリ

第五十二節

租税ノ單位及ビ税率

租税ノ單位トハ課税物  
 件ノ數量等ノ一位ヲ云フナリ例ヘハ地租ヲ課スルニモ地價ノ一圓ヲ  
 單位トナスアリ土地一坪若クハ一エーグルヲ以テ單位トナスアリ或

租税ノ單  
位税率

租稅原簿

ハ從量稅ノ如キハ絹ノ一丈ヲ單位トシ或ハ麥ノ何斛何噸若クハ何斤  
 ナ以テ單位トスルガ如シ而シテ租稅ノ單位ニ對シテ賦課スル租稅ノ  
 割合ヲ稅率トハ稱スルナリ則チ五分ノ稅率所得稅ニ於テハ所得ノ一  
 分地租ニ於テハ地價ノ二分五厘ナト、云フガ如シ序ニ記スベキハ租  
 稅原簿ト稱スルモノナリ是ハ課稅ヲ賦課スルノ基礎トスルモノニシ  
 テ納稅者ノ姓名稅額課稅物件ノ種類分量等ヲ記錄セシ臺帳原簿是レ  
 ナリ

第五章 租稅ノ類別(名稱) (上)

租稅ヲ類  
別スルノ  
標準ニ  
スル  
アリ

第五十四節 租稅ヲ類別スル標準 現今租稅ノ種類ハ甚タ多  
 ク隨テ種々ノ名稱アリ今一ノ標準ニ因テ之ヲ類別スル時ハ事甚タ簡  
 ナレドモ世人ハ種々ノ標準ニ因テ之ヲ類別スルガ故ニ其標準ノ異ル  
 毎ニ數種ノ名稱ヲ生シ是ヲ以テ益々其種類多キガ如キ觀テ呈スルニ  
 至ル是レ例ヘハ丸キ球ヲ一度ハ縱ニ截リ一度ハ横ニ截リ一度ハ斜ニ  
 截ルガ如シ複雑ナラザラント欲スルモ得ベカラザルナリ今茲ニ一々  
 數種ノ類別法ヲ示スヲ得ザレドモ其重要ナルモノニ至リテハ敢テ  
 漏サズ左ニ掲グベシ曰ク租稅ノ物質ニ基キタル類別(第一)曰ク時ノ繼  
 續ノ長短ニ基キタル類別(第二)曰ク土地ノ内外ノ區別ニ基キタル類別

(第三)曰ク土地ノ區域ノ差異ニ基キタル類別(第四)曰ク課稅物件ノ種類ニ基キタル類別(第五)曰ク課稅ノ賦課法ノ差異ニ基キタル類別(第六)曰ク租稅使用ノ目的ノ差異ニ基キタル類別(第七)曰ク租稅ノ負擔ニ基キタル類別(第八)等トス

第五十五節 租稅ノ物質ニ基キタル類別 物質ノ差異ヨリ

租稅ヲ類別スル時ハ左ノ三種トナルベシ曰ク

- 第一、物納稅
- 第二、金納稅
- 第三、課役

物納稅トハ現物現品ヲ以テ政府ニ納メラルヘキ租稅ヲ云フ昔時未開ノ世ニアリテハ未ダ貨幣ノ流通ナク隨テ現物交換ノ一交易法ナリシカバ其頃ノ租稅ハ專ラ物納稅ナリキ降テ通貨ノ行ハル、ニ至リテモ

租稅ノ物質ヨリ之ヲ區別ス

物納稅

政府ノ費用僅少ニシテ租稅ノ高少ク商工業ノ有様今日ノ如ク充分ニ發達セズ即チ複雜ナル商業行ハレザリシ時代ニアリテハ人民ハ尙ホ物品ヲ以テ政府ニ上納シ政府モ亦タ物品ヲ以テ出納スルヲ便トセリ本邦ノ制モ明治ノ初メマデハ專ラ物納稅行ハレタリキ則チ古代ノ租庸調ノ制ニ於テ絹布、木綿、麻等ヲ租稅トシテ納ムルヲ調ト云ヒ米穀ヲ以テスルヲ租ト云ヒシハ皆人ノ熟知スル所ナリ亦タ降ツテ封建割据ノ時代ニ方ツテハ猶更戰鬥ヲナスニ第一ノ必要品ハ米穀ノ如キ糧食ナリシヲ以テ政府ハ米粟ヲ以テ貢納物トシ之ヲ倉廩ニ積ムヲ便宜トセリ實ニ金納ノ制ノ本邦一般ニ行ハレシハ最近時ノ事ナリト謂フヘシ英國ノ如キモ中古ノ頃羊毛稅ヲ課シテ之ヲ徵收スルニ現品ヲ以テシ佛國ニ於テ麋鹿及ビ海狸ノ皮ニ課稅シテ現品ヲ徵收シ瑞典ニ於テ獸皮及ビ麻布ニ課稅シ現品ヲ以テ徵收セシガ如キ又曾テ本邦ニ於テ



## 金納税

北海道ノ物産税ヲ徴収スルニ現物ヲ以テシタルガ如キ皆物納税ノ例ナラザルハナシ

次ニ金納税トハ貨幣ヲ以テ納メラルヘキ租税ヲ云フナリ經濟ノ狀況社會ノ有様已ニ既ニ現今ノ如ク發達進歩シ商工業漸次隆盛複雑トナリ政府ノ収支亦タ巨大トナリ山村僻地ニ至ルマデ貨幣ノ流通浹洽セサルハナク此ニ於テ物納税ノ不便ヲ感シ遂ニ金納ノ制ヲ以テ最モ便利トスルニ至ルナリ夫レ米穀ノ如キ貯藏シ易ク昔時ニ在リテ納税セシムルニ最モ便トナシ、物品ト雖モ永久之ヲ倉庫ニ積ムトキハ或ハ其物質ヲ變ズルヲアリ或ハ貨幣ニ比シテ遙カニ運搬ニ不便ニ且ツ巨大ノ運搬費ヲ要シ從テ價格ノ變動激シク或ハ其蓄巨大ナルガ爲メニ之ヲ貯フルニ多クノ倉庫多クノ倉役人ヲ要シ或ハ蟲害ノ爲メニ分量ヲ減シ又ハ鼠減リト稱シテ庫役人ガ之ヲ私スルモ敢テ詰責スルヲ能

## 課役

ハザルガ如キ種々ノ不便ノ存スルアリテ到底貨幣ヲ以テ出納スルノ便ナルニ及バザルナリ故ニ今日ノ税制ニ於テハ貨幣ヲ以テ納メシムル金納税ガ通常ニシテ物納税ノ如キ偶々遺存スルモノアルニ過ギザルナリ

課役トハ勞力ヲ以テ納メシムル租税ニシテ此制ハ金錢若クハ物品ヲ人民ヨリ徴收スル代リニ若干ノ勞役ヲ課シテ納税ノ義務ヲ盡サシムルモノニシテ金錢物品等ニ乏シキ勞働者農夫等ノ爲メニハ最モ便法トス何トナレバ彼等ハ金錢若クハ物品ヲ出スヨリモ營業ニ暇アル折ニ二三日ノ勞働ヲナスヲ以テ寧ロ便利トスレバナリ本邦古代ノ庸役ハ即チ此一例ナリ今日ト雖モ猶ホ此課税法遺存セサルニアラス或國ニ於テ道路修繕等ノ爲メニ人民ニ課役ヲ命スルカ如キハ蓋シ昔時ノ勞力ヲ以テスル税ノ遺風ナリト云フヘシ

第五十六節 時ノ繼續ノ長短ニ基キタル類別 此區別ハ

租税ノ永久繼續スルモノト非常臨時ノ費用ヲ補フ爲メニ一時限リ設置セラレタル租税トノ區別ニシテ之ヲ

第一、常時税

第二、臨時税

常時税

ノ區別トス大概ノ租税ハ常時税ニシテ毎會計年度ニ繰返シテ人民ニ賦課セラル、チ常トシ年々非常ノ差ナキヲ通例トス是レ政府ガ毎年ノ通常經費ヲ支辨スルニ用フル財源ニシテ政府ハ之ニ因リテ以テ其歳計ヲ維持スルモノナリ臨時税ハ時トシテ變亂ナドアリテ政府ノ支出増加シ到底平常ノ收入ヲ以テ填補スルヲ能ハサル場合ニ其缺額ヲ補フガ爲メ臨時ニ起ス所ノ租税ヲ云フ即チ毎會計年度ニ繰返シテ徴收セラレザル租税ヲ云フ

臨時税

内國税トノ區別

第五十七節 土地ノ内外ノ區別ニ基キタル類別 内國人

民ヨリ徴收シテ毫モ外國人民ニ關セザル租税ト内外ノ關係アルガ爲メニ外國人ヨリモ徴收スル租税ノ區別ニシテ之ヲ

第一、内國税

第二、國境税關税或ハ海關税ト稱ス

ノ區別トス内國税トハ凡テ内國ニ於テ内地人民ヨリ徴收スルモノナリ國境税トハ内外ノ國ノ關係アルガ爲メニ國境ニ於テ内外人民ヨリ徴収セラル、モノニシテ輸出若クハ輸入ノ物品ニ課スル關税海關税及ヒ國境ヲ經過スル物品ニ課スル經過税等ヲ稱スルモノナリ

第五十八節 土地ノ區域ノ差異ニ基キタル類別 土地ノ

區域ノ差異ニ因テ生スル區別之ヲ

第一、國税

國税

地方税

第二、地方税

ト云フ國税トハ中央政府ガ中央政府ノ經費ヲ支辨センガ爲メ全國一様ニ課スルモノヲ云ヒ地方税トハ一地方限リノ經費ヲ支辨センガ爲メニ地方廳ニ於テ一地方内ニノミ課スル租税ヲ云フ去レハ地方税トハ府縣郡市町村ニテ賦課徴収スル租税ヲ總稱スルモノナリ然ルニ國税中ニモ一地方ヲ限リテ賦課徴収スル租税アリ然レドモ是レハ地方税トハ自ラ異リテ矢張り中央政府ノ經費ヲ支辨スルカ爲メニ用ヒラル、者即チ北海道ニ於ケル水産税トカ沖繩縣ニ於ケル酒類出港税ノ如ク本國トハ稍取扱ヒテ異ニスル殖民地ノ如キ所ニ限リテ課スル租税ニシテ斯カル類ヲ限地税トハ云フナリ

第五十九節 課税物件ノ種類ニ基キタル類別 一國主權

者ノ管轄内ニ屬スル物件ハ凡テ如何ナルモノト雖モ課税物件タルト

全國税ト  
限地税

ヲ得レドモ課税物件ノ種類ハ大別スレバ三種アルトハ前既ニ述ベタル所ナリ今課税物件ノ種類ニ從テ租税ヲ大別スレハ

第一、財産税

第二、人税 若クハ戶税

第三、行爲税

財産税トハ土地家屋ノ如キ不動産若クハ動産或ハ所得等ニ課スル租税ヲ總稱シタルモノナリ人身税トハ身分等ニ關シテ人ヲ數階ニ分チ其階級毎ニ税率ヲ異ニシ乃チ人ヲ基礎トシテ課税スルモノヲ云フ次ニ行爲税トハ行爲ト云フ意味ヲ廣ク解シタルモノニテ消費税營業税、賣買讓與遺傳等ノ如キ財産ノ移轉ニ課スル租税ヲ總稱スルモノナリ (備考) 茲ニ財産ト云ヘルヲ廣キ意義ニ解スルトキハ所得ヲモ包含ス故ニ所得税ノ如キハ財産税ノ一種トモ稱スヘシ然レモ若シ所得ノ

財産税

人身税

行爲税

多寡ハ單ニ納稅者ノ貧富生計ノ度ヲ示ス所ノ階級ヲ分ツカ爲メニ  
 調査セラル、モノトセハ是レ所得ノ額ヲ標準トシタル人稅ナリト  
 余ノ考チ以テ見レハ後説穩當ナルカ如シ又タ家賃稅ノ如キハ家屋  
 トイヘル不動産ヲ課稅物件トナシタル家屋稅トハ區別スヘキモノ  
 ニシテ是レ亦タ家賃ノ多寡ヲ以テ生計ノ度ヲ計ルノ標準トナシタ  
 ル人稅ナリ營業稅ノ如キハ若シ一般ノ營業ニ營業稅アレハ是レ營  
 業所得ニ課稅シタルモノナレバ若シ特殊ノ營業ニ租稅アル時ハ則  
 チ特殊ノ營業ナル行爲ニ課稅シタルモノト云フベシ故ニ營業免許  
 稅ノ如キハ則チ行爲稅ノ一種ナリト云フヲ得ヘシ又消費稅ノ如キ  
 之チ一方ヨリ觀ルルハ砂糖、珈琲、麥酒、菓子、鹽、若クハ醬油ノ如キ百般  
 ノ消費物品ヲ以テ課稅物件トナスカ故ニ物品稅若クハ物產稅ノ名  
 アリト雖モ余ハ之ヲ以テ消費ト云ヘル行爲ニ課稅スルトコロノ消

費稅トナシ決シテ砂糖、鹽ノ如キ物品(財産)ニ課稅シタルモノトハ爲  
 サ、ルナリ

ウオカア  
氏ノ類別

- 此類別法ニ基キテ租稅ヲ區別セシ人猶ホ乏シカラス今其一二ノ例ヲ  
 舉グレバ米國ノウカア氏ハ課稅物件ノ差異ニ基キテ租稅ヲ區別シテ  
 左ノ四種トセリ
- 第一、 財産ニ課スル稅
  - 第二、 所得ニ課スル稅
  - 第三、 物産ノ購買力ニ課スル稅
  - 第四、 消費高ニ課スル稅
- 又タ佛國ノドパリユ氏ハ此類別法ニ本キテ租稅ヲ左ノ五種トセリ
- 第一、 人身稅(分頭稅)
  - 第二、 財産稅(資本稅及ビ所得稅)

ドパリユ  
氏ノ類別

第三、消費物税

第四、使用物税

第五、人事税(賣買ノ如キ)

使用物トハ車馬僕婢ノ如キモノヲ云ヒ消費物トハ煙草茶酒ノ類ヲ云フニ若素ヨリ多少ノ區別ハアレドモ之ヲシモ區別スレバ財産税中資本税ト所得税ノ如キハ何ソ區別セザル然カスル時ハ猶ホ數多ニ細別スルヲ要スルナリ故ニ此類別ノ如キハ科學的ノ區分トハ稱シガタシ

第六十節 租税賦課法ノ差異ニ基キタル類別 政府

ガ租税ヲ人民ニ賦課スルニ當リテ殊ニ直税ヲ賦課スルニ方リテ配賦法ト定率法トノ二種アリ此區別ニ因リテ租税ニ

第一、配賦税

第二、定率税

配賦税

ノ區別ヲ生ズ佛國政府ガ直税ヲ賦課スルハ專テ配賦法ニ由ル配賦法トハ政府ニ於テ豫メ德收セントスル租税ノ總額ヲ定メ之ヲ人民ニ割賦シテ更ニ分擔セシムル方法ニシテ初メヨリ各自ノ納ムル税額税率ノ定マラザルモノヲ云フ故ニ此方法ニ由ルトキハ納税者ハ已レノ有スル課税物件ニ就テ幾分ノ税率ヲ以テ若干額ヲ納税スベキヤ豫メ知ルコトナク政府ヨリ税額ヲ割賦アリテ後チ初メテ之ヲ知ル者ナリ之ニ反シテ定率税ニ於テハ初メヨリ税率ノ定マリタルモノニシテ課税物件ノ單位ニ對シテ納税者ハ如何ナル割合ヲ以テ納税スベキヤ豫メ法律ニ由テ定メラレ甚ダ明カナル者ナリ佛國ナドニテ直税ヲ配賦スル方法ハ先ヅ立法院ニ於テ徵收スベキ租税ノ全額ヲ定メ之ヲ最高ノ行政區畫佛國ニ於テハ各縣ニ配賦ス而シテ其各府縣ノ受クル割賦額ノ多少ハ若シ地租ナレバ之ヲ各府縣ノ地價ニ比例シテ差異アラシムル

定率税

第五章 租税ノ類別(上)

モノナリ斯クシテ亦タ配賦ヲ受ケタル府縣ハ再ビ之ヲ次ノ行政區畫  
 (郡)ニ配賦ス郡ハ亦ク之ヲ其管轄内ノ市町村等ニ配賦シ而シテ最後ニ  
 市町村ハ之ヲ各納稅者ニ配賦スルモノト去レハ此割賦法ニ據ル時  
 ハ政府ハ將ニ其得ノト欲スル收入額ヲ必ズ徵集スルヲ得ルト云ヘ  
 ル財政上非常ノ便宜ハアレドモ人民ニ於テハ初ノヨリ幾何ノ稅額ヲ  
 徵收セラルベキヤ之ヲ知ルヲ能ハザルノ不便アリ且ツ此方法ニ據ル  
 時ハ自然定率法ニ由ルヨリモ甚ダシキ不公平ヲ生ズルナリ何トナレ  
 バ中央政府ガ稅額ヲ府縣ニ割賦スルニ方リテ多少ノ不公平ハ必ズ生  
 ゼストハ云ヒガタシ然ルヲ府縣ハ又タ再ビ之ヲ郡ニ配賦シ郡ハ之ヲ  
 市町村ニ市町村ハ之ヲ納稅者ニ配賦スルモノナレバ屢々配賦ヲ重キ  
 テ其配賦ノ都度多少ノ不公平アル時ハ勢ヒ納稅者ニ達スル頃ニハ郡  
 縣ヲ異ニスル人民ノ間ニ額稅甚ダシキ不同ヲ見ルニ至ルベキヤ復タ

兩賦課法  
ノ比較

疑フベカラザレハナリ然レバ配賦稅ハ不公平多ク定率稅ハ各自ノ課  
 稅物件ヲ調査シソレヲ基本トシテ定率ノ稅ヲ課スルモノナレバ不公  
 平ノ少キハ明カナリ但シ國庫ハ定率稅ニ於テハ其收入ノ概算ハナシ  
 得レドモ配賦稅ニ於ケルガ如ク必ズ豫算ノ額ヲ得ルヲ能ハザルナ  
 リ佛國ノ直稅ハ專ラ配賦稅ナリ間稅ハ盡ク定率稅ナリ本邦ノ如キハ  
 直稅間稅共(地租所得稅酒稅煙草稅等)皆定率租稅ナラザルハナシ  
 然レドモ茲ニ亦タ定率稅ニ二種アリ曰ク

第一、一率稅(比例稅)

第二、遞加稅(累進稅)

是ナリ若シ租稅率一定不動ニシテ只稅額ノ多少ハ財產ノ多少ニ比例  
 スルノミナル時ハ之ヲ比例稅ト云ヒ若シ財產ノ額増加スルニ從テ稅  
 率モ共ニ遞加スル時ハ之ヲ累進稅ト云フ去レバ此區別ハ一ハ課稅物

比例稅ト  
累進稅ト  
ノ區別

件ノ單位ニ對スル稅率一定不變ノモノニシテ一ハ課稅物件ノ單位ニ對スル稅率ノ割合財產ノ額ノ増スニ隨テ共ニ加ハルモノナリ本邦地租ノ如キハ一率稅ニテ其稅率ハ百分ノ二半ニシテ假令土地が如何程大ナルモ又タ如何程小ナルモ更ニ稅率ニ於テ變ル所ナクレドモ本邦所得稅ノ如キハ累進稅ナリ何トナレバ所得稅ニ於テハ所得ノ増加スルニ隨テ稅率モ共ニ遞増スルコト一分ヨリ一分半ヨリ二分ニ進ムガ如キ制ナレバナリ

第六十一節 租稅使用ノ目的ノ差異ニ基キタル類別

此區別ハ則チ租稅使用ノ目的一般ナルト特別ナルトヨリ起コル區別ニシテ

第一、一般稅

第二、特別稅(目的稅)

特別稅ノ

トス夫レ租稅ハ概シテ其使用ノ目的ヲ限ルベキモノニアラズ故ニ租稅ハ一般ニ政府一切ノ公費ニ供セラル、チ常トス其使用ノ目的ヲ限ラザル租稅ハ總シテ之ヲ一般稅ト稱ス特別稅トハ之ニ反シテ特別ノ目的費用ニ支出スルガ爲メニ徵收セラルヘキ租稅ヲ稱ス例ヘハ英國ノ地方稅中敷石稅點燈稅及ビ救貧稅ノ如キ即チ是ナリ此等ノ租稅ハ皆其指定セラレタル目的ニ支出スヘキモノニシテ他ノ費用ニ流用ヲ許ササルモノトス近ク例ヲ取レバ東京ニ於テ其市區改正ノ費用ニ供スルガ爲メニ地租ニ副稅ヲ加ヘ清酒ニ附加稅ヲ課スルニ至リシガ其附加稅ハ即チ特別稅ニシテ唯リ東京市區改正ノ費用ニ供セラルベキモノナリ

第六章 租税ノ類別 (下) 直税間税ノ區別種類  
及ビ各國ニ於ケル二税ノ比例

租税ノ基キ  
擔ニテ  
テ直税間  
税ヲ類別  
スル

第六十二節、租税ノ負擔ニ基キテ直税間税ヲ類別スル  
古來人口ニ増減シ今猶ホ學理上行政上實際ニ必要ナル租税ノ類  
別ヲ直接税及ビ間接税ノ區別トス此區別ハ治ク一般ニ人ノ知ル處ナ  
レドモ其區別ハ甚ダ分明ナラズ遂ニ或ル學者ノ如キハ租税ニ直税間  
税ノ區別ナシトサヘ論ズルニ至レリ隨テ諸家ノ說一様ナラズ議論紛  
々トシテ未タ一定セサルカ故ニ其定義ノ如キモ亦數多アリ然レドモ  
今爰ニ一々夫等ノ定義ヲ示スニ違アラザレハ余ハ唯其大要ニ就テ論  
ゼントス

租税ノ負  
擔ハ確定  
不動ノモ  
ノニテ  
サカカ故  
ニ窺ヒ易  
カラサル

元來直税間税ノ區別ハ租税ノ負擔ノ有様ニ基キテ立タル區別ニシテ  
直税ニアリテハ租税ノ負擔直接ニ納税者ニ墜落スルカ故ニ直接税ノ  
稱アリ之ニ反シテ間税ニ於テハ租税ノ負擔間接ニ納税者ヲ經テ第三  
者ナル負税者ニ墜落スルガ故ニ之ヲ間接税トハ稱スルナリ是レ蓋シ  
直税間税ノ區別ノ原由ナルベシ然レドモ歐テ實際ノ景況ヲ見レハ租  
税負擔ノ販着スル所ハ常ニ機微ニシテ窺ヒ易カラズ余ガ次章ニ於テ  
論セントスルガ如ク租税ノ負擔ハ確乎不動ノ者ニアラズシテ常ニ他  
ノ原因ニ由リテ種々ニ動搖シテ止マザルモノナリ故ニ直接ニ負擔ノ  
落ツルモノト定メラレ直税トセラレシモノモ間々直税ナラズ時ノ經濟  
ノ狀況外國トニ於ケル關係ノ在様税率ノ輕重若クハ徵收方法ノ異ナレ  
ルニ因リテ負擔間接ニ他ニ轉移スルコトアリ亦タ負擔間接ナリト思ハ  
レタル間税モ他ノ原因ニ遮ラレテ間税タラズシテ負擔直接ニ納税者



ニ販スル事アリ是故ニ一ノ租税ニシテ其負擔ノ墜落スル所直接ナリ  
 マ將タ間接ナリヤ定メ易カラザル者アリ或ハ一ノ租税ニシテ時トシ  
 テハ負擔直接ニ墜チ又時トシテハ負擔間接ニ墜ルモノアリテ負擔ノ  
 様様ニ付テハ更ニ一定不變ノ規則ヲ定ムル丁能ハザルモノナリ然ラ  
 バ則チカ、ル動搖シ易ク又タ機微ニシテ窺ヒ易カラザル標準ニ基キ  
 テ立タル直税間税ノ區別ハ勢ヒ曖昧模糊タラザルヲ得ズ是レ或學者  
 ガ直税間税ノ區別ナシトマデ極論セシ所以ナリ然レドモ此緣由ヲ以  
 テ直チニ直間税ノ區別ナシトシテ是ノ有用ナル區別ヲ否拒スルニモ  
 及バザルナリ畢竟斯カル固難ニ陥ルハ強テ直間税ノ區別ヲ實際租税  
 負擔ノ販着スル所ニ因テ立テントシタルニ職由セズンバアラス

**第六十三節 學理上正當ナル直間税ノ區別 若シ果シテ**

直間税ノ區別ハ租税負擔ノ實際販着スル所ヲ標準トシテ別ツ丁能ハ

學理上正當ナル直  
 間税ノ解釋

ワグチル  
 氏ノ解釋

ズンバ余輩ハ何チ標準トシテ此區別ヲ爲スベキヤ曰ク畢竟直間税區  
 別ノ困難ナル因由ハ之ヲ動搖スル基礎ニ據テ立テントスルモノナレ  
 バ若シ吾人ガ動搖セザル標準ニ由テ之ヲ區別スレバ則チ可ナリ獨逸  
 ノ財政學者ノ大家アドルフ、ワグチル氏ノ解釋ハ善ク直間税ノ區別ヲ  
 示セシモノト云フベシ氏ハ曰ク直税トハ立法ノ目的上ト納税者ヲシ  
 テ同時ニ負擔者タラシムルニアリ而シテ其税金チ他ノ者ニ移讓スル  
 チ希望セズ若クハ移讓セシメザルモノナリ又間税トハ全ク之ニ反シ  
 テ立法ノ目的上納税者ヲシテ負擔者タラシメザルニアリ而シテ其税  
 金チ實際ノ負擔者ニ移讓セシムルコトヲ希望シ若クハ移讓スルノ方  
 法ヲ立テタルモノナリト此定義ハ甚ダ宜シ何トナレバ此區別ニ因ル  
 時ハ實際上毫モ困難アラザレバナリ抑租税ハ政府ガ之ヲ賦課スルモ  
 ノナレバ必ズ立法者ノ眼中ニハ定見ナキヲ得ズ則チ立法ノ目的上ニ

ハ必ズ負擔ヲ直接ナラシメントスル租税ト負擔ヲ間接ナラシメントスル租税ノ二種アルヤ明カナリ例ハ地租ノ如キハ土地ト云ヘル財產ヲ課税物件トシテ立法者ガ之ヲ所有者即チ地主ニ賦課シ直接ニ地主ニ負擔セシメント希望シタルモノナレバ即チ之レヲ直税ト稱スベク而シテ實際租税ノ負擔ハ地主ニアリシヤ將タ借地人ニアリシヤチ間ハザルモ可ナリ之ニ反シテ消費税(例ハ酒ノ消費税)ノ如キハ消費ニ租税スルガ立法者ノ目的ナリ故ニ租税徵收便宜ノ爲メ政府ハ之ヲ酒造營業人(納税者)ヨリ徵收スレドモ是レ其目的ニアラズシテ故政府ハ酒造家ガ酒ノ價ニ籠メテ租税ヲ消費者ニ移讓センコトヲ希望シタルモノナレバ假令酒商業不景氣ニシテ酒屋ハ租税ヲ移讓スルコト能ハズ自ラ直接ニ之ヲ負擔スルガ如キ有様ニ成行クトスルモ酒ノ消費税ハ失張リ間税ト稱シテ可ナルベシ故ニ實際租税ノ負擔ハ外面ヨリ種々ノ

ラウ氏ノ  
直税間税  
定義

原因ニ遮ラレテ動搖シテ止マザレドモ當初立法者ノ意志希望ハ那邊ニアリシヤヲ標準トシテ見ル時ハ直間兩税ノ區別從テ判然タルベシ然レドモ立法者ノ直税ト立テタルモノハ實際ニ於テモ比較的ニ負擔直接ニ墜落スルニ近ク立法者ノ間税ト立テタルモノハ實際ニ於テモ比較的ニ負擔間接ニ墜落スルニ近キナリ故ニ直間税元來ノ區分ハ租税ノ負擔ニ本キタル區別ナリト稱スルモ敢テ太誤ナカルベシ

**第六十四節 諸家ノ直間税ノ定義** 余ハ諸家ノ定義ヲ盡ク茲ニ擧ゲントニハアラズ其稍正當ニ近キ者ニ就テ二三ヲ示サン

獨逸經濟學者ラウ氏曰ク「直税トハ定額ノ税金ヲ負擔者ニ向テ直接ニ請求スルモノナリ間税トハ立替方法ニ由リテ税金ヲ負擔者ニ非ザルモノヨリ徵收シ立替者ハ實際ノ負擔者ヨリ該税金ノ補償ヲ受ルト否トチ間ハザルモノヲ云フ」

ミル氏ノ  
定義

英國ノミル氏曰ク直税トハ租税ノ負擔者タルベキ者ヨリ直接ニ徵收  
セントスルモノニシテ間税トハ他日他人ニ之ヲ負擔セシムルノ目的  
ヲ以テ或人ヨリ徵收スルモノナク云

ボリユー  
氏ノ學理  
上ノ義解

佛國ノボリユー氏ハ直間税ニ學理上ノ義解ト行政上ノ義解ヲ與ヘタ  
リ其學理上ノ義解ニ曰ク直税ハ政府ニ於テ直チニ實際ノ負擔者チシ  
テ租税ヲ拂ハシノントスルモノニシテ初メヨリ其財産若クハ歳入ニ  
比例シテ之ヲ課ス故ニ總テ中間ノ納税者ナク被税者ノ財産若クハ財  
力ニ比例シテ偏重ナキヲ務ムルモノナリ  
間税ハ政府ニ於テ實際ノ負擔者ヲ問ハス被税者ノ財力ニ應ジテ偏重  
アルモ願ミズ間接ニ迂回シテ實際ノ負擔者ニ達スルヲ目的トス故ニ  
納税者ト租税ノ實際ノ負擔者トヲ異ニシ政府ハ全体ニ於テ平均ヲ得  
ルヲ以テ足レリトシ敢テ格段ナル場合ニ於テ偏重アルモ願ミザルモ

直間税ノ  
行政上ノ  
義解

ノナリ

以上諸家ノ定義ハ未タ其詞ニ於テ足ラザル所ナキニアラザレドモ其  
意ハ大同小異ニシテ直間税ノ區別ヲ詳ニスルニ足ルベシ

### 第六十五節 行政上直間税ノ區別ハ精密ニ學理上ノ

區別ト符合セザルヲ 現時租税ノ科目夥多ナル處ニハ行政上  
其徵收方法ヲ異ニスル租税ヲ分テ取扱フノ便宜ナルヨリ直税間税  
ノ區別行政上ニ之レナキハナシ且ツ直税ノ多寡ヲ以テ特ニ參政權ヲ  
得ルノ資格トナスガ如キ場合ニハ直間税ノ區別ハ實ニ國民權利ノ消  
長ニ關スル大切ナル區別ナリトス故ニ各國如何ナル租税ヲ以テ直税  
トシ將タ間税トスルヤ行政上ニハ又々如何ナル他ノ標準ニ因テ直間  
税ヲ區別セントスルヤ茲ニ一言スベシ

ボリユー  
氏

ボリユー氏ハ佛國ノ行政上ニ於ケル直間税ノ政府ノ義解ヲ説テ曰ク

「直税トハ直チニ人民即チ人民ニ課スル者ニシテ確定不動ナル者ニ課シ豫メ収入高徴収時期ノ判然タル者ヲ云ヒ間税ハ之ニ反シテ與交換取引等ノ事アル時ニ當ツテ之ヲ課スル者ニシテ額徴収時期ノ確然期定シ難キ者ヲ云フ」

右ノ義解ニ等シク國庫ト納税者トニ於ケル關係既ニ確定シタル租税ヲ直税トナシ國庫ト納税者ノ關係一時限リノ租税ヲ間税トスルノ説ハ他ノ經濟學者モ亦唱フル所ニシテガルニエー氏ノ如キハ蓋シ其一人ナリ

此義解ニ由ル時ハ學理上直税ナルモ行政上間税ナルモノナドアリテ略學理上ノ區別ト行政上ノ區別ト符合スレドモ時トシテハ其係屬スル所ヲ異ニスルモノナキニアラス例ヘバ遺傳贈物ノ税ノ如シ該税ハ負擔モ概チ遺傳領受人若クハ贈物領受人ニ落チ政府ノ希望モ直接ニ

富ノ現象ニ  
ノ現像ト  
課スル者  
ト直税ト  
シ富ノ間  
接ノ現象  
ニ課スル  
者ト直税  
トスル説  
直税及ヒ

其者ヨリ徴收セントスルニアリ然レドモ該税ノ徴集ハ特ニ遺傳贈物ノ行ハル、時ニ於テノミスル者ニシテ定期ナク從テ收入高モ亦々確定シガタキモノナリ去レバ學理上ヨリハ直税ナレドモ佛國ノ行政上ニテハ間税トナルベシ是レ最モ不都合ナル所以ナリ然レドモ大体ノ必要ナル租税ニ至リテハ略々各國ノ行政上ニ於テ各直間兩税ニ係屬スル所ヲ同フセリ

猶ホ他ノ標準ヨリ直間税ヲ區別スル者アリ其説ニ因レバ納税者ノ富ノ直接ノ現像(人身所得財産等)ニ課スルモノ之ヲ直税トシ納税者ノ富ノ間接ナル現像則チ消費財産ノ移轉等ニ課スルモノ即チ之ヲ間税トハスルナリ

**第六十六節 直税及ヒ間税ノ種類** 余ハ後章ニ於テ直間税ノ得失ヲ研究シ或ハ直間税ヲ別チテ述ブル必要アレバ茲ニ直税及

間税ノ種類

間税ノ重ナル種類ヲ列舉セン直間税ノ區別ハ學理上ト行政上ト符合セザルモノアリト云ヒタモ左ノ數種ハ何レノ分類法ニ由ルモ直税ニ屬スルモノ、如シ

第一 直接財産税

甲 不動産ニ課スル税

(一) 地租

(二) 家屋税

乙 動産ニ課スル税

(一) 動産税(公債証書、株券等ニ課スル税)

(二) 使用物税(車税、船税ノ如キ之レナリ)

第二 直接人税

甲 分頭税

直接人税ノ種類

直接財産税ノ種類

乙 所得額ノ多寡ヲ基礎トシ之ヲ標準トセル人税

(一) 動産ノ所得(流動資本ノ利息)ニ課スル税(公債証書、株券等ノ利息ニ課スル諸税ヲ云フ)

(二) 一身上ノ所得ニ課スル税(勤勞ヨリ生スル所得ニ課スル税ヲ云フ)

(イ) 俸給年金ニ課スル税

(ロ) 高尚ナル職業ノ所得ニ課スル税

(ハ) 質銀ニ課スル税

(三) 營業所得税(商工業ノ如キ作業ノ利益所得ニ課スル税ヲ云フ)

丙 家賃税

右諸種ノ租税ハ直接税ナリ尙ホ此外ニ一般ノ資本若クハ財産ヲ基礎

間接税ノ種類

トシタル租税アリ又タ其本源ノ何タルヲ問ハス一般ノ所得ヲ基礎トシテ課シタル租税アリ即チ

(一) 一般ノ資本税若クハ財産税

(二) 一般ノ所得税

是レナリ此等ノ租税ハ共ニ直接税ニ属スルヤ明カナリ次ニ何レノ區分法ニ由ルモ間税ニ属スルモノ左ノ如シ

第一 内地消費税

第二 關稅

以上掲ケタル諸種ノ租税ハ各其係属スル所ヲ明ニスルモノナリ前ノ地租家屋税動産税使用物税分頭税動産ノ所得ニ課スル税一身上ノ所得ニ課スル税營業所得税家賃税一般ノ資本税若クハ財産税及ヒ一般ノ所得税ノ十一種ハ學理上ヨリスルモ行政上ヨリスルモ又タ余ガ第

佛國直税ノ種類及ヒ比例

三ニ舉ゲタル標準ヨリスルモ均ク直税ニ属スル者ニシテ後ノ二種ハ亦タ孰レノ標準ニヨルモ間税ニ属スル者ナリ獨リ財産ノ移轉ニ課スル租税則チ賣買ニ課シ贈與ニ課シ遺傳ニ課スル租税ノ如キ或ハ証券印税ノ如キハ學理上ヨリ見ル時ハ直税カトモ思ハルレトモ諸國ノ行政上ニハ間税トシテ取扱ハル、ヲ見ルナリ而シテ之ヲ佛國行政上ノ區別法並ニ第三ニ余カ舉ゲタル標準ニ因テ區分スルトキハ寧ロ間税ニ属スルノ正當ナルヲ見ルナリ

**第六十七節 諸國ニ於ケル直税間税ノ種類及ヒ二税ノ比例** 歐洲三四ノ大國ニ於ケル直税及ヒ間税ノ種類ニ付テハ余ハ之ヲ左表ニ示シ以テ其表ニ就テ二税ノ比例ヲ觀察セントス

佛蘭西  
地租

一八八九年度豫算

三六一九〇六〇〇

分頭家賃税	一四六二五〇〇〇
門窓税	九六八〇八八〇
營業税	二〇七七八八八〇
以上四個ノ租税ヲ佛國ノ四大直税ト云フ	
準直税	五八一〇五一二
車馬税、度量衡税、鑛山税等ヲ稱ス	
リアルシエリナリ リ收マル直税	一八八六一〇〇
直税合計	八八九七一九七二
登記料	一〇二六一六〇〇〇
印税	三一五二〇八〇〇
關稅	六九四六八五二〇
消費稅及ビ鐵 道旅客稅等	一、一八三〇、五二〇〇

動產ノ所得稅	九七七、五六〇〇
砂糖稅	三五三一、二〇〇〇
リアルシエリナリ リ收マル間稅	三八三七、一六〇〇
間稅合計	三、七〇八三、五二八〇
總計	四、五九八〇、七二五二

右ニ掲ケタル佛國ノ歲計上ニ就キテ之ヲ見レハ租稅全額ニ對スル間稅ノ比例ハ八割〇分七厘ニシテ一割九分三厘ハ直税ナリトス然レモ佛國間稅中ニハ純粹ニ租稅ノ性質ヲ具ヘサル登記料ヲモ含ムカ故ニ今間稅合計中ヨリ登記料收入ヲ除クハ間稅合計二、六八二、一九二八〇圓トナルヘシ而シテ租稅總計ハ三、五七、一九、一二五二圓トナルヘシ然ルルハ間稅ノ比例ハ七割五分一厘ニシテ直税ノ比例ハ二割四分九厘ニ當ル故ニ佛國ノ間稅ハ頗ル多額ノ收入ヲ生スレトモ直税モ亦少

英國直稅ノ種類及比例

カヲサル收入ヲ生スルモノト云フヘシ

英吉利 一八八八年乃至一八八九年度ノ豫算

地租	五二三、〇〇〇
家屋税	九四五、〇〇〇
所得及財産税	六一二五、〇〇〇
直税合計	七五九三、〇〇〇
關稅	九九六二、五〇〇
消費税	一二七五二、五〇〇
印稅	五八九〇、〇〇〇
間税合計	二、八六〇五、〇〇〇
總計	三、六一九八、〇〇〇

英國ニ於ケル租稅總額中直稅ノ割合ハ二割〇分九厘ニシテ餘ノ七割

英國直稅ノ種類及比例

九分一厘ハ間稅ニ屬ス以テ英國間稅ノ收入ハ巨大ニシテ直稅就中地租家屋稅等ノ收入ハ僅少ナルヲ見ルヘシ英國ニ於テ地租ノ收入僅少ナルハ他ニ理由ナキニアラス其收入ノ乏シキ所以人如キハ乞フ後章ヲ俟テ之ヲ説カン

換地利(本部)一八八八年度ノ豫算

地租	一七四〇、四〇〇
家屋税	一四九五、七五〇
營業税(工業稅)	五三五、七五〇
所得稅	一二三〇、二五〇
直税合計	五〇〇二、一五〇
關稅	一九七三、一二五
消費稅	四四一二、六四〇

第六章 租稅ノ類別(下)



鹽稅	一〇二二、六〇〇
烟草稅	三八六九、二七〇〇
印稅	九四〇、〇〇〇
裁判手數料	一六五四、〇〇〇
富講ノ收入	一〇七五、〇〇〇
雜租稅	一九八、六一五〇
間稅合計	一、五一四五、二五〇〇
總計	二、〇一四七、四〇〇〇

填國間稅ノ收入ハ合計一、五一四五、二五〇〇圓ナレド夫レヨリ純粹ノ租稅ニ屬セサル裁判手數料一六五四、〇〇〇圓ヲ除ク片ハ總計一、八四九、三、四〇〇トナリ間稅合計一、三四九一、二五〇〇圓トナルヘシ然ル片ハ租稅總額ニ對スル直稅ノ比例ハ二割七分ニシテ間稅ハ七割三分

普魯士國ノ直稅ノ種類及比例

ニ當ルモノトス

普魯士	一八八八年乃至一八八九年度ノ豫算
地租	一〇〇一、六二五〇
家屋稅	七七〇、〇〇〇
所得稅	一〇一二、六二五〇
等級分頭稅	五八八、六二五〇
營業稅	五〇五四、二五〇
雜直稅	四〇、〇五七五
直稅合計	三九一〇、八五七五
間稅合計	一六九五、一〇〇〇
總計	五六〇六、九五七五

普魯士ニ於テハ租稅ノ全額ニ對スル間稅ノ比例ハ三割〇分三厘ニシテ

直税ハ六割九分七厘ノ割合ナリ歐洲各國中ニ於テ間税ノ直税ニ比シテ少ナキハ只普國ノ歲計上ニ於テ之ヲ見ルノミ其他ハ概テ間税ハ直税ニ超過スルヲ數倍ナリ

### 第六十八節 本邦ノ直税間税ノ種類及ヒ二税ノ比例

日本ニ於テハ未タ行政ノ取扱上ニ直税間税ノ區別ナシト雖モ其直税ナル語ハ既ニ初メテ市町村制度ノ條文中ニ現ハレ續キテ帝國憲法ノ中ニ見エタリ而シテ其後發布セラレタル直接國税ト云ヘル語ノ解釋ハ之ヲ地租ト所得税トニ限レルカ如シ然レモ余ノ考フル所ニテハ口本現行ノ租税中地租ト所得税トハ勿論直税ニ外ナラサレトモ其他直税ト稱スヘキモノ尙ホ數多アラント考フルナリ是レ政府ノ解釋ハ只行政上ノ便ニ出テタルモノカ將タ尙ホ他ニ理由ノ存スルアリテ然ルカ之ヲ知ルヲ能ハサレトモ余カ既ニ前段ニ舉タル學理上ノ標準ニ基

キテ直税間税ノ二税ヲ區別スルキハ他ニ尙ホ直税ト稱ス可キモノナカルヘカラス又單ニ學理上ヨリノミナラス本邦ノ地租所得税外ノ租税中ニハ現ニ他國ニ於テ行政上直税ニ編入シタルモノ、存スルアリ今學理上ヨリシテ本邦ノ直税間税ヲ分ツトキハ二者ノ割合左ノ如シ

日本 明治二十二年度ノ豫算

地租

四二二四、八九八一

所得税

一〇五、三四九〇

營業税

一七九、一五〇三

内

酒造營業税

一一三、一一二九

蓄翅營業税

二六、一一〇

醬油營業税

五、六三四〇

菓子營業稅

二三七〇七七

煙草營業稅

二六八四〇八

賣藥營業稅

七二四三九

營業免許稅

一一八五三四

內

牛馬賣買免許稅

六九〇〇一

職獵免許稅

四九五三三

船稅

二五七三五六

車稅

五六〇〇〇八

會社稅

三八二二二六

內

國立銀行稅

二二一八五〇

米商會所稅

六九七六一

株式取引所稅

九〇六一五

鑛山借區稅

三〇四六三

北海道水產稅

二一六六一八

遊獵稅(享樂稅)

七一〇

直稅合計

四六六六二八九

消費稅

一六四四六五八二

內

酒造稅

一三三六六三〇七

醬油造石稅

一一五八九一三

菓子製造稅

三四六八三〇

烟草印稅

一二二四三九五

第六章 租稅ノ類別(下)

一賣業印紙稅

三五〇一三七

沖繩縣酒類出港稅

三、六九七五

海關稅

四一〇、五五四二

度量衡稅

二二九〇

證券印稅

六一三〇六二

間稅合計

二一二〇、四四五一

總計

六七八七、〇七四〇

以上列舉シタルモノハ明治二十二年度本邦歲計ノ豫算ニ出テタル租稅ノ種類ヲ學理上ヨリ分類シタルモノナリ故ニ豫算表ノ上ニ於テ數種ニ分レタルモノナリニ合併シ酒造稅、醬油造石稅、菓子製造稅、烟草印稅、賣業印稅ノ五科目ヲ内地消費稅ノ一科トシ國立銀行稅、米商會所稅、株式取引所稅ノ三科目ヲ會社稅ノ一科目トナシタルカ如キ是レナリ

或ハ豫算表ノ一ニ於テ一科目トセラレタル租稅ト雖モ其性質ヲ異ニスルモノハ分チテ數科目トナセリ例ハ酒造稅ヲ分チテ酒造營業稅、酒造々石稅(消費稅)トナシタルカ如キ是レナリ亦々直稅中牛馬賣買免許稅及ヒ職權免許稅ノ如キハ免許科ニシテ即チ第二款收入ニ屬スヘキモノナレハ余ハ之ヲ租稅中ニ混入スルヲ以テ其適當ナル地位トセス又間稅中度量衡稅ノ如キハ手數料ノ性質アルモノニシテ之ヲ第二款收入ニ移スヲ可トスルモノナリ然レモ前表ニ於テハ歲計豫算表ニ隨ヒ取テ之カ地位ヲ變更セス但シ証券印稅ノ一稅ハ立法者ノ目的希望云々ヲ以テ標準トシタル直間兩稅ノ區分法ニ由ルモ或ハ直稅ノ一種タルヘク又仔細ニ學理上ヨリ觀察スルモ或ハ手數料ノ性質ヲ帶アルモノタルヤノ疑ナキ能ハスト雖モ茲ニハ先ツ各國行政上ノ區別ノ例ニ倣ヒ其徵收時期ト徵收額ノ一定セサルト及ビ富ノ間接ノ顯

日本ニハ  
間税ノ收  
入乏シ

普國ニ直  
税ノ收入  
間税ヨリ

象ニ課スルモノナルトノ故ヲ以テ之ヲ間税中ニ置ケリ明治二十一年  
 度ノ豫算ニ於テハ訴訟用印紙料ヲ第一部即チ租稅收入中ニ置キ鑛山  
 借區稅ヲ第二部即チ免許料手數料官有財產及ヒ官業收入中ニ置キタ  
 レ凡二十年度ヨリハ前者ヲ第二款即チ免許料及ヒ手數料收入中ニ  
 移シ後者ヲ第一款即チ租稅收入中ニ移シタルカ如キハ收入ノ分類ニ  
 一段ノ進歩ヲナシタルモノト云フヘシ

日本ニ於ケル間税直稅ノ比例ハ前表ニ隨フキハ租稅總額ニ對スル直  
 稅ノ割合六割八分七厘間税ノ割合ハ三割一分三厘ナリトス之ヲ歐洲  
 各國ノ有様ニ比スルキハ全ク反對ノ地位ニ居ルモノニシテ本邦ニハ  
 間税ノ未タ發達セズ直稅ノ稍偏重ナルヲ見ルニ足ルヘシ獨リ讀者ハ  
 歐洲各國中普國ニ於テハ直稅ノ收入額間税ニ超過スルヲ怪マル、ナ  
 ラン是レ併シナカラ決シテ日本ニ於ケルカ如ク間税ノ收入實際乏シ

多キハ他  
ニ理由アリ  
テ然リ

普國ノ例  
ハ之ヲ日  
本ニ比ス  
ヘキニ非  
ス

キニアラス普國ハ讀者ノ知ラル、如ク獨逸聯邦中ノ一王國ナレハ間  
 稅ノ收入少キハ專ラ海關稅消費稅等ノ間税ハ之ヲ獨逸帝國ノ收入ニ  
 組込ミ毫モ普國ノ收入トナサザルニ因ラスンハアラス是レ普國ノ例  
 ハ之ヲ日本ニ比スヘキノ例トナスヘカラサル所以ナリ

第七章 租税ノ負擔及負擔ノ轉移

租税ノ何トヤ  
移トハ何ト

第六十九節 租税轉移ノ現象 租税ノ轉移トハ獨逸語ノ所謂「ユ  
 ヨベルワルツング」ニシテ之ヲ譯シテ轉讓トモ轉遷トモ或ハ轉嫁トモ  
 云フ抑、租税ノ轉移トハ或ル人カ政府ヨリ租税ヲ賦課セラレタルト直  
 接ニ納税シタルモノヲ更ニ己レノ物品ヲ賣却スルカ或ハ貸付スルニ  
 當リテ之ヲ其代價若クハ賃料ニ包含セシメテ買入レ若クハ其借受人  
 ヨリ回收スルヲ云フ蓋シ此現象ハ必スヤ租税ヲ賦課徴收スルノ間  
 ニ行ハル、モノニシテ農民カ地租ヲ納メタルカ故ニ必ス農民カ負擔  
 シ酒造家カ酒造税ヲ納メタルカ故ニ酒造家ハ必ス之ヲ負擔スルモノ  
 ナリトハ斷定スルヲ能ハス何トナレハ租税ノ負擔ハ轉讓轉嫁シテ往

豫期シタル  
租税ノ轉移

々意外ノ邊ニ落ルコトアレハナリ然レトモ租税ノ轉移ニハ二種アリ  
 テ第一ハ始メヨリ何人ヨリ何人ニ轉移スヘキモノタルゴトヲ豫シメ  
 推測シテ立法者カ賦課シタル租税ニ於ケル即チ是レナリ此場合ニハ  
 豫期シタル租税ノ轉移ハ行ハル、ヲ以テ常トス第二ハ立法者カ豫シ  
 メ推測セスシテ賦課シタル租税ニシテ其負擔意外ニ轉移スルモノヲ  
 云フ是レ豫期セザレサルノ轉移ナリ第一ノ場合ハ多クハ租税徴收ノ  
 便利法ニ出ツルモノニシテ便チ立法者ニ於テ預メ租税ノ轉移ヲ推測  
 希望シ之ヲ或ル人ニ賦課スルヲ以テ甚タ便利トスルコトアリ今一例  
 チ舉グレハ所謂消費税ハ政府カ初メヨリ租税ノ轉移ヲ推測シテ賦課  
 シタルモノナリ故ニ消費税ノ如キハ則チ租税徴收ノ便利法ニ出テタ  
 ルモノニシテ其目的タルヤ人民ノ消費高ニ課税スルニアリ然ルニ今  
 一々人民ノ消費ニ付キテ租税ヲ賦課セント固ヨリ實際ニ於テ行ハ難

タ且ツ其度數多キニ從ヒテ益繁雜ニ涉リ其極ヤ殆ント之レカ課稅徵收ノ目的ヲモ達シ得ヘカラサルニ至ル者ナリ是ヲ以テ酒稅ハ少數ナル酒造家ニ就キ煙草稅ハ煙草營業家ニ就キテ課スルカ如キハ少數ノ人ニシテ大數ノ貨物ヲ製造賣買スルモノニ賦課スル課稅ノ一便法ニシテ是レ決シテ酒造家煙草營業家ヨリ營業稅ヲ徵收スルノ希望ニアラス又酒造家煙草營業家ハ始メヨリ其納メタル租稅ヲ酒煙草ノ代價ニ籠メテ更ニ消費者ヨリ回收スルモノナルコト即チ租稅ノ轉移アルコトヲ豫メ推測シタルモノナリ此場合ニ於テ租稅ノ轉移ハ豫期ノ如ク行ハル、ヲ以テ正當トス若シ其希望ヲ以テ賦課シタル租稅ニシテ轉移セサルトキハ則チ國民中其租稅負擔ノ公平ヲ得ラレサルニ至ル例ヘハ酒煙草ニ非常ノ重稅ヲ賦課シタルカ故ニ販路全ク杜絶シ爲メニ酒造家煙草營業者ヲノ盡ク破産セシムルニ至ルカ如キコトアラハ

其消費稅ヲ賦課シタル當初ノ目的ハ達セラレズシテ消費稅ハ却テ只一種ノ酒造家煙草營業者ヲ苦惱セシムル所ノ營業稅トナリテ終ランノミ併シナカテ茲ニ眞ニ營業ニ課シタル營業稅ト消費稅トハ全ク之ヲ區別セサルヘカラス蓋シ同一酒造家ニ賦課スル所ノ租稅ト雖モ營業稅ハ酒造家ノ數ヲ知ランカ爲メニスルモノニシテ立法者モ豫テ酒造家カ自己ノ所得若クハ財産ノ中ヨリ其稅ヲ拂ハンコトヲ希望シタルヲ以テナリ是レ之ヲ豫メ轉移ナカラシムルコトヲ希望シタルノ稅トハ云フ然レトモ酒類ノ營業繁盛ナルトキハ酒類營業者ハ尙ホ之ヲモ酒ノ價ニ包含セシメ更ニ消費者ヨリ回收スルコトアリ然ラハ則チ政府カ豫メ希望セサル租稅ノ轉移モ亦往々ニ之アルヤ知ルヘキナリ或人ハ以爲ラクスカル豫期セサル租稅ノ轉移ノ作用ハ能ク各人民間ニ租稅ヲ配賦シテ自然外形ニ現ハレタル租稅ノ不平均ヲ矯正スルノ効

豫期セサル租稅ノ轉移

アリ例へハ農民ナリ商工ナリ一局部ノ人民カ非常ノ重税ヲ負擔スルカ如ク外面ヨリ見ユルコトアリトモ其負擔ハ漸次各人が己ヨリ之ヲ遠ケ避ケント努メ乃チ他人ニ讓移スルコトニ由テ轉移スルモノナルカ故ニ遂ニハ自然ニ公平ニ社會ノ各人民間ニ分配セラル、ニ至ル左レハ表面上租税ノ負擔ノ一方ニ偏重ナルヲ見テ直チニ之カ輕重ヲ批判スルコトヲ得ス何ントナレハ租税ノ意外ナル自然ノ轉移ハ實ニ租税ノ負擔ヲ公平ニ分配セシムルモノナレハナリト此言タル萬事ハ常ニ善ナリトスル彼ノ歡世論者ノ説トスレハ更ニ之ヲ辨解スルノ必要ナケレト抑モ此作用カ租税ヲ公平ニ各人民間ニ分配シテ偏重偏輕ナカラシムルモノナリト云フニ至リテハ果シテ信スルヲ得ヘキ歟余輩ヲ以テ之ヲ見レハ斯カル事ハ聊カ信スルニ足ラサルナリ勿論意外ナル租税ノ轉移全ク起ラサルニハアラサレトモ此故ヲ以テ租税ノ公平ナ

ル普及ハ之ヲ自然ニ任セ租税ヲ賦課スルニ方リテ負擔ノ販着スル所ヲ考ヘ公平ニ普及セシメンコトヲ計ルノ必要ナシト云フコトヲ得ス必スヤ租税ヲ課スルニ方リテハ先ツ豫メ其負擔ノ販着スル所ヲ考察シ而ル後チ各級人民ノ間ニ公平ニ普及セシメンコトヲ勉メサルヘカラス又意外ナル租税轉移ノ現象アルカ爲メニ租税ハ被税者ノ財力ニ比例セシムルコトヲ勉メサルヘカラストノ原則ヲ等閑ニ付スルコトヲ得ス負擔ノ意外ナル轉移行ハル、ハ猶ホ殆ト豫期シタル轉移ノ行ハレサル場合ト齊シク立法者ノ意思ノ外ニ轉移シタルモノナレハ決シテ之ヲ課税上好結果ヲ得タルモノトハ云フコトヲ得サルナリ然レ凡テ租税ハ各人カ負擔スルコトヲ忌嫌スルモノニシテ可成其負擔ヲ避ケテ之ヲ他人ニ讓移センコトヲ勉ムルモノナルカ故ニ其負擔ノ轉移スルトコロ實ニ意外ノ邊ニアルコトアリテ租税負擔ノ販着スル所



租税轉移  
ニ關シテ  
ボリユー  
氏ノ舉  
ル例

ハ容易ニ断定シ難キモノナリ今左ニボリユー氏ノ言ヲ引用シテ其一  
班ヲ示サン  
抑モ租税ハ多少歲月ヲ經過スル時ハ逐ニ實際之ヲ負擔スル者ヲ變ス  
ルニ至ルヘシ實地ノ成績ニ由テ之ヲ考ルニ舊置ノ租税ハ其效驗新設  
ノ時ニ於ルト同一ナル者ニアラス例ヘハ動産公債証券株券ノ類ニ租  
税ヲ課スル時ハ其之ヲ負擔スル者ハ當時ノ所有者ニシテ當時ノ所有  
者ハ其税額ニ當ル歳入ヲ損シ又内國普通利子ノ割合ニ據リ此税額ヲ  
資本ニ積算シタル額ニ均キ資本ヲ失フヘシ然レトモ多少歲月ヲ經過  
スル後ハ新ニ生スル動産ニ於テハ(假令悉ク至ラサルモ新ニ發セラル  
、公債証券ニ於テハ)此租税ヲ負擔スル者ハ應募者ニアラスシテ其証  
書ヲ發行スル所ノ會社若クハ事業ニアルヘシ若シ賃銀若クハ一般ノ  
消費品ニ租税ヲ課スル時ハ(一般ノ消費品ニ租税ヲ課スルノ結果猶ホ

賃銀ニ課スルト同シ)其始メ之ヲ負擔スル者ハ應ニ勞力者ナルヘシ然  
ルニ久キヲ經レハ多クハ之ヲ使傭主ニ讓リ使傭主ハ又此負擔ヲ以テ  
更ニ消費者ニ課スヘシ製造家若クハ商賈ニ租税ヲ課スル時ハ其一般  
ノ費用ヲ増加シ其始メハ此輩ノ利益ヲ減縮スヘシ然ルニ若シ之カ爲  
メニ利益ヲ減シテ損失ノ危険ヲ償フニ足ラサルハ漸次其營業ヲ廢  
スルニ至ルヘク其極逐ニ其課セラレタル租税ノ大部分ヲ以テ更ニ消  
費者ニ拂ハシムルニ至ルヘシ右ノ如ク負擔ヲ轉移セサル者ハ只地租  
讓與税及他ノ例外ノ諸税トス云々

第七十節 租税負擔ノ原理 租税ノ負擔ハ納税者必スシモ

之ヲ荷フヘキモノニアラスシテ多少ノ日月ヲ經過スル中ニハ當ニ轉  
移ノ現象ニ由リテ其負擔ハ自カラ他ニ移リ或ハ數人間ニ分配セラル  
、ニ至ルヘキナリサレハ前節ニ舉ケタル間税ニアリテハ負擔ハ常ニ

租税ノ負  
擔ハ一定  
不變ノモ  
スニアラ  
テ

家屋稅負  
擔ノ例

間接ニ納稅者ヲ經テ第三者ニ墜落シ直稅ニアリテハ直接ニ納稅者常ニ租稅ヲ負擔ストハ未タ斷定スルコト能ハサルナリ例ハ家屋ニ稅アリトセンニ所有者自ラ其家屋ニ住居スル時ハ其家屋稅ヲ負擔スル者ハ納稅者即チ家屋ノ所有者ナリト雖モ若シ家主之ヲ他ニ貸ス時ハ家屋稅ヲ家賃ニ加ヘテ借家人ヨリ之ヲ回收スルコトヲ得ルカ故ニ(若シ幸ヒニシテ繁華ノ市街ニシテ家屋ノ需要盛ナル時ハ)家屋稅ノ負擔ハ納稅者ヲ經テ第三者即チ借家人ニ墜落スルモノナリ然レモ若シ漸次衰退ニ趣ク村落ノ家屋ニ租稅ヲ課スルハ假令家主之ヲ他人ニ貸付クル場合ニ於テモ家賃ニ加ヘテ家屋稅ヲ回收スルコト能ハズ由是觀之ハ家屋稅ノ負擔ハ場合ニ因テ異ナルカ故ニ常ニ何人ニ墜落スルヤ々々時ノ經濟ノ狀況ヲ究查考察スルニ非スハ之ヲ知ルコト能ハス是レ則チ租稅ノ負擔ハ一定ノ理論ヲ以テ定ムルコト能ハサル所以ナリ又タ

消費稅負  
擔ノ例

消費稅ノ如キハ通常ノ場合ニハ消費物品ノ製造家ハ之ヲ販賣スルニ當リテ其代價ノ中ニ租稅ヲ加ヘテ消費者ニ之ヲ轉移スルモノトシ立法者モ亦其轉移アランコトヲ希望シタルモノナレモ若シ現今ノ如ク盛ンニ外國ト輸出入ノ關係アルハ此豫期サレタル轉移スラ尙且ツ立法者ノ希望通りニ行ハレサルコト往々ニ之アリ今日ニ於テハ外國ノ製產品ハ内國ノ製產品ト競争シ勞力資本モ亦競争スルコトヲ得ルカ故ニ(是レ關稅ノ改良ト通信運輸ノ便非常ニ發達セシニ由ル)假令消費稅ヲ工業家商業家ニ課シタリトスルモ内國ノミナレハ營業者ハ直チニ租稅ノ高ヲ物價ニ加ヘテ更ニ消費者ヨリ回收スルコトヲ得ヘケレモ尙ニ外國ノ競争アルトキハ(若シ關稅ヲ以テ同額ノ補償稅ヲ外國ノ輸入品ニ課セサルモノトスレハ)租稅アリト雖モ物價ヲ騰貴スルコトヲ得ス故ニ營業者ハ租稅ノ額ヲ價格ニ包含セシメテ更ニ消費者ヨリ

營業稅負  
擔ノ例

回收スルコトヲ得サルナリ又々勞力者ニ課税スルハ調節ニ引用セ  
 シボリユ一氏ノ言ニ於ケルカ如ク勞力者ノ困難ヨリ資本家ニ迫リテ  
 賃銀ヲ増加スルコトヲ得ルカ故ニ租税ハ資本家ニ轉移スヘケレモ若  
 シ外國ヨリ自由ニ且ツ容易ニ勞力ヲ輸入スルトキハ更ニ賃銀ヲ増加  
 スルコトヲ得サルカ故ニ其租税ハ到底勞力者自身ニ負擔セサルヘカ  
 ラサルニ至ル此ノ如ク外國トノ關係ヨリシテ輸出入ノ盛ナル國ニ於  
 テハ租税負擔ノ歸着スル所モ亦之カ爲ノニ左右セラル、一尠カラサ  
 ルナリ又々營業稅ノ如キハ直税ニシテ營業者自カラ之ヲ負擔スト稱  
 スレモ若シ税額極メテ輕微ニシテ營業繁榮ニ物品ノ販路愈盛ナル  
 キハ營業者ハ其税額ヲ加ヘテ物品ノ代價ヲ引上ケ容易ニ租税ヲ回收  
 スルコトヲ得ヘシ之ニ反シテ消費稅ナリトテ若シ重キニ過クルハ營  
 業者物品ノ價ヲ引上グレハ從テ販路減少スルノ恐レアルヲ以テ若シ

租税ノ負  
擔ハ種々  
ノ狀況ニ  
由テ動搖  
セラレ

租税負擔  
ノ販着ス  
ル所ハ弱  
者ニアル

全部ニアラスンハ少クモ其一部分ノ租税ヲ自身ニ負擔セサルヘカラ  
 カルコトアリ去レハ租税負擔轉移ノ現象ハ豫期シタルモノト豫期セザ  
 ルモノトノ二種アレモ其負擔ノ販着シ墜落スル所ニハ到底一定不變  
 ノ原理ヲ與ヘ易カラス即チ時ノ經濟ノ狀況ト其周圍ニ於ケル外國ト  
 ノ關係徵收方法ノ差異税率ノ輕重等ニ由リテ變スルモノナリ故ニ租  
 稅負擔ノ歸着スル所ニ就キ更ニ一般普通ノ原則ヲ與フルコト愈難ク  
 只大休テ云フニ止リテ必ス凡テノ場合ニ於テ此ノ如クナルモノナリ  
 トノ斷言ヲ下スコトヲ得ス尙ホ換言スレハ到底一稅毎ニ又々種々ノ  
 場合ニ當リテ精細ニ之ヲ研究セサルヘカラサルモノナリ併シナカラ  
 租税負擔ノ歸着スル所ニ付キテ尙ホ強ヒテ一般普通ノ原則ヲ與ヘン  
 トセハ余輩ハ將ニ云ハントス是レ則チ需要供給ノ有様ニヨリテ異ナ  
 ルモノニシテ需要者若クハ供給者中市場ニ於テ取引上弱者ノ地位ニ

第七章 租税ノ負擔及其轉移

立ッモハニ歸スルモノナリト最モ顯著ナル例ヲ取リテ之ヲ證明セシ  
 ニ酒或ハ煙草ノ消費稅ノ如キ其課稅ノ爲ノニ酒煙草ノ代價騰貴スル  
 モ猶ホ毫モ需要減セサルトキハ弱者ハ則チ需要者ナルカ故ニ負擔ハ  
 需要者ニ歸スヘケレト課稅ノ爲ノニ代價上リ隨テ酒煙草ノ需要ヲ減  
 少スルトキハ消費者ハ則チ強者ニシテ弱者ハ則チ酒造家煙草營業者  
 ナレハ已ムヲ得ス酒造家煙草營業者ハ租稅ノ全部若クハ其一部ヲ負  
 擔セサルヘカラス如何ナル稅ニ於テモ此理ハ確然存スルモノナリ去  
 レハ概テ新稅ノ設置セラル、ヤ先ッ直接ニ課稅セラレタルモノ之ヲ  
 納稅セサルヲ得ス是レ即チ弱者ナレハナリ然レト納稅者ハ漸次之ヲ  
 他人ニ移サンヲ得ヌ又遂ニ除々ノ間ニ弱者ニ移スヲ得ルナリ而  
 シテ之ヲ移スヤ先ッ初メニ其一部分ヲ移シテ己レ之ヲ分擔シ而シテ  
 除々ノ間ニ竟ニ其全部ヲ弱者ニ移スモノナリ故ニ若シ納稅者自ラ經

濟上弱者ノ地位ニ立ッキハ到底之ヲ移スヲ能ハスシテ己レ却テ之ヲ  
 負擔スルヲ免レサルナリ

セー氏ノ  
 說

(備考)セアン、パプチスト、セー氏ノ如キハ此說ヲ主張シテ租稅ヨリ間  
 接ニ生スル影響ハ頗ル宏大ニシテ殆ト直接ノ影響ニ過クルカ故ニ  
 租稅ヲ選擇スルニモ殆ト甲乙ナシトマデ思惟セルモノ、如シ氏ノ  
 言ニ凡ソ租稅ハ必ス社會ノ何人ニ墜落スヘキヤ其原則ヲ定ント欲  
 スルハ實ニ困難ヲ免レス元來租稅ハ各人勉メテ己レヨリ之ヲ遠ケ  
 ント欲スル所ノ荷物ナルカ故ニ之ヲ遠ケ得サル所ノ人ニ向テ墜落  
 スヘシ云々ト

故ニ前ニ述ヘタル租稅ハ多少ノ年月ヲ經レハ漸次社會ノ各階級間ニ  
 配賦スト云ヘルノ說ハ全ク非ナルニ非ス又其傾キ絶テナシトハ未ダ  
 斷言スルヲ能ハズ何トナレハ租稅ニシテ舊置ノ者ナルトハ習慣ニ由

舊慣ノ租  
税ハ變更  
シ易カラ  
ス

テ人民經濟ノ狀況カ自然ソレニ適應スル如クナリ行キテ新タニ租税  
ヲ課セシキノ如ク負擔ノ苦痛ヲ感スルヲ甚シカラサルモノナレハナ  
リ然レモ若シ新タニ租税ヲ課セラル、カ若クハ舊制改革セラル、キ  
ハ仮令良税ヲ以テ不良ナル租税ニ代ヘ又ハ舊制ノ惡シキモノヲ更ニ  
良制ニ改ムル時ト雖モ(例ヘハ本邦ノ地租ニ檢見法ヲ廢シテ全國畫一  
ノ地租改正ヲ行ヒタルカ如キ)尙ホ人民ノ苦情不滿ハ實ニ招キ易キモ  
ノナリ故ニ其甚タシキニ至テハ地租改正ノ際ノ如ク終ニ其不滿ヲ竹  
槍席旗ニ訴フルニ至ルニアラスヤ亦以テ租税制ニ於テ舊慣舊制ノ濫  
リニ變更スヘカラサルヲ見ルニ足ルヘシ

ラートゲ  
ン氏地方  
財政學ヨ  
リ引ケル  
例

(備考)ラートゲン氏地方財政學ニ曰ク、往時ノ經濟學者ハ租税負擔ノ  
轉移ヲ簡單ニ解釋シ而テ始終同一ノ形式ニ從テ行ハルヘキモノト  
信シタリ然ルニ經濟社會ノ實地ハ簡單ナル始終同一ノ形式ニ從テ

モノニアラスシテ却テ其反對ニ於テ甚タ複雜ナル運行ヲ爲スモノ  
ナレハ租税負擔ノ轉移モ亦タ複雜シ何ノ地何ノ時ヲ問ハス必ス同  
一ナル能ハス例ヘハ輸入税ニ在テハ輸入商必スシモ自ラ之ヲ負擔  
セスシテ輸入品ノ代價ヲ騰貴シ以テ其税額ヲ物品ノ代價ニ轉移ス  
ト斷言スルコトヲ得ス即チ一例ヲ舉ケテ之ヲ説明センニ數年以來  
北米國ヨリ歐州ヘ輸入スル小麥ハ極メテ廉價ナルニ因リ歐大陸ノ  
小麥ヲ耕作スル農民ハ殆ト之ニ堪ヘスシテ其業ヲ失ハントセリ此  
ニ於テ獨逸政府ノ如キハ主トシテ米國ノ小麥ニ重キ輸入税ヲ課シタ  
ルニ其結果ハ獨逸ノ市場ニ於ル米國產小麥ノ代價ヲ騰貴セスシテ  
却テ之ヲ低落セシメタリ何トナレハ米國產ノ小麥ハ歐州產ノ小麥  
ノ競争ヲ受ケタルニ依リテ其代價ヲ低落シ即チ輸入商人自ラ其税  
額ヲ負擔スルニアラサレハ到底之ヲ市場ニ賣ルヲ得サルニ至リ

第七章 租税ノ負擔及其轉移

タレハナリ之ニ反シテ現ニ歐洲ノ小麥不作ヲ告ケ從テ其代價騰貴  
スルトキハ米國産ノ小麥モ亦高價ニテ輸入スルカ故ニ此場合ニ於  
テハ其輸入税ハ當ニ輸入商人ノ負擔ヲ去リテ小麥ノ代價ニ轉移ス  
ヘシ是ニ依テ之ヲ觀レハ租税負擔ノ轉移ハ時ト場合ニ依リテ千様  
萬態ニ行ハレ決シテ一定ノ形式ニ由ラサルモノタルヤ亦甚タ明カ  
ナリト

第七十一節 租税ノ轉移ト租税ノ影響ハ之ヲ區別セ

サルヘカラサルヲ 以上述ヘシ如ク租税ノ負擔ニハ豫期サレタ  
ル轉移アリ然レモ其轉移ノ往々希望ノ如ク行ハレサルヲアルハ是レ  
他ニ幾多ノ原因アリテ常ニ之ヲ遮蔽スルカ故ナリ然レモ又租税ニハ  
豫期セラレサルノ轉移アリテ租税新設ノ際ニハ必ラス社會經濟ノ狀  
況ヲ攪亂スルヲアレモ遂ニ數多ノ年月ヲ經過スルニ從テ其負擔ノ漸

租税ノ影  
響ハ轉移  
ト混スヘ  
トカサ  
カサ  
カサ

次他ニ轉移シテ新置ノ時ト大ニ其狀況ヲ異ニスルニ至ルモノ少シト  
セス然ルニ世ニハ豫期セサル租税ノ意外ナル轉移ト租税ノ影響トヲ  
更ニ相混同スルモノ未タナキニシモアラズ抑々租税新タニ設置セラ  
ル、ニ方リテヤ勢ヒ種々ノ影響ヲ經濟上ニ及ボサ、ルモノナク又之  
レカ影響ヲ蒙ラサルモノナシ例ヘハ地租ノ増加シタルカ爲メニ地價  
ノ一般ニ下落スルカ如キ或ハ動産ニ課税セラレタルカ爲メニ俄然其  
價格ヲ低落スルカ如キ等即チ是ナリ蓋シ租税ノ爲メニ其斯ノ如キ結  
果ヲ生スルハ正ニ是レ租税ノ影響ニシテ或人ノ如キハ之ヲシモ尙ホ  
租税ニ於ケル負擔ノ轉移ナリト稱スレモ余ハ敢テ之ニ同意スルヲ能  
ハス或人復タ唱ヘテ云ヘテク地租及所得税ノ如キ種類ノ租税ニ於テ  
モ尙ホ負擔ノ轉移アリト而シテ其理由ヲ問ヘハ則チ曰ク地租及所得税  
ヲ課セラレタル納税者ニ在リテハ租税ノ爲メニ一層支出ヲ増加スル

カ故ニ必スヤ以前費シ、奢侈ノ消費ヲ節減スヘシ果シテ然ラハ之レ  
 カ供給者タル商人ノ如キハ販路減縮スルカ故ニ從テ損失ヲ被リ即チ  
 租税ノ影響ヲ受ケサルヲ得サルヘシ是レ租税負擔ノ轉移シタルモノ  
 ナリト余ノ考ヘテ以テスレハ是等ハ決シテ租税負擔ノ轉移トハ稱ス  
 ヘカラサルナリ何トナレハ奢侈物品ノ供給者ハ間接ニ租税ノ影響ニ  
 因リテ損失ヲ蒙リタルモノナリトハ云ヒ得ヘケレ凡決シテ地主ク若  
 ハ所得税上納者ノ租税ヲ分擔シタモルノナリトハ云フコト能ハサレハ  
 ナリ況ヤ地主若クハ所得税上納者ハ本ト奢侈物供給者ノ損失ニヨリ  
 テ自レカ上納スル所ノ租税ノ一部分ヲモ補償センモノニアラサルニ  
 於テチヤ故ニ是等租税ノ及ホス所ノ種々ノ宏大ナル影響ヲ併セテ之  
 チ租税負擔ノ轉移ト稱スルハ實ニ謬見ト云ハサルヲ得サルナリ

### 第八章 租税ノ原則

#### 租税ノ三大原則

#### 第七十二節

#### 租税ノ三大原則

既ニ前章ニ於テ租税ニ關ス

ル一般ノ事柄ヲ説了シタレハ今ヤ進ミテ租税ノ分配賦課徵收等ニ關  
 シ更ニ其原則ヲ述ヘントス

新ニ租税ヲ賦課徵集スルニ方リテ吾人ハ如何ナル定理原則ニ憑據ス  
 ヘキヤ又從來ノ租税ノ當否善惡良不良ヲ判斷批評スルニ方リテ吾人  
 ハ如何ナル標準ニ由リテ之ヲ判スヘキヤ當局者ハ租税ノ存廢ヲ議ス  
 ルニ方リテ如何ナル點ヨリ之カ當否ニ付キテ觀察ヲ下スヘキヤ是レ  
 吾人ノ宜ク注意スヘキ重要ノ問題トス往昔社會ノ規律未タ整ハス國  
 君ノ權力無限ニシテ夫ノ租税賦課ノ如キ偏ニ君主ノ意志ニノミ是レ

顧リシ時代ニ在リテハ又曷ソ租税ノ徵課ナトニ就テ憑據スヘキノ原則  
 アランヤ唯夫レ租税ハ苛虐ナルモノニシテ殆ント君主カ民ヲ虐スル  
 一桎梏トノミ考ヘラレシナリ然レトモ政治學ノ已ニ進歩シタル今日ニ  
 在リテハ租税ノ賦課徵集ニ就キテモ或ハ歴史沿革ノ產物タル或ハ多  
 年ノ經驗ニ徴シ因テ以テ推究論明セラレタル數多ノ原則ヲ生出スル  
 ニ至レリ例ヘハ租税ハ專横放恣ナルヘカラスト云ヘル原則ハ畢竟既  
 往ニ於テ暴虐ナル君主ノ御用金ナトト名ケテ數々苛酷ナル聚斂ヲナセ  
 シ反動ニ出テタルカ如ク又租税ハ資本ニ課スヘカラスト云ヘル原則  
 ハ是レ學理的講究ノ結果ニ出タルカ如キ即チ是レナリ之ヲ要スルニ  
 今日ニ於テハ既往ノ經驗若クハ學理ノ講究ニ基キタル租税ノ原則數  
 多アリテ彼ノアダムスミス氏カ其著書富國論ニ於テ講說セシ租税ノ  
 四原則ノ外尙ホ既ニ數多ノ原則ヲ生スルニ至レリ乞フ是ヨリ余輩ハ

第一、公正ノ原則

先ツ租税ノ三大原則ヲ説述セン

第七十三節 第一、公正ノ原則 財政ノ事ハ須ラク公正(國家ノ

人民ニ對スル關係)ノ點經濟社會物質上ノ利益ノ點及財政(即チ政府行  
 政上便宜ノ點)ノ三點ヨリ之カ觀察ヲ下サ、ルヘカラスト故ニ租税ヲ設  
 グルニ方リテモ先ツ第一ニ國家道義上公正ノ理ニ背戻セザラント是  
 レ主トシ勉ムヘキノ事タリ夫レ公正ノ原則ト云フハ治者被治者則チ  
 政府ト人民トノ關係ニ屬スル原則ヲ指稱スルモノニシテ例ヘバ租税  
 ハ憲法ノ規定スル所ニ遵フニアラスンハ之ヲ設置スルヲ得スト云フ  
 カ如キ或ハ國家ノ人民ニ對スル國家ノ道義ニ背戻スヘカラスト(例ヘハ  
 租税ハ各人民ヨリ公平ニ之ヲ徵集シ毫モ偏頗ナカランコトヲ要スト  
 云フノ類)ト云フカ如キノ類是レナリ尙ホ治者ノ被治者ニ對スル關係  
 ヲリシテ生シ又ハ國家ノ守ラサルヘカラスト道義上ヨリ生スル原則



第三、經濟上ノ原則

等ニ就キテハ乞フ始ラケ余輩力次章ニ於テ細説スル所アルヲ略テ  
**第七十四節 第二、經濟上ノ原則** 租稅ハ單ニ政治上公正ノ  
 點ヨリ觀察シテ國法ニ背反セス又公正ノ理ニ適合スト云ヘルノミニ  
 テハ未タ以テ足レリトセス猶ホ須ク吾人ハ又社會經濟ノ點ヨリ之  
 カ觀察ヲ下サ、ルヘカヲス抑、租稅ハ必須ナル可厭的ノモノニシテ人  
 民ハ爲メニ粒々辛苦ノ結果即チ生命ト其價直ヲ均クスル財產ヲ擧ケ  
 テ之ニ供スルモノナリトハ余輩カ已ニ既ニ前章ニ説キシ所ナリ夫レ  
 然リ故ニ政府ハ此可厭的物ヲ人民ヨリ徵集スルニ方リテハ十分注意  
 チ加ヘ謹慎ノ上ニモ尙ホ謹慎ヲ重テ其便宜ト利益トヲ謀リ以テ其  
 福源ヲ傷害セサランコトヲ努ムヘキナリ是故ニ稅制ノ可成社會經濟  
 ノ理ニ背反セサランコトヲ要スルハ固ヨリ喋々ノ辯ヲ竣タサルナリ  
 若シ夫レ幾分カ社會ノ經濟ニ障礙ヲ與フルコトノ止ムヲ得スハ宜

第三、財政上ノ原則

シク其妨害ヲ最少點ニ減スルコトヲ勉ムヘシ稅法ヲ以テ社會ノ經濟  
 ヲ紊亂シ生産ヲ抑制シ分配ヲ左右シ交易ヲ滯滞セシムルカ如キコト  
 アラハ其結果ハ當ニ政府ノ財政上ニ反應シテ則チ稅源枯竭シ國帑空  
 乏ヲ告グルニ至ルヘキナリ故ニ政府カ人民ノ便宜福利ヲ保護スルハ  
 即チ政府財政上ノ便宜ト相調和スルモノニシテ決シテ兩者矛盾スル  
 モノニアラサルナリ

**第七十五節 第三、財政上ノ原則** 以上述ヘシ如ク租稅ハ公

正及ヒ經濟ノ理ニ反カサランコトヲ要スルハ勿論ナレトモ未タ此二點  
 ノ觀察ノミヲ以テ足レリトセス尙ホ余輩ハ第三ニ租稅ノ起原ニ溯テ  
 財政上即チ政府ノ便宜ナル點ヨリ更ニ之カ觀察ヲ下ストノ必要ナル  
 チ看ルナリ或ル偽政治家ハ以爲テク租稅輕減スヘシ陸海ノ軍備擴張  
 スヘシト而シテ軍備ノ擴張ハ經費ノ増加ヲ要シ租稅ノ輕減ハ經費ヲ

支出スルノ源ヲ塞クモノニシテ到底行フヘカラサル矛盾ノ理其間ニ在リテ存スルヲ知ラサルモノアリ之ト甚タ似タル話ハ租税ハ何故ニ必要ナルヤヲ忘レテ租税ハ國庫ニ十分ノ收入ヲ納レサルヘカラスト云ヘル極メテ見易キ道理ヲ遺忘スルモノアリ斯カル輩ハ租税ハ人民ノ利益ヲ害セス且公正ナレハ以テ足レリトシ國家ニ何程ノ收入ヲ與フヘキヤヲ觀察セスシテ猥リニ或租税ヲ賞揚スルモノナリ然レトモ若シ少シク之ニ熟思スルノ時ヲ與ヘハ租税ハ如何程經濟國法及公正ノ理ニ適合スルトモ財政ノ理ニ適合セサルモノハ租税ノ宜シキモノニアラザルヲ知了スルニ足ラン蓋シ租税ノ要理ニ三アリ先ツ第一ニ吾人ノ注意セサルヘカラサルハ某々ノ租税ハ財政上幾許ノ價値アリヤ其收入ハ少キヤ多キヤ其收入ハ増加スルノ見込アリヤ否ヤト云フニアリ而シテ猶ホ進ミテ某ノ租税ハ社會經濟上ニ幾許如何ナル

租税ノ三原則ハ三角ノ形ニ如シ

租税ノ長制ハ三邊ヲ具備セシムルハラス

權影利害ヲ及ホスマト問ヒ而シテ又其租税ハ適法ナリヤ將タ公正ナリヤヲ問ハサルヘカラス此三大原則ハ租税ノ要理ニシテ猶ホ各三角形ノ一邊ヲ成スモノ、如シ三邊共ニ同時ニ具備セシムルハ未タ以テ完全ナル税制ナリトハ云フヲ能ハサルナリ然レトモ此三大原則ハ多少矛盾スル所ナキニアラス故ニ三邊ヲ完備スルヲ亦誠ニ難シト云フヘシ是レ併シナカラ前ニモ云ヒシ如ク結局互ニ調和スルモノニシテ經濟ノ理ニ背戻シタルノ租税ハ遂ニ税源ヲ枯ラシテ國幣ノ利益ニ反スルモノナルヲ又既ニ前上ニ説ケルカ如シ左レハ立法者タルモノハ時ニ應シ機ニ臨ミ右ノ諸點ヨリ觀察ヲ下シ尙ホ完全無缺ナラスト切メテハ各利害ノ輕重ヲ比較シテ勉メテ三點ヨリ觀察シタル諸種ノ原則ニ適應セシムルヲ計畫スヘキナリ抑斯カル調和ハ必ス得タルヘキモノニシテ今一例ヲ舉レハ酒ニ課スル消費税ノ如キ政府財政ノ點ヨリ考

フレハ若シ其税率ヲ最高ナラシムルハ容易ニ最多額ノ收入得ラル  
 ヘク思ハルレトモ亦決シテ然ラサルナリ去レハトテ人民ニ最モ利益  
 ナルカ如ク其税率ヲ更ニ最低點ニ減下セシメンカ是レ又タ收入ノ  
 多額ヲ得ルノ方法ニアラス然レモ兩間自ラ一定調和スルノ點即チ政  
 府人民共ニ俱ニ利益アルノ點アリテ存ス即チ今假リニ其税率ヲ五分  
 ト仮定セン而シテ其一分ノ税率タリシ時ハ政府ノ收入甚タ乏カリシ  
 トセンニ此時ハ政府ノ利益最少ニシテ人民ノ利益最多ノ時ナリ然ル  
 ニ今又假リニ尙ホ一割ニ増率シタリトセン乎前ニ反シ人民ノ利益ハ  
 最少ノ時ナリ故ニ此時ハ政府ノ利益最多ナルヘキニ却テ反對ノ現象  
 ナ呈スルモノナリ何トナレハ酒屋ハ其課セラレタル稅ヲ讓移セント  
 チ類ニ酒ノ價直ヲ騰貴セシムルカ故ニ消費者ハ非常ニ酒ノ消費ヲ減  
 シ竟ニ其販路全ク壅塞スルニ至ルヘク若シ此際酒造家ニシテ自ラ酒

人民ノ便  
 ト國庫ノ  
 和利トノ調

稅ヲ負擔スレハ到底非常ノ損失ヲ被ルヘケレハ勢ヒ酒ノ製造ヲ減少  
 スヘク隨ヒテ政府カ増率ニテ得ル所ハ消費ノ減少ニ由リテ相償ハス  
 爲メニ收入最多ナラサルニ至ルヘケレハナリ而ルニ若シ其税率ヲ  
 五分ト云ヘル點ニ止メ而シテ人民ノ利益ヲ最少ニモセス尙ホ政府ノ  
 利益(收入)ヲ最多ナラシムルヲ得ルモノトヒハ此點ハ則チ双方ノ利  
 益ヲ調和シタルノ點ト云フヲ得ヘキナリ然レモ又時トシテハ國庫ハ  
 年度開始ノ都合ニヨリ地租ハ四月ノ始メニ納入スルヲ以テ便宜トス  
 ルモ人民ハ之ヲ四月ニ納ムルヲ不便トスルカ如キナシトセス斯カ  
 ル時ニハ人民經濟上ノ利益ト國家財政上ノ便宜ト互ニ撞着スルモノ  
 ナレトモ如此キ場合ニ際シテハ宜ク兩者ヲ比較シテ孰レカ輕キ方ヲ  
 犧牲トシ以テ一方ノ利益ヲ計ルモ絶エテ害アルヲナカルヘキナリ

第九章 公正ノ原則

公正ノ原則トハ  
國家カ其人民ニ對スル關係ヨリシテ生スル所ノ  
ノ守ラサルヘカ  
ルベカラサ  
ナリモノ

第七十六節 公正ノ原則トハ何ソヤ曰ク公正ノ原則トハ税制ヲ論スルニ當リテ國家カ其人民ニ對スル關係ヨリシテ生スル所ノ原則ヲ指稱ス元來公正ト云フコトハ國家カ人民ニ對スル道義上務メテ守ラサルヘカラサルノ事ニソ即チ此ノ緣由ニ因リテ又爰ニ數多ノ原則ヲ生スルニ至ルモノトス然ラハ余輩ハ何ヲ以テ公正ニ適シタル租税ト云フヘキカ反言スレハ公正ノ原則トハ抑モ如何ナル原則ヲ云フヤ乞フ之レヨリ余輩ハ逐次數種ノ原則ヲ列舉セントス而ルニ今他ノ二原則ニ先チ敢テ茲ニ公正ノ原則ヲ述ヘサルヘカラサル所以ノモノハ蓋シ經濟上ノ利益財政上ノ便宜ハ共ニ與ニ大切ナレトモ先ツ租

何オカ公  
正ノ原則  
ト云フヤ

税ハ國法上如何ニ公正ナルヤ否ヤヲ觀察セサルヘカラサルコト更ニ之レヨリ必要ナレハナリ

租税ハ適  
法ナルヲ  
要ス

第七十七節 第一租税ハ正當ニシテ且ツ適法ナルコト

ヲ要ス 今日ノ租税ハ正當ノ手續即チ適法ノ順序ヲ以テ生シタル者ニ非ラサルヨリハ之ヲ正當ナル租税トハ云フヘカラス抑々專制時代ニ於ケルノ租税ハ固ト帝王ノ意志ヲ以テ擅ニ輕重スルヲ得タルカ故ニ間法律上定ムル所ノ手續ヲ踏マスシテ新ニ租税ヲ設置シ或ハ何時ニテモ隨意ニ君主タル者ハ租税ヲ増加スルヲ自由ナリキ然レトモ既ニ今日ニアリテハ租税ハ必ス各國法律上ニ規定シタル所ノ順序ニ從ヒ賦課徵收セラレサルヘカラサルコトナレリ加フルニ各立憲國憲法ノ規定ハ「新ニ租税ヲ起シ或ハ税率ヲ變更スル時ハ租税ヲ負擔スル一般人民若クハ其代議士ノ承諾ヲ經サル可ラス」ト云ヘル箇條ヲ以

租税ノ新  
設ト即率  
ハ人増者  
チ被稅者  
ノ承諾ヲ  
經ルヘカ  
ス

第九章 公正ノ原則

テ確然動スヘカラスアルノ一原則トハナセリ是レ蓋シ英國ニ於テハ其初ノハ沿革的ニ發達シタル政治上ノ原則ニ過キサリシカ星移リ物換リ今日ニ於テハ既ニ之ヲ憲法ノ明文ト爲スト否トニ拘ハラヌ苟クモ人民ヲ代表スル組織ヲ有セル國柄ニ在リテハ其原則ヲ之ニ資ラサルモノ殆ント莫キカ如シ我國ノ如キモ己ニ本年ヨリハ立憲國ノ伴侶ニ入り帝國憲法ハ明ニ租稅ノ新設稅率ノ變更ハ帝國議會ノ協賛ヲ得サル可カラスト規定シ確然此原則ヲ認メタリ去レハ憲法其他ノ法律ニ依リテ既ニ斯ノ如ク定メタルモノナレハ苟モ租稅ヲ賦課徵收スルニ當リテハ即チ憲法ノ定ムル處ニ違ヒ法律ノ定ムル手續ヲ經テ而ル後チ發布セラレタルモノニアラサレハ決シテ之ヲ正當ニシテ適法ナリトハ云フヲ得サルナリ

第七十八節 第二租稅ハ專橫放恣ナルヘカラス故ニ豫

租稅ハ專

橫ナラザ  
ラシクテ  
要シテ  
ハ益ヲ  
ハシメ  
テ納メ  
ス

メ確定シテ人民ニ確知セシムルコトヲ要ス 往昔暴虐ナル君主ハ租稅ヲ以テ人民ヲ苦惱セシムル一種ノ具トシ其放恣專橫殆ント到ラサル所ナカリキ是故ニ今日ニ於テハ租稅ハ專橫ナルヘカラス稅法ハ確定セラレサルヘカラスト云フヲ原則ト爲セリ是レ則チ人民ヲシテ明亮ニ租稅ノ性質納稅者課稅物件稅率賦租徵收ノ方法課稅物件ノ調査法怠納ノ處分懲罰等ハ豫メ稅法ヲ以テ確知セシメサルヘカラサル所以ニシテ亦納稅者ニシテ若シ不正ノ賦課或ハ不當ノ處置ヲ受タル時ハ何レノ官衙ニ向ヒテ裁判ヲ仰キ救正ヲ求ムヘキヤ等ニ就キテモ豫知セシメサルヘカラス所以ナリ

第七十九節 第三租稅ハ一般ニ普通ナルヲ要ス 是レ亦今日租稅ノ原則中ノ最主要ノ部分ヲ占ムルモノトス蓋シ昔時ニアリテハ租稅ハ一般ニ普及スルコトナク租稅ノ徵收ニ應スヘキモノハ獨

租稅ハ一  
般ニ普及  
スルヘカ  
ラス

リ劣等卑賤ノ者ノミニ止マリケ成ル高貴ノ階級ニ属スルモノハ殆ン  
ト納稅義務ヲ有セサルモノ、如ク見做サレタリ去レハ本邦ノ如キモ  
邁キシ封建時代ニアリテハ亦租稅ハ社會各階級ノ間ニ普及セシテ  
貢納ハ専ラ農商民ニ限り徵セラレキ是レ一般普通ノ原則ニ反スルモ  
ノト云フヘシ而シテ佛國ノ如キモ亦革命ノ前マテハ貴族ハ納稅ヲ以  
テ其尊爵ノ威嚴ヲ損スルモノト爲シ爵名アル者ハ曾テ納稅ノ義務ヲ  
負ハサリキ然レトモ今日ニアリテハ既ニ納稅ノ主義全ク一變シ國民  
ハ一般ニ共同シテ國家必妥ノ政費ヲ負擔スヘキモノタルコト茲ニ明  
白トナリシカハ復々尊卑貴賤ヲ別テ納稅ノ免否ヲ爲スノ理ナク隨テ  
赤貧者ヲ除クノ外令ハ納稅ノ義務ヲ負ハサルモノ殆ント之レナキニ  
至リシテ以テ多額ノ納稅ヲ爲スハ還テ名譽ノコト、ナリ加之ナラス  
多クノ國ニ於テハ既ニ納稅ノ多寡ヲ以テ參政權ヲ得ルノ一資格トナ

國家ハ國  
權トシテ  
徵稅ノ權  
利ヲ有シ  
國民ハ一  
般ニ納稅  
ノ義務ヲ  
負フトス  
現今ノ原  
則ナリ

スニ至レリ去レハ今日ニ於テハ社會一般各階級ヲ通シテ苟モ人民タ  
ル者ハ等シク課稅セラルヘキモノトス但タ彼ノ赤貧者ニ限りテ某稅  
額ヲ免除スルカ如キハ實際止ムヲ得サルニ出ツルモノニシテ即チ亦  
タ公衆ノ慈惠ト見做スヘキナリ

第八十節 第四、租稅分配ノ原則即チ「租稅ハ公平ニシ

テ平等ナル」ヲ要ス「是ハ公正ノ原則中最要地ヲ占ムル租稅ノ分配

ニ關シ更ニ大切ナル原則ニシテ即チ租稅ハ公平ニ一般人民ニ賦課セ

ラレサルヘカラス又一一般人民ニ不平均ノ生セサランコトヲ期スヘキ

ノ原則是レナリ然レトモ單ニ租稅ハ公平ナラサルヘカラス平等ナラ

サルヘカラストノミ云ヘハ一方ヨリ之カ解釋ヲ下ストキハ如何ナル

人ト雖モ同一ノ額ヲ納稅セサルヘカラスト云フモノ、如ク即チ僅ニ

日々ノ勞働ニ依リ辛クモ過活スル赤貧者モ錦衣玉食ニ飽暖スル貴族

租稅分配  
ノ原則即  
チ公平ノ  
原則

國民各個ノ納稅額ニ階級ヲ設ケルハ實ニ止ルニ出ツ  
租稅ノ階級ハ何ニ據テ設ケタヘキカ  
第一說、稅額ヲ政府

ノ如キモ皆同一ノ額ヲ拂フヘシト云フモノ、如シ夫レ然リ若シ此ノ如クニシテ余輩カ徵稅ノ目的ヲ達シ得ヘシトセハ則チ可ナリト雖モ若シ此徵稅法ニ據ルトキハ勢ヒ最貧ノ納稅者カ納メ得ル金額ヲ以テ之カ標準トナサ、ルヘカラス果シテ然ラハ吾人ハ又安ニカ國庫ニ必要ナル費用ヲ徵收スルヲ得ンヤ故ニ今日租稅ノ賦課ヲ公平ニスヘシト云フハ敢テ各人一様ニ同額ヲ納メシムヘシト云フニアラス、即チ租稅ニ階級ヲ設ケヘシト云フニアリ而シテ今ヤ何人ト雖モ租稅ニ階級ヲ置クト云フコトニ於テハ既ニ一致スル所ナリ然レトモ其階級ハ何チ標準トシ何ニ應シテ定ムヘキヤト云フニ至リテハ其說數多ニ岐レタリ第一說ハ租稅ヲシテ國家カ各人ニ盡ス所ノ職務ノ費用ニ比例セシムルヲ以テ公平ナリトスルニ在リ即チ納稅者ノ爲メニ政府カ爲シ、職務ノ價直ニ比例スヘキモノナリトセリ是レ恰モ吾人カ商店ニ就

職務ノ費用ニ相當セシムヘシト云ヘタル辨説ノ妄

第二說、稅額ハ各人ノ享受スル利益ノ多少ニ比

キチ一箇ノ物品ヲ購買シタルトキハ正ニ一箇ノ價ヲ拂ヒ二箇ノ物品ヲ購買シタルトキハ二倍ノ價ヲ拂フト同シク若シ之ヲシテ爲シ得ヘキ者ナラシムルキハ其公平ナルヤ洵ニ明カナリト雖モ然レトモ政府カ各人ニ盡ス所ノ職務ノ代價ハ抑モ幾何ナルヤチ確然知悉スルハ固ト決シテ爲シ得ヘキノ業ニアラス彼ノ郵便ノ一書狀ニ二錢ヲ拂ヒ電信一音信ニ十五錢ヲ拂フカ如キ手數料ト名クヘキモノニ於テハ稍明ニ政府ノ職務ニ對スル報酬ハ若干ナリヤチ知了スルヲ得ヘケレトモ抑、政府カ人民ニ盡ス凡テノ職務(就中公共事務)ニ就テハ其費用價直ハ何程ナリヤ到底之ヲ知ルヲ得サルノミナラス恐ラクハ其概算タモ亦知ルヘカラサルナラン然ラハ則チ如何セハ可ナラン耶第二說ニハ曰ク政府ノ保護ニ因テ各人享受スル所ノ利益ハ多少ニ比例シテ納稅スレハ則チ平等ナリト此說モ亦云フヘクシテ行フヘカラサルモノナリ何トナレ

例セシム  
ルヘシム  
云ヘルト  
スノ妄チ辨説

ハ何人カ最モ多ク政府ノ保護ヲ受クルヤ何人カ最モ多ク政府ノ職務  
ヨリ利益ヲ享クルヤハ到底知り難ケレハナリ殊ニ政府ノ保護ヲ多ク  
享クルモノハ貧弱無智ノ者ニ多クシテ富強者ノ如キハ多ク政府ノ保  
護ヲ要セサルヘク然ラハ最モ政府ノ保護ヲ受クルモノハ最モ納税ノ  
力ニ乏シキモノナリ又政府ノ爲ス所ノ事務ハ唯タ警察海陸軍裁判所  
等ノ如キ身財財産ノ保護ノミニ止ラサルカ故ニ彼ノ誘導獎勵ノ如キ  
公益事務ニ至リテハ國民中何人カ更ニ最モ多クノ利益ヲ受クルヤ否  
ヤハ實ニ知り得ヘカチサレハナリ故ニ政府カ盡ス所ノ職務ヨリ納税  
者カ受クル所ノ利益ニ比例シテ租税ノ額ヲ定メントスルハ決シテ爲  
シ得ヘキモノニアラス且ツ其概算スラモ知ルヲ得サルモノナレハ此  
ノ如キ方法ニ依リテ租税ヲ賦課セントセハ遂ニ不公平ニ陥ラサルヲ  
得サルモノナリ只此ノ方法ニ依ルヲ得ヘキハ前ニモ云ヘル如ク手數

租税ハ國  
民ノ財力  
ニ比例セ  
シムヘシ  
トノ原則

料ト名クルモノニ止マリテ決テ凡テノ租税ニ適用スヘカラス(郵便料  
登記料ノ如キハ則チ政府ノ職務ニ對シ利益ヲ受クル人カ其利益ニ應  
ジテ拂フ所ノ代價ナリト云フヲ得ヘキノミ)然ラハ即チ租税ハ何ニ比  
例シテ賦課セハ最モ公平ヲ得ヘキヤ即チ余輩ハアダムスミス氏カ唱  
道セシ租税ノ四則ノ第一ニ置キタル租税ハ國民ノ財力ニ比例シテ賦  
課徴收スヘキモノナリトノ原則ヲ以テ最モ公平ヲ得タル原則トナサ  
ントス夫レ租税ヲシテ各人ノ財力ニ比例セシメントスルハ決シテ財產  
ノ多少ヲ以テ各人カ政府ヨリ利益ヲ受クルノ多少ヲ示セルモノトナ  
スカ故ニアラス元來政府ノ保護ハ單ニ財產ノ上ニノミ止マラスシテ  
身体ノ安寧ヲモ保護シ又人智道義ノ進歩ヲ計リ物質上ノ福祉ヲ増進  
シ殖産工業ヲ獎勵スルコトヲモ司ルカ故ニ財產ノ多寡ニ應シテ政府  
ニ保險料ヲ拂フト云フカ如キ思想ハ太甚タシキ誤謬ナリトハ余輩ノ



國民忍苦  
ノ平等

曾テ駁撃シタル所ナリ故ニ租税ヲシテ其財力ニ比例セシメントスル  
所以ノモノハ蓋シ政府ノ費用ハ國民カ社會ヲ相互ニ維持スルノ精神  
ニ由リ共同一致シテ負擔セサルヘカラサルモノナレハ各人ハ自己貧  
富ノ程度即チ財力ニ應シテ之ヲ納メサルヘカラス而シテ財力ニ比例  
スルトキハ國民中ニ其負擔ノ苦痛ヲ平等ナラシムルヲ以テ是レ實施  
スヘキ最良ノ課税法ナリト云フニアルナリ(茲ニ財力ニ比例スルト云  
フハ各人ノ所有財産ニ比例スト云フノ意ニアラス財産若クハ所得ヲ  
以テ標準トシタル貧富ノ程度ヲ云フナリ)愛ニ國民ノ財力ニ應シテ課  
税スルノ方法ニ二説アリ即チ單ニ財力ニ比例スルカ將タ財力ノ増加  
ニ從ヒテ税率ヲモ増加スヘキカ即チ比例税累進税孰レカ正當ナリヤ  
トノ議論是ナリ請フ此二説ノ得失ニ就キテハ更ニ後章ヲ俟テ論究セ  
ン

租税ハ社  
會ヲ不徳  
義ニ誘導  
セサラン  
トナラス

### 第八十一節 第五租税ハ社會ノ不徳義ヲ是認シ若ク

ハ之ヲ獎勵フルモノダラサランコトヲ要ス 租税ハ徳

義ニ反ス可ラス然レトモ之ヲ以テ租税ヲ以テ社會ノ徳義ヲ改良救正  
スルノ具トナスヘシトナスハ非ナリ或人ノ如キハ此ノ如キ考ヲ有セ  
サルニアラス例ヘハ不正ノ行爲ニ租税ヲ賦課シテ遂ニ之ヲ禁遏セン  
コトヲ目的トシ或ハ國民ノ質素ヲ獎勵シ奢侈ノ風俗ヲ矯正スルノ手  
段トシテ贅澤品ニ租税ヲ課スルヲ以テ可ナリトナスモノアリ然レト  
モ是等ハ租税ノ目的ヲ誤解スルモノニシテ是レ租税ノ誤用ノミ夫レ  
租税ノ目的ハ云フマテモナク政府必要ノ收入ヲ得ルヲ以テ第一ト爲  
サ、ルヘカラス故ニ社會ノ弊風ヲ矯正シ人民不正ノ行爲ヲ禁遏スル  
ノ手段トシテ租税ヲ用フルハ非ナリ何トナレハ若シ此目的ニシテ達  
セラレ漸次社會ノ弊風ヲ除却シ不正ノ行爲ヲ消滅セシムルニ至ラハ

租税ハ一方ニ於テ社會矯風ノ目的ヲ達スルモ一方ニ於テハ政府必要ノ收入ヲ得ルノ目的ヲ達スルコト能ハスシテ却テ漸次課税物件ヲ減少スルニ至レハナリ故ニ租税ハ必スシモ社會ノ道義ヲ進捗セシムルノ具タルヲ要セス

只租税ハ社會ノ不徳義ヲ是認シ若クハ獎勵スルノ具タラザランコトヲ要スルノミ然ラハ則チ何チカ租税ノ不徳義ト云フヤ曰ク第一ニ租税ヲ賦課スル目的物ハ道德ニ反スルモノナルヘカラス例ヘハ賭博ヨリ生スル利益ニ課税スルカ如キハ政府ハ公然賭博ナル不正ノ行爲ヲ是認スルト同一ニシテ此ノ如キ不正ナル利益ニ課税スルハ非ナリ第二ニ租税賦課ノ結果ニシテ亦社會ノ徳義ヲ亂スナカランコトヲ努ムヘシ例ヘハ税法ノ影響ニヨリテ勞力者ヲシテ勤勉節儉ノ美風ヲ失ハシムルカ如キ方向ニ導キ或ハ税法ノ爲ノニ人民ヲシテ投機心ヲ起サ

課税ノ目的ハ不正の者ニシテ避クヘシ

課税ノ結果不徳義ヲ誘導セザラントス

レノ或ハ無智ニ導クカ如キ(例ヘハ書籍ニ重税ヲ課スルカ如キハ則チ智識ノ普及ヲ妨害スル者ナリ)等ノ課税ニ至リテハ最モ不可ナリトス又租税徵收ノ方法如何ハ大ニ社會ノ道義ニ影響ヲ及ホス者ナリ例ヘハ累進法ヲ以テ不公平ナル租税ヲ課スルカ如キ或ハ課税非常ニ苛虐ナルカ如キハ密造密賣ヲ獎勵シ或ハ不正ノ申告ヲ爲ス等ノ人ヲ増加シ社會ノ徳義ヲ腐敗セシムルニ至ルモノナリ豈ニ慎マサルヘケンヤ

第十章 經濟上ノ原則

租稅ハ各人ノ財產ヲ奪取シテ枯渴セザラントス

第八十二節 第一、租稅ハ可成各人ノ所得即チ歲入ヨリ徵收スヘクシテ決シテ之ヲ所有財產ニ及ホサシメサルコト 社會經濟上ノ原則トハ專ラ人民經濟ノ狀況ニ於ケル便宜利益ノ點ヨリ觀察テ下シタルモノ即チ是レナリ蓋シ租稅ノ善惡稅法ノ寬嚴ハ實ニ人民經濟上首要ノ關係ヲ有スルモノニシテ若シ茲ニ一步ヲ過タハ之ヲ小ニシテハ其自然ノ運行ヲ妨害シ之ヲ大ニシテハ國富ノ發達増進ニ少カラサル影響ヲ及ホストアルハ既ニ各國ノ歴史事實ニ徴スルモ亦照々乎トシテ爭フヘカラサルモノトス故ニ政府ノ稅制ヲ布クニ當リテモ唯國家道義上ヨリ觀察シテ之レカ公平普及ヲ謀ル

ノミニテハ未タ以テ足レリトスヘカラス尙ホ宜シク稅制ヲ審議スルニ方リテモ稅制ハ如何ニ人民經濟上ニ影響ヲ及ホスヤ否ヤテ更ニ注目シ而シテ社會物質上ノ利益ニ反スルコト最モ少キモノヲ撰ハサルベカラサルナリ夫レ稅制ノ影響ハ其及ホストコロ大ニシテ或ハ富ノ生産ヲ抑制シ或ハ稅制ノ宜シキヲ得サルカ爲ニ富ノ分配ヲ左右シ又ハ交易ノ上ニ澁滯ヲ生セシノ時ニ物價ニ影響シテ下民ノ生計ヲ困難ニ陥ラシムル等比々トシテ皆稅法ノ惡キニ職由セスンハアラス夫レ然リ實ニ稅法ノ國富上ニ影響スル所斯ノ如ク其レ大ナリト雖モ余輩ノ此章ニ於ケル目的ハ一々之レカ影響關係ヲ查駁セントスルニアラスシテ唯々其影響ノ大ナルモノアルカ故ニ更ニ如何ナル定則アリヤヲ示スニ止マルノミ其第一原則ニ所謂租稅ハ所得ヨリ徵收スヘシト云ヘルハ是レ其稅源ノ枯渴セザラントス欲シテナリ夫レ租稅ノ因テ來ル

第十章 經濟上ノ原則

源泉ハ固ヨリ一ナラスト雖モ要スルニ各人ノ所得若クハ所有財産ヨ  
 リスルニ外ナラズ抑、所得ノ使用ニハ必要ノ消費驅奢ノ消費及ヒ貯蓄  
 ノ別アリテ存スルモノナレハ假令租税ハ所得ニ賦課セラル、トモ其  
 所得ノ大部分ヲ擧ケテ之レカ徴収ニ供スルカ如キニ至ラサレハ敢テ  
 國富ノ發達ニ害ナシト雖モ若シ税法苛重ニシテ必要ノ消費ヲ減セサ  
 ルヘカラサルニ至ラシメ或ハ貯蓄シテ資本トナルヘキ富ノ一大部分  
 ヲ減殺シテ其徴収ニ應スルカ如キニ至ラハ國富ノ増進發達ニ敢テ害  
 ナシトハ決シテ云フコト能ハサルナリ況ンヤ税法惡シキカ爲メ重斂交  
 ヲ至リ租税ハ竟ニ國民所有財産ヨリ出テ即チ資本ノ一部ヲ減殺シテ  
 各人納税スルカ如キニ至ルハ實ニ恐ルヘキモノナルヲヤ何トナレハ  
 所有財産ヨリ租税出ルキハ假令暫時ハ之ニ由ルヲ得ヘキモ久カラズ  
 シテ税源枯渴シ國庫ノ収入隨テ減縮スルヲ免レサルモノナレハナリ

直接ニ資  
 本ニ課税  
 ナスルハ非  
 ナリ

是故ニ租税ノ怠納者多ク現ハレ所有財産ノ公賣處分等續出スルノ時  
 ハ則チ税法苛重ニシテ一方ニ偏重ナルカ若クハ租税一体ニ重キカニ  
 者必ラス其一ニ居ルノ徴候トナスニ足ルヘシ良シ其極ニ達セサルモ  
 若シ課税ニシテ直接ニ資本ニ及ヒ或ハ資本ノ一部ヲ奪取スルカ如キ  
 ニ至ラハ是レ税制ノ宜キヲ得タルモノニアラスト敢テ斷言スルヲ得  
 ヘシ故ニ財産ノ遺傳贈與等ノアリタル場合ニ方リテ之ニ巨額ノ重税  
 ヲ課スルカ如キ假令國庫ニ一時少カラサル収入ヲ納ル、ノ利コソア  
 レ畢竟納税者カ其財産ノ一部ヲ殺テ之カ犠牲ニ供スルモノナルカ故  
 ニ亦決シテ賞賛スヘキモノニ非ルナリ又製造家ノ使用スル組成品材  
 料ニ重税ヲ課スルカ如キ是レ則チ直接ニ資本ニ課税スルモノニシテ  
 資本家ハ之カ爲メニ資本ノ増額ヲ要スルカ故ニ從テ製造品ノ價格ニ  
 騰貴ヲ見ルハ亦勢ヒ免ル、コト能ハサルモノナリ而シテ政府ハ組成品

製造家ノ  
資本ニ課  
税スルニ  
既成商品  
ノ計算上  
ノ比較

即チ資本ニ課税スルモ之ヲ既成品ニ課スルニ比シテ毫モ益アルナ  
キモノトス請フ左表ニ於テ製造家ノ粗成品即チ資本ニ課税スルト既  
成品ニ課税スルトノ計算上ノ比較ヲ示サン

製造家ノ元資本	一〇〇〇
資本(粗成品)ニ課シタル租税	一〇〇
租税アルカ爲ニ増加シタル資本總額	一一〇〇
一割ノ利潤ヲ得ルトシテ製造家カ資 本ニ割シテ得ルトコロノ者	一一〇
卸賣人カ製造家ヨリ買取ル物品ノ價	一二二一〇
卸賣人ノ利潤(一割)	一一二一
小賣人カ卸賣商ヨリ買取ル物品ノ價	一三三三一
小賣商一割ノ利潤	一三三三二〇
小賣物價	一四六四二〇

右ノ小賣物價ヲ其資本ニ租税ナキ場合ト比較センニ左ノ如シ

製造家ノ資本	一〇〇〇
製造家一割ノ利潤	一〇〇
卸賣人カ製造家ヨリ買取ル物品ノ價	一一〇〇
卸賣人ノ利潤(一割)	一一〇
小賣人カ卸賣商ヨリ買取ル物品ノ價	一二二一〇
小賣商一割ノ利潤	一二二一
小賣物價	一三三三一
前ニ粗成品ニ課シタルモノト同額 ノ租税ヲ小賣商ニ課スルトスレハ	一〇〇
小賣物價(租税ヲコメテ)	一四三一

右ニ表ヲ比較スルハ其資本ニ課税スルト既成品ニ課税スルトニ於  
テ政府ハ同額ノ租税ヲ得而シテ毫モ國庫ニ損益スル所ナク却テ物價

二三三〇ノ相違アリ且ツ政府ハ資本ニ課税スルハ一百圓ヲ得ル  
 一割ノ税率ヲ以テスト雖レ之ヲ既成品ニ課スルハ一四三一圓ニ  
 七分ノ税率ヲ課シテ尙ホ一百圓十七錢ヲ得ヘシ豈甚タシキ相違ニア  
 ラスヤ故ニ租税ノ負擔直接ニ資本若クハ所有財産ニ落チンコ是レ宜  
 ク避クヘキ事トス

然レ凡愛ニ租税ハ所得ヨリ徴收スヘク資本若クハ所有財産ヨリ徴收  
 スベカラズト云フコハ夫ノ租税ヲ賦課スルノ標準トシテ所得ヲ撰ム  
 ヘキヤ資本若クハ財産ヲ撰ムヘキヤ等專ラ課税物件ニ就テノ問題ト  
 ハ明カニ之ヲ區別セザルベカラズ而シテ歳入税資本税ノ利害得失ノ  
 如キハ之ヲ後章ニ論スヘシ愛ニ云フ所ハ租税カ所得ノ一部分ヨリ來  
 ル間ハ其害少ケレ凡若シ財産ニ及ヒ資本ヲ減殺スルカ如キ徴候アル  
 事ハ是レ決シテ良税ニアラザルナリト云フニ止マレリ去レハ資本ヲ

財産税若  
 クハ資本  
 税ト所得  
 税トノ得  
 失ハ別ノ  
 問題ニ屬  
 ス

標準トシテ賦課シタル資本税ノ如キハ必スシモ資本家ノ資本ヲ減殺  
 セサルヘシ之ニ反シテ所得ヲ標準トシテ課シタル租税ト雖レ若シ重  
 課セラル、凡ハ其資本若クハ所有財産ニ及フヘシ前ニ一二ノ例トシ  
 テ舉タル遺產税ノ如キ即チ財産ヲ標準トシタル租税ニシテ若シ輕微ナ  
 ルキハ遺產受領人ノ所得ヲ以テ之ヲ拂フヘケレ凡之ニ反シテ重キハ  
 ハ遺產受領人ハ其受領シタル財産ノ一部ヲ割キテ之ヲ納入スヘシ又  
 粗成品ノ租税ノ如キモ若シ粗成品ニシテ租税ナキハ製造家ハ必シ  
 モ其資本ヲ要セサルノニ課税アルカ爲メ遂ニ其資本ヲ要スルニ至ル  
 モノナレハ是レ直接ニ資本家ノ資本ヲ減殺スルノ租税ト稱スルモ大  
 過誤ナカルベク從テ其租税ノ不利ナルヤ亦知ルベキナリ

(備考)此原則ハシスモンチ一氏ノ租税ノ四則中ノ第一則ト第二則ト  
 チ包含スルモノナリ氏ノ定則ニ曰ク「第一凡ソ租税ハ歳入ニ就キテ

シスモン  
 一氏ノ租  
 税四則

之ヲ課スヘク決シテ資本ニ向テ之ヲ負荷セシムヘカラス歳入ニ課税スルキハ政府ノ失費ハ各人民ノ失費中ヨリ之ヲ徴収スルニアレ  
 凡之ヲ資本ニ負荷セシムルハ人民即チ國家ヲ生存セシムル爲メニ必要ナル者ヲ減殺スルヲ免レサルナリ」第二、租税ヲ課スルニ方リ  
 テ總歳入ト純歳入トハ必ス之ヲ區別セサルヘカラス何トナレハ總歳入中ニハ純歳入ノ外ニ尙ホ流通資本ヲ包含ス何トナレハ此總歳入ノ一部ハ再ヒ資本トナリテ生産ノ用ニ供セラル、モノナレハナ  
 リ」序ニ同氏ノ第三則及第四則ヲ示シ「第三、租税ハ固ト國民カ權利ヲ有スルガ爲メニ支拂フモノナレハ更ニ之ヲ有セサル民ヲシテ之ヲ納メシムルヲ得ス是故ニ納税者ノ生活ニ必要ナル歳入ノ部分ニ付テハ決シテ之ニ課税スルヲ能ハサルモノナリ第四、租税ハ決シテ之ヲ不當ニ賦課シ富財ヲシテ遺逃セシムルヲ勿レ若シ富財ノ遺逃

租税カ産業ノ發達及  
 其運行上ノ障礙ハ最少  
 ナラシムルヲ要ス

スルカ如キ場合アルニ當リテハ愈其税ヲ輕減スルヲ要ス而シテ歳入ヲ繼續セシムルカ爲メニ要セラル、歳入ノ部分著者案スルニ蓋シ貯蓄サレヘキ歳入ノ部分ヲ指稱スルモノナラン」ハ之ニ對シテ課税スヘカラス云々」

第八十三節 第二、租税ガ産業ノ自然ノ發達及其運行

上ニ加フル障害ハ宜ク最少ナランヲ要ス 政府ハ本

ト國民ニ於ケル一般經濟上其進歩ト發達ヲ獎勵保護セサルヘカラス  
 ルノ任ヲ有スルモノトス然ルニ税制ノ如何ニヨリテ種々ノ影響障害  
 ヲ富ノ生産、分配、交易、及消費ノ上ニ及ボスヘキヲハ既ニ前節於テ述  
 ヘタルカ如ク例ヘハ税法ノ爲メニ酒造家カ其檢査ノ終ルマテハ製  
 シタル酒桶ヲ開クコト能ハス或ハ農夫ハ檢査ノ終ルマテ其刈取リシ  
 稻ヲ藏ムルコト能ハサル等ノ如キハ即チ營業生産ノ自由ヲ束縛スル

モノニ非スシテ何ソヤ經濟上其及ホス所ノ損害モ亦實ニ鮮少ナラサルヘシ又分配ニ關シテモ若シ累進稅法ニヨリ富民ニ非常ナル重稅ヲ課シ中民ニ輕稅ヲ課スルカ如キコトアラハ是レ租稅法ニヨリテ自然ニ於ケル富ノ分配ヲ左右スルモノト云フヘク又物品ニ消費稅ヲ課スレハ其課稅サレタル凡テノ消費品ハ爲メニ其價格ヲ騰貴スヘシ是レ自然ノ有様ヨリハ寧ロ租稅ノ爲メニ物品ノ生産入費ヲ増加シタルニ由ルモノナリト云フヘシ而シテ物價騰貴スルニ至レハ則チ下民ノ消費ニ影響ヲ及ホシ從テ其生計ニ一層困苦ノ狀ヲ呈スルニ至ルヘシ殊ニ廉價ナル外國輸入品ニ保護ノ重稅ヲ課スルカ如キハ最モ經濟上自然ノ運行ヲ妨害スルモノナリト云フヘシ夫レ稅法ニシテ假令頗ル完全ニ近キモノトスルモ尙ホ多少生産分配交易消費等ノ上ニ拘束障害ヲ與フルモノナレハ今全ク之ヲ除カントスルハ到底望ムヘカラサル

カ故ニ余輩ハ唯可成其束縛障害ヲ人民ニ加フルト最モ少キ稅法ヲ設ケント是レ宜ク努力セサルヘカラサルモノタリ若シ然ラサルトキハ作業ノ自然ノ發達進歩ハ稅法ノ爲ニ遮蔽セラレ或ハ自然ニ於ケル富ノ分配ヲ妨沮シ或ハ富政府ノ一方ニ集マルカ若クハ人民ノ一局部ニ偏聚シ經濟上實ニ慘憺タル景況ヲ現出スルニ至ルヘケレハナリ



### 第十一章 財政上ノ原則

國庫便宜ノ原則

租税ハ取入ヲ得ルヲ以テ第一ノ目的トス

第八十四節 第一、租税ハ國庫ニ充分ナル収入ヲ與フルヲ要ス 財政上ノ原則トハ人民經濟上ノ便宜ノ點ヨリ觀察シタルモノトハ大ニ反シテ政府國庫ノ便宜即チ單ニ財政上ノ便宜ヨリ觀察シタルモノ是レナリ

抑々租税ハ如何ニ之ヲ輕減スルトモ幾分カ人民ノ快樂ヲ殺キ之ニ苦痛ヲ感セシムルモノタルヤ明カナレトモ之ヲ賦課セサルヘカラサル所以ハ專ラ政府必要ノ費用ヲ徵収セントスルニアリテ或人ノ云ヘルカ如ク租税カ社會ノ經濟ヲ障害セザラントハ當局者ニ於テ勤ムヘキ最モ緊要ノ一ナリト雖モ畢竟其ノ主眼トスル所ハ必要ナル經費ヲ支

給スルニアルヲ以テ國庫ニ充分ナル収入ヲ得ントスルハ亦第一ニ努メサルヘカラサル目的トス故ニ税制ニシテ已ニ述ヘタル諸原則ニ適合シ經濟上ノ原則ニ反セス又公正ノ原則ニ適シタル者ト雖モ國庫ニ充分ナル収入ヲ納ムルヲ能ハサルノ租税ハ之ヲ完全ナル租税トハ云フヘカラス例ヘハ或ル道德家ノ如キハ前ニモ述ヘシ如ク社會驕奢ノ風ヲ禁遏シ質朴ノ美風ヲ獎勵スルノ具トシテ驕奢品ニ課税スルヲ以テ此上ナキ良税制トシテ之ヲ賞嘆シテ止マサルモ如何セン驕奢税ハ課税ノ基礎狹ク侈奢品ヲ使用スル富民ハ其數僅少ナルカ上ニ課税物件ハ之ヲ隱蔽スルヲ容易ナルカ故ニ之ヨリ得ル處ノ政府ノ収入ハ極テ僅少ナルヲ通例トス去レハ奢侈品ニ課スル税ハ假令公正ニシ且ツ經濟上ノ原則ニ關シテ遙ニ他ノ租税ニ勝ルヲアルモ収入ノ僅少ナルカ故ニ斯カル租税ハ財政上ノ原則ニ適合セサルモノト云ハサルヘカ

ラス本邦ニ於テ近時地租ノ稅率ヲ重シトシ人民ノ經濟ニ有害ニシテ且ツ不公平ナリト唱フルモノアレバ今日ニ於テ之ヲ存セサルヘカフサル所以ノモノハ主トシテ我カ政府ノ財政ヲ維持シ巨大ナル收入ヲ國庫ニ納ムルハ唯一ノ地租ニアリテ該稅ハ實ニ政府經費ノ過半ヲ供給スルモノナリ故ニ今之ヲ廢シ若クハ輕減セントセハ吾人ハ之ニ代ルヘキ新財源ヲ求メサルヘカラス抑々財政家ノ要ハ必要ナル經費ノ額ヲ一定セルモノトシ只此必要ナル經費ハ如何ナル方法ヲ以テ如何ナル租稅ニヨリテ之ヲ供給スルヲ得ヘキヤテ更ニ探尋セントスルニアリ故ニ本邦ノ地租ノ如キ收入ノ巨額ナル租稅ハ他ノ點ニ於テ少ク缺點アルモ之ニ代リテ同額ノ收入ヲ納ムヘキ新財源ノ見出サルマテハ己ムヲ得ス之ヲ徵收セサルヘカラス是レ則チ租稅ノ主眼タリ目的ハ國庫ノ必要ナル收入ヲ十分ニ支給セントスルニアレハナリ

收入ノ屈伸力

然入ニ自  
然ノ増加  
アルハ長  
稅ナリ

### 第八十五節

#### 第二、收入ノ屈伸力

○收入ニ屈伸力アルモノハ長稅ナリ

收入ニ屈伸力アルトハ收入カ毎年一定不動ノ額ニアラスシテ國富ノ發達ニ伴フテ變動増加スルコトアルヲ云フ是レ租稅ノ有スヘキ長性ナリトス若シ租稅ニシテ其年々國庫ニ納ルヘキ收入ノ額人口ノ増加國富ノ發達ニ伴ヒテ自然ニ増加スルノ傾向ヲ有スルモノアラハ是レ善良ナル租稅ナリト云ハサルヘカラス凡ソ何レノ國ノ經費ヲ問ハス漸次増加ノ傾向ヲ有シ減少ノ傾キ少キハ今ヤ顯然掩フヘカテリルノ事實ナリ故ニ年々一般行政費ノ増加アル毎ニ新ニ租稅ヲ設クルカ如キハ固ト行フヘカラサルモノナレハ從來ノ租稅ニシテ經費ノ増加ニ從ヒ漸次自然ニ其收入ヲ増スモノアレハ是レ大ニ國庫ニ便宜ナル租稅ナリト云フヘシ此一點ヨリ更ニ直稅間稅ヲ觀察スレハ此便宜タルヤ直稅ニ少クシテ間稅ニ多シト云フヲ得ヘシ地租

ノ如キ一タヒ土地ヲ評價シテ之ニ租税ヲ課スルキハ年々其收入ニ差  
 ナク殆ント一定セルモノトス勿論地價ノ騰貴ニ從ヒテ改正ヲ行ヒ地  
 租ノ收入ヲ増スコトヲ得サルニアラサレトモ是レ殊更改正ヲ行フ一  
 アラスンハ爲スト能ハサルモノナリ之ニ反シテ消費税ノ如キハ年々  
 國富發達シ消費物品ノ生産消費ノ増加ニ從ヒ敢テ税率ヲ變更スルコ  
 トナク自然ニ其收入ヲ増加スルモノナリ然レモ直税中所得税ノ如キ  
 ハ人民繁榮ニ赴キ國富發達スル處ニ於テハ之ヲ自然ノ屈伸力ヲ有ス  
 ル租税ナリト云フヲ得ヘシ若シ本邦ニ於テモ國富漸次ニ發達シ三百  
 圓以上ノ收入ヲ有スルモノ現今ノ數ヨリ一層増加スルニ及ハ、所得  
 税ノ收入ハ年々自然ニ増加スヘキナリ此ノ如ク年々新タナル租税ヲ  
 起スコトナク又税率ヲ變更スルコトナク自然國庫ノ收入増加スレハ  
 財政上ノ便宜之ヨリ大ナルハナシ之ニ反シテ若シ收入年々退却減少

租税徵收  
 ニ關スル  
 原則

スルノ租税アラハ國庫ノ爲メ之ヨリ不利ナルハナシ例ハ修繕品ニ  
 課スル租税、流行物ニ課スル租税ノ如キハ年々流行ノ廢ルニ從ヒテ収  
 入ノ減少ヲ見ルモノナリ此ノ如キ租税ハ財政上ヨリ觀察シテ最モ不  
 利ナル者ト云ハサルヘカラス故ニ余輩ハ收入ノ屈伸力ヲ以テ財政上  
 宜ク考查スヘキ第二ノ要點ナリトス

第八十六節 第三、租税徵收ノ原則 租税徵收ニ關シテ更

ニ他ノ一原則アリ是レ財務ノ行政上ニ於テ其税法ノ苛虐ナラサレ、  
 カ爲メニ特ニ注意スヘキ原則ナリトス而シテ徵收方法ニ關スル原則  
 ニ就キテハ余輩一言以テ之ヲ説了スルヲ得ヘシ即チ

「租税ノ徵收方法ハ宜シク國庫並ニ納税スヘキ人民ニ對シ勉メテ不利  
 不便ナカランコトヲ要ス」ト

抑モ徵收方法ト云ヘルハ納税者ノ負擔セル税額ヲ其納税者ヨリ收税

官ノ手ニ入ラシムヘキ行爲ノ全部ヲ指稱スルモノナリ然レハ租稅徵收方法ノ善惡ハ國庫ノ爲メ及人民ノ爲メニ大ナル影響ヲ及ホスモノナルカ故ニ財務ノ當局者ハ宜シク勉メテ租稅法規ヲ作ルニ當リテ徵收手續ノ如キハ小心翼翼以テ政府人民ノ利便ヲ謀ルヘキナリ然レトモ實際ノ徵收手續ノ如キハ各國其規ヲ一ニセス是レ固ヨリ各其國情ノ斟酌スヘキモノヲ異ニスルカ故ニ爰ニ余輩ハ徵稅方法ニ關スル細目ノ原則ヲ與フルヲ能ハスト雖モ大體ニ就キテ左ニ二個ノ定則アルヲテ説明セン

(甲) 租稅ヲ徵收スルニ方リテハ其徵收ノ時期場所手續等ニ關シテ勉メテ簡易ナルヲ方法擇ミ被稅者ノ便宜ヲ計ルヘシ蓋シ徵收方法ノ善惡ハ實ニ人民休戚ノ因テ關スル所ノモノナレハ地租ノ如キ其農家ニ在リテハ米穀收穫ノ時期一定シ且ツ之ヲ賣却スルノ時節モ亦一定

被稅者ノ  
便宜ヲ計  
スルヲ要  
ス

セルカ故ニ當局者ハ勉メテ其徵收上農家ニ便利ナル時期ヲ撰ハサルヘカラス否ラサレハ徒ラニ民ヲ勞スルノミニシテ更ニ政府ニ於テ益スル所ナキヲ以テナリ其他ノ租稅例ヘハ營業稅ノ如キニ於テモ營業ノ盛衰ニ注意シテ納稅ノ時期ヲ定ムルヲ緊要ナリトス又其收稅ノ場所ニ關シテモ納稅者ヲシテ之カ爲メニ徒ラニ繁忙ナル時日ヲ失ハシムルコトヲ避ケサルヘカラス將タ又其手續ニ關シテモ可成之ヲ簡略ニシ誓約檢査文書公示等ニ就キテハ其濫用ヲ避ケ又猥ニ各人ノ自由ヲ害シ家宅並ニ商業ノ秘密ヲ侵ス等ノ如キ振舞ハ常ニ收稅上紛議ヲ招キ易ク其甚タシキニ至リテハ遂ニ國家禍亂ノ源トモナルモノナレハ其手續ヲ定ムル當局者ニ在リテハ宜ク勉メテ謹慎ナルヘキヲ要ス

(乙) 徵收ノ經濟ハ巧ミナルヲ要ス即チ國庫ニ納ムル額ト納稅者ノ出ス所ノ額ニ於ケルノ差ハ極メテ些少ナルヲ要スルノミナラス又稅額

徵稅費ハ  
可成少カ  
ラントテ  
要ス

カ納税者ノ手ヲ離レテ國庫ニ入ルマテノ時期ハ極ノテ迅速ナルヲ要ス租税カ人民ノ手ヨリ離レテ國庫ニ入ルマテノ中間ニ於テ滯滞遲延ナカラントテ要ス即チ租税ノ徵收ニシテ若シ迅速ナラサルトキハ財實空ク中途ニ滯滞スルノミナラス百弊從テ生スヘキハ最モ租易キノ道理ナレハナリ

租税チ一般人民ヨリ徵收シテ更ニ國庫ニ納入スルマテニハ若干ノ徵收費ヲ要スヘキハ明白ノ事ニシテ又是等徵收費ハ都テ收税ノ爲メニ支出サル、モノトス是故ニ收税ノ爲メニ巨大ナル費用ヲ要スルカ如キハ是レ善良ナル租税ト稱スルコト能ハス何トナレハ是等ノ人民カ困苦スルノ割合ニ國庫ニ於テ益スル所少キモノナレハナリ故ニ課税物件調査若クハ検査ノ爲メ巨多ノ官吏ヲ要シ又繁雜ナル組織ヲ要スルカ如キ租税ハ徵收上勉メテ避ケサルヘカラヌ是レ徵稅費ハ最少ナルヲ要

ストノ原則ナリ

### 第八十七節 アダム、スミス氏ノ租税四則 以上余ハ租税

アダム、スミス氏ノ租税四則

ノ分配、賦課、徵收等ニ關スル諸定則ヲ略ホ説了シタリト信ス抑モアダム、スミス氏ハ既ニ一百年ノ往昔ニ在リテ既ニ租税ノ良制如何ヲ探究シ四條ノ定則ヲ置キテ以テ世人ノ注意ヲ喚起セリ其定則ノ如キ光輝燦然トシテ猶ホ今日ニ至ルマテ財政ノ學理ニ光明ヲ與ヘ敢テ消滅スルコトナシ余輩ハ前段租税ノ諸原則ヲ述フルニ方ツテ既ニ氏ノ租税四則ヲ詳説シタレトモ今又茲ニ前述セル諸原則中アダム、スミス氏ノ唱道セシ四則トハ抑モ何ナルヤヲ示サンカ爲メ左ニ之ヲ引用セン是レ氏カ財政上ニ放チタル光輝勳功ヲ遺忘セサランカ爲メナリ氏曰ク  
第一、凡ソ國民タル者ハ可成丈々其財力ニ應シテ政府ノ費用ニ供給ヘシ則チ各其有スル所ノ歲入ニ應シテ政府ニ支給スヘシ抑々政府費

用ノ一國人民ニ於ケルハ尙ホ一大財産取扱費ノ衆財主ニ於ケルカ如ク其財産所有者タル者ハ各我所有高ニ應シテ費用ヲ給セサルヘカノス云々

第二、國民ノ負フ所ノ租稅ハ宜シク精確ナルヘク決シテ專擅ナルヘカラス收稅ノ時節收稅ノ方法收稅ノ額ハ宜シク公明正大ニシテ被稅者ハ勿論一般人民ヲシテ之ヲ知ルヲ得セシムヘシ

第三、凡ソ租稅徵收ノ方法若クハ徵收ノ時節ハ被稅者ノ爲メ最モ便利ナリト思フ方法若クハ時節ニ於テスヘシ

第四、凡ソ租稅ヲ徵收スルニハ力メテ人民ノ出ス所ノ者ト政府ニ入ル所ノ者トニ大差ナカラシムヘシ又人民力之ヲ出シテヨリ政府ニ入ルマテハ力メテ速カナラシムヘシ

是レ則チアダム、スミス氏ノ四則ニシテ其第一ハ租稅ノ分配ニ關スル

理論上ノ則ニシテ其第二條以下三條ハ即チ租稅ノ賦課徵收ニ關スル實施上ノ則トス今ヤ余輩ハ租稅原則ノ章ヲ終ルニ方リテ殊ニスミス氏ノ四則ヲ掲出セシモノハ蓋シ氏ノ四則ハ世人ノ常ニ唱道スル所ノモノニシテ亦甚ダ著名ナルモノナルカ故ナリ

第十二章 比例稅及ヒ累進稅

比例稅及  
累進稅ノ  
解

第八十八節 比例稅累進稅ノ解 財力ニ比例シテ財產所得  
 等ニ租稅ヲ賦課スルニ當リ累進稅法ヲ可トスルヤ將々比例稅法ヲ以  
 トスルヤハ當今稅制上ノ一大問題ニシテ爰ニ少シク之レカ辨解ヲ費  
 サルヲ得ス抑モ累進稅比例稅ノ區別何物タルヤハ嘗テ租稅類別ノ  
 章ニ於テ述ヘタル如ク比例稅トハ財產ノ増加スルニ從テ只其増加ニ  
 比例シテ稅額ヲ増スノミニシテ稅率ニハ聊カモ變更ナキモノナリ累  
 進稅ハ財產ノ増加ニ從テ稅率ヲ増加シ從テ其稅額モ亦タ不比例的ニ  
 増加スルモノナリ請フ是ヨリ進ンテ累進稅及ヒ比例稅ノ得失ニ關シ  
 テ細論セン

モンテス  
キユー氏

第八十九節 累進稅論者ノ諸說

累進稅法ノ不條理ナルニ

モ拘ハラス世間往々之ニ左袒シテ其利ヲ唱道スル者ニ乏シカラズ彼  
 ノ萬法精理ノ著者モンテスキユー氏ノ如キハ累進稅法ノ主張者ニシ  
 テ氏ハ希臘ノアゼンスニ於ケル累進稅ヲ論シテ曰ク「累進稅ハ租稅ノ  
 平等均一ヲ得ルニハ最モ適當ノ方法ナリ如何トナレハ國民生計ノ度  
 ハ甚タシキ懸隔貧富ノ差アルカ故ニ若シ人間ノ消費ヲ必要有用及ヒ  
 驕奢ノ三者ニ分ツルハ僅カニ必要ノ消費ヲナシテ其他ニ餘裕ヲ存セ  
 サルモノアリ然レモ一般人民ノ生計ニ取リテ必要費ノ貧富共ニ等シ  
 ク欠クヘカラサルヲハ毫モ其間ニ軒輊ナケレハ此ノ生計ノ必要費ニ  
 向テハ租稅ヲ賦課ス可キモノニアラス又有用ノ消費ニ供スル適宜ノ  
 費用ニモ租稅ヲ重課スヘキニアラス然レモ獨リ驕奢ノ消費ヲナシ得  
 へキ剩餘ヲ有スヘキモノニ向テハ剩餘ノ多少ニ應シテ之レカ稅率ヲ

定メ以テ其剩餘ヲ防グヲ得ヘシト此説タル貧富ヲ平均ナラシムルハ即チ政府ノ職務ノ一ナリト爲セルカ如シ蓋シ往古希臘共和諸國ノ政策ハ奢侈ヲ制限センカ爲メ可及的剩餘ヲ有スルモノハ政府之ニ重稅ヲ課シ務メテ人民ノ富チ均一ニスルノ方法ヲ採リシナリ然レモ現今ノ社會ニ在リテハ其思想全ク之ニ反スルニ至レリ併シナカラモンテスキュー氏カ生計ノ必要費即チ生計ノ最少費額ハ決シテ課稅スヘキ心ノニアラスト云ヘルカ如キハ寔ニ至當ノ言ニシテ今猶ホ此點ニ於テハ之ヲ稅法ノ原則トナスト雖モ單ニ生計ノ最少點トイフカ如キニ至リテハ實際上ニ於テ之ヲ一定スルヲ難キノミ即チ國ニヨリテ生計ノ度高ク從テ物價高貴ナルモノナレハ其要スル所ノ額モ之レヲ他ノ生計ノ度低ク物價ノ低廉ナル國ニ比シテ自ラ多カラサルヘカラス且生計ノ必要費ヲ除テ課稅スル時ハ廣ク細民ニマテ參政ノ權ヲ與フル

アダムス  
ミス氏

共和政体ノ如キ國ニテハ一方ニ於テハ參政ノ權ヲ有シナカラ一方ニ於テハ政府ノ費用ヲ負擔セザルカ如キ人民チ生スルニ至ルヘシ世或ハアダムスミス氏ヲ以テ累進稅ノ論者ナリトスルモノアレモ氏カ累進稅ノ論者ニアザルヲハ其租稅原則ノ第一ニ擧ケタル凡ソ國民タル者ハ可成丈各自ノ財力ニ應シテ政府ノ費用ニ供スヘシト一言ヲ以テハルモ既ニ明カナリ故ニ氏ヲ以テ累進稅法ヲ主唱スルモノトナスハ亦誤レリト云フヘシ之ニ反シテゼアンバプチスト、ゼー氏ハ明カニ其著書ニ於テ累進稅說ヲ主張セリ曰ク均一ニ比例ヲ以テ凡テノ歲入ニ課スル時ハ富民ハ其負擔ヲ感スルヲ薄ク貧民ハ之ヲ感スルヲ重シ今僅ニ一家ヲ支フルニ足ルヘキ收入ヲ得ルモノト飽食煖衣居ナカラ富チ増殖スルヲ得ルモノト比スレハ其負擔ノ重キハ勢ヒ貧民ニ歸ヘルト亦免ルヘカテサルノ事トス故ニ累進ノ方法ニヨリテ負擔ヲ均一

ゼー氏



ニセサルヘカラスト氏カ累進税ヲ唱ルノ熱心ナルハ又左ノ引例ヲ見ルヤ明カナリ曰ク例ヘハ爰ニ歳入ノ十分ノ一ヲ租税トシテ徴スルトセン乎一家族ニ三十萬法ノ收入アルモノハ其一割即チ三萬法ヲ徴收セラル、モ猶ホ二十七萬法ヲ剩スヘシ而シテ二十七萬法ハ一家族ヲ養フテ猶ホ餘リアルヘシ之ニ反シテ一年三百法ノ歳入ヲ得ルモノヨリ其一割三十法ヲ徴セハ殘額二百七十法ニシテ僅カニ家族ヲ養フニ足ルノミ此ノ如キ甚シキ差ヲ生スルカ故ニ同一ノ比例ヲ以テスルハ亦其間ニ負擔ノ輕重感想ノ苦痛ヲ異ニスル殊ニ太甚キモノアルヲ如何セン是ヲ以テ累進ノ法ニヨリテ此ノ弊害ヲ防カサルヘカラサルナリト然レハ此場合ニ於テハ三十萬法ト三百法トハ其歳入非常ニ懸隔スルカ故ニ假令三十萬法ノ半ヲ徴スルモ猶ホ十五萬法ヲ剩シテ充分生計ニ餘剩アルヘシト雖モ之ニ反シテ三百法ノ歳入ハ例令三百法ノ收

## ミル氏

入ヨリ三十法ヲ徴セサルモノトスルモ猶ホ之ニヨリテ富裕ナル生計ヲ營ムヘキ收入ナリトハ決シテ言フヲ得サルヘシ故ニ是等ノ說ハ彼ノ富民ノ餘剩ヲ剝カサレハ止マサル貧富平均說ナリト云ハンノミ佛國ノレオン、ブーシエル氏ハ曾テナボレオン三世ノ大統領タリシ時ニ當リテ累進法ヲ以テ一般ニ動産税ヲ布カンヲ論シ即チ歳入ヲ三級ニ分チ級ニ應シテ税率ヲ變更スルノ計畫ヲナシタリキ又世或ハジョンヌチユアルト、ミル氏ヲ以テ累進稅說ヲ主張スルモノトナセハ氏カ書ニヨリテ見レハ氏ハ決シテ累進稅ヲ可ナリトセス只遺產稅ニハ累進法ヲ用フルヲ以テ可ナリトスレハ是レ歳入トハ其關係全ク異ナリタル場合ニシテ歳入ニ課スルニ當リテハ同シク比例稅ヲ可ナリトセリ然レハ氏モ云ヒシ如ク歳入ニ同率ノ稅ヲ課スルニ當リ生計ノ最少費額ヲ除カスシテ全額ノ歳入ニ同率ノ稅ヲ課スルハ稍不公平ニシテ是レ

生計ノ最少必要費ヲ免除スルベシム氏ノ計

獨リ貧民ニノミ重荷ヲ負ハシムルモノナレハ稅ヲ課スルニ方リテ生計最少費額ヲ免除スルトハ寔ニ其當ヲ得タルモノナリト云フヘシ蓋シ此方法ハベンザム氏ノ計畫ニシテ例ヘハ英國ニ於テ生計ノ最少費額ヲ五十磅ト假定スルキハ若シ六十磅ノ歲入ヲ得ルモノアレハ之レヨリ五十磅ヲ扣除シ其殘額即チ十磅ニ課シ千磅ノ歲入ニハ九百五十磅ニ課スルカ如キ是レナリ本邦ノ所得稅法ハ二百九十九圓ヲ以テ生計ノ必要點トスレバ所得上リテ三百圓トナレハ直チニ之ニ一分ノ稅率ヲ以テ三圓ヲ賦課セリ是レ本邦所得稅ノ一欠點ナリ故ニ千圓ノ所得ナレハ三百圓ヲ減シタル殘額ニ課稅スルヲ以テ正當トス

佛國ノシヨセフガルニエー氏モ累進稅ヲ唱ヘ氏ハ更ニ累進稅ノ欠點ヲ補ヒ益々此法ヲ擴張セントセリ近來ニ及ンテハ獨乙ニ一派ノ累進稅主張者起レリ即チ社會經濟政略派若クハ講壇社會黨ト貶稱セラル

獨乙ノ社會政略派ノ經濟學者

、新新ナル經濟學派ニシテ專ラ國家ノ權力ヲ重シ富ノ生産分配等一關シテハ若シ之ヲ一己人ニ放任スル可カラサルモノトセハ宜シク國家ニ於テ之ニ干渉スヘキモノナリトスル者ナリ此派ノ學者カ唱フル所ノ租稅ノ賦課法ハ累進稅法ヲ可ナリトシ其理由トスル所ハ國家ノ重ナル職務ハ只タ富ノ生産ヲ增加セシムルノミニ止マラスシテ尙ホ其分配ノ如キモ之ヲ忽諸ニ付スベカラス何トナレハ設令生産ハ夥多ナルトモ其分配ニシテ能ク行ハレサレハ決シテ之ヲ幸福ナル社會ノ有様トハ云フヘカラサレハナリ則チ今日ノ如ク富者ハ益々富ミ貧者ハ益々可憐ノ境涯ニ陥リ一步タモ其生計ヲ高ムルヲ得サルノ有様ニ至ルハ哀ムヘシ抑國家ハ正シク富ノ分配ヲ整理スルノ義務ヲ有スルモノナレハ政府ハ須ラク國民ニ課稅スル所ノ公權ヲ用ヒテ更ニ貧富ノ平均ヲ得セシメサルヘカラス而シテ之ヲ平均セシムルノ方法ハ偏一

累進法ニ據ルニアリト是レ今日ニ於テ累進稅ヲ唱フル社會派一種ノ論者ナリ

### 第九十節 第一、累進稅說ハ不條理ニシテ人情論タルニ過キサル

古來ヨリ租稅ヲ財力ニ比シテ公平ニ賦課スル  
ト即チ公正ノ原則ニ適センヲ務ムルモノニ累進稅比例稅ノ二論者ノ  
ルコ既ニ斯ノ如シ而シテ余輩ハ今マ一々爰ニ其論旨ヲ列叙スルノ煩  
勞ヲ取ラシヨリハ寧ロ進テ累進稅ハ果シテ論者ノ唱フルカ如キ利ノ  
ルヤ否ヤヲ定ルノ優レルニ如カサルヘシ累進稅ノ正當ナルヤ否ヲ正  
ムルニ當テ先ツ累進稅ハ一人ノ人情論タルニ過キスト斷言スルヲ得ヘ  
シ古代アゼンスカ稅法ニヨリテ貧富ヲ平均セントシ或ハ今日講壇社  
會黨ノ論者カ貧富懸隔ノ有様ヲ見テ稅法ニヨリテ之レニ干涉シ更ニ  
平均ヲ計ラントスルカ如キハ富者ノ益々富ムヲ羨ミ貧者ノ益々貧ム

累進稅說  
ハ人情論  
ニシテ更  
ニ據ルヘ  
キ公正ノ  
道理ナシ

ルヲ憐ムヨリ發スル所ノ人情論タルニ過キス抑モ課稅ノ事ハ政府ノ  
所爲ナルカ故ニ論者ノ如キ說ヲ狹ムヲ得ルモ今之レチ一巳人ニ例セ  
ンニ一商人カ或ル物品ヲ賣ルニ當リテハ購買者ノ富者ナルカ故ニ尚  
價ニ之ヲ賣リ貧者ナルカ爲メニ低價ニ之ヲ賣ル等ノコトナク皆同一ノ  
價ヲ請求スルニ非スヤ夫レ政府カ與フル所ノ保護恩惠ヲ受クルハ貧  
富何レカ最モ多キヤ否ヤハ到底之ヲ明知スルニ由ナシト雖モ或ハ貧  
者反テ多ノ恩惠保護ヲ受ルヤモ未タ知ルヘカラス若シ累進稅ニシテ  
正シク比例稅ニ比シテ不正ナリトセハ政府カ與フル恩惠保護ハ富者  
ニ大ニシテ貧者ニ少ナシト云ハサルヘカラス然レモ其實之ニ反シ且  
大ノ財產ヲ保護スルハ貧民ヲ保護スルヨリハ其費用反テ少キモノナ  
リ之ヲ夫ノ保險會社カ保險料ヲ取ル場合ニ於テ見ルモ其少額ノモノ  
ヲ保險スル時ニ高ク財產ノ倍蓰スルニ從テ却テ其保險料ヲ倍蓰セサ

ルノミナラス益々廉キ保険料ヲ取ルニアラスヤ又鐵道會社カ荷物ヲ運搬スルニ當テモ荷物ノ大ナルニ從ツテ割引ヲ行フニ非ラスヤ是只一ノ引例ニ過キサレモ實際ヨリ之ヲ見ルモ富者ハ奴僕及ヒ倉庫等ヲ有スルカ故ニ政府ノ保護ヲ受クルト少ナキモ貧民ハ之レアルナク唯一ニ政府ニ依頼スルノ傾向アリ之ヲ要スルニ政府カ財產身体ヲ保護スル點ニ於テハ毫モ富貧ノ間ニ差異アルトナキナリ然レモ政府ノ職務ハ只タ財產身体ノ保護ノミニ止ラサルトハ己ニ述タルカ如ク尙ホ學校及ヒ農工商ニ保護獎勵ノ利ヲ與ル點ヨリ見ルモ其利ヲ與フルヤ反テ貧民ニ多キカ如シ例ヘハ學校ノ如キモ富者ハ自カラ教師ヲ雇フトテ得可キモ貧民ハ之ヲ爲ストテ得サレハ勢ヒ公立學校ニ入ラサルヲ得ス其他公債ノ元利ノ如キハ何レカ最モ多ク之ヲ負擔セサルヘカテサルカ而シテ富民ハ何故ニ其負擔ヲ多ク負ハサルヘカテサルカ若シ之ヲ

政府ノ失策或ハ戰爭ノ爲メニ起シタルモノトスレハ國民一般ニ之レヲ負擔セサルヘカテラス貧民ヲ參政ノ權ヨリ除キタル國ニ於テハ少シク理由ナキニ非サルモ今日ノ如ク參政ノ權漸次細民ニ及フニ當リテハ其參政ノ權ヲ得タル人民ノ失策ヨリ生シタル負擔ノ如キハ又同一ニ之ヲ負ハサル可カラサルニアラスヤ佛國ノ如キ下民ニマテ其參政權ヲ有セシムル國ニ於テハ殊更ニ累進稅ヲ用フルハ不可ナリ講壇社會黨ノ唱フル如ク國家ノ目的ハ正ニ貧富ヲ平均スルニアリトセハ或ハ此方法ニヨルモ可ナリト雖モ其目的此ニアラストセハ是レ只富民ノ益々富ミ貧民ノ益々貧ナルヲ憐ムノ情ヨリシテ之ヲ論スルモノニシテ即チ一片ノ人情論ニ過キスシテ更ニ取ルヘキ一ノ理由タモナレナシト云ハサル可カラス

## 第九十一節 第二、累進稅ニ在リテハ稅率ノ變更ハ單

累進稅法  
ニアリテ

ハ爲政者ノ臆測ヲ以テ屢々變更スルカ故ニ不公平ナリ

ニ爲政者ノ臆測ニ出ツルコト 累進税ニ於テハ財産ノ増加ニ從テ税率ヲ變更スルニアレバ何チ以テ其税率遞増ノ標準トナスヘキヤ又何レノ程度ニ之チ止ムヘキヤハ單ニ之チ定ムル人ノ臆測ニ過キサルモノナリ夫レ累進税制ニ於テハ財産所得上ノ増額アル毎ニ各階級税率ヲ遞増スルモノナルカ故ニ階級ノ異ナル毎ニ又人民ハ不當ニシテ且ツ不公平ナル取扱ヒヲ受ルモノニシテ其階級ノ變換スル際ニ於テハ被稅者ハ俄ニ負擔ノ重キヲ感スルモノナリ仮令ハ本邦ノ所得税法ニ據ルモ九百九十九圓ノ所得アルモノト千圓ノ所得アルモノトハ收入ニ於テ僅カニ一圓ノ差ナルモ千圓ノ所得トナルニ及ンテハ一分ノ税率ヨリ直チニ進テ一分半ノ税率ヲ徵収セラル、モノナルカ故ニ階級變換ノ際ニ於ケル被稅者ハ負擔ノ苦チ感スルコト甚タ切ナリ勿論租税ニハ免除點アレハ或點ニ於テ急劇ニ負擔ヲ荷フ者生スル

コトアルハ蓋シ比例税ニ於テモ免レガタシト雖モ累進税法ニ據ルキハ財産ノ階級アル毎ニ税率屢々變更遞増スルモノナルハ其遞増アル毎ニ又階級ノ兩端位ニ居ル被稅者ハ往々不公平ナル取扱ヲ受クルモノナリ而シテ其税率ノ變更遞増ハ何ニ因ルヤト云フニ一モ憑據スル所ナク唯立法者ノ隨意臆斷ニ出ツルニ外ナラズ是レ則チ政府ノ眼中一定ノ標準ナク隨意臆斷ヲ以テ人民チ不公平ニ取扱フモノナルハ累進税法ハ人民ノ物議ヲ招キ易キ税法ナリト云フヘシ

第九十二節 第三、累進税法ハ終ニ富民歲入ノ全額ヲ政府

ニ沒収スルニ至ルコト 累進法ヲ以テ漸次税率ヲ遞増スルルハ實ニ歲入ノ過半ヲ徵收スルニ至ルノミナラス終ニ其全額ヲモ合セテ政府ニ沒入スルニ至ルベシ蓋シ其初メ租税賦課ノ程度尙ホ僅少ノ稅額ニ止ル時ニ方リテハ何人モ其歲入ノ大部ヲ舉ケテ終ニ之カ徵稅ニ

累進税法ハ終ニ富民歲入ノ全額ヲ政府ニ沒収スルニ至ル

供スルニ至ルヘキヲ豫想セサルヘシト雖凡累進法ヲノ其極端ニ及ホ  
 サシムルキハ必ラスヤ其歳入ノ全額ヲ政府ニ没入スルニ至ルヘキト  
 是レ數理上免ルヘカヲサルノ事實ニシテ則チ左表ノ計算ヲ見ルキハ  
 自ラ明瞭ナラン

歳入	税率	税額
五〇〇	一分	五
一〇〇〇	一分半	一五
二〇〇〇	二分二五	四五
四〇〇〇	三分三七五	一三五
八〇〇〇	五分〇六二五	四〇五
一六〇〇〇	七分六	一二一五
三二〇〇〇	一割一分四	三六四五

六四〇〇〇	一割七分	一〇九三五
一二八〇〇〇	二割五分六	三二八〇五
二五六〇〇〇	三割八分四	九八四一五
五一二〇〇〇	五割七分六	二九五二四五
一〇二四〇〇〇	八割六分五	八八五七三五
二〇四八〇〇〇	一倍二割九分七	二六五七二〇五

右ノ計算ハ歳入ヲ倍スル毎ニ前者ノ税率ノ半額ヲ遞増セシモノニシ  
 テ左マテ急劇ナル遞増ニハ非レ凡尚ホ底止スルコトナク之ヲ繼續スル  
 キハ右ノ表ニヨリテ見ルカ如ク終ニ税額ハ富者ノ歳入全額ニ超過ス  
 ルニ至ルヘシ此方法ハ本邦現今所得税ノ累進法ニ比スレハ頗ル急劇  
 ナル税率ノ變化タルヤ固ヨリ言チ竣タサレ凡累進法ニシテ進ンテ止  
 マサルキハ其結果タルヤ應ニ此ノ如ク富者歳入ノ全額ヲ没入スルチ

免レサルニ至ルヘシ然レモ若シ此ノ如キ急劇ノ變更ヲナサスシテ稍々漸進ノ方法ニ據リテハ之カ徵收ヲ行フハ或ハ其歳入ヲシテ敢テ全没スルノ恐ナカラシメシ敷例ヘハ歳入ノ一部分若クハ半ハチ除キテ其殘額ニノミ累進ノ法ヲ用フルト是レナリ彼ノゼアンバチストゼー氏ノ如キモ即チ又此說ヲ主唱セリ例ヘハ五百圓ニ一分ヲ課スルトセハ千圓ノ所得ニハ五百圓ヲ除キタル殘額ニ累進率ヲ課スレハ敢テ急劇ノ變更ヲ進ムト得ヘシト然レモ此方法ニヨルモ猶ホ所得巨額トナルトハ租稅ハ殆ト其全額ニマテ達スルニ至ルヘシ本邦現今ノ所得稅ニ係ル累進法ハ極メテ穩當ナル遞増ニシテ且ツ三分ヲ以テ遞増ヲ止メタレモ若シ之ヲ遞増シテ止マサルキハ稅額ハ遠ニ巨額ニ上ルチ免レサルヘキナリ本邦所得稅ノ稅率及ヒ稅額ハ左表ノ如シ

歳入	稅率	稅額
一〇三〇〇以上	一分	一〇三〇〇
一〇〇〇〇以上	一分半	一〇五〇〇
二〇〇〇〇以上	二分	四〇〇〇〇
三〇〇〇〇以上	二分半	七五〇〇〇
三〇〇〇〇〇以上	三分	九〇〇〇〇

本邦所得稅ノ累進法ハ之ヲ三萬圓ニ止メ之レヨリ以上ニハ徵課セザルトトシタルハ敢テ歳入ノ大部分ヲ没入スルカ如キトニ至ラサレモ右ノ表ニ示ス如ク三百圓ヨリ千圓ニ至ル階級ニ屬スル所得ニアリテハ一分ノ稅率ニシテ每百圓ニ對シ稅額一圓ナレモ千圓ヨリ一萬圓ノ階級ニ於ケルモノハ同一ノ歳入ニシテ稅率ハ一分半ニ増シ每百圓ノ對シテ一圓半ヲ納メサルヘカラス其他一萬圓ヨリ二萬圓ニ至リ二萬

圓ヨリ三萬圓ニ移ル毎ニ歳入ノ同一額ニ對スル稅額遞加スルカ故ニ階級ヲ異ニスル人民ハ不公平ノ感覺ヲ起サ、ラント欲スルモ得ヘカ  
 ラサルナリ將タ又既ニ累進法ヲ採用シナカラ何故ニ之ヲ三萬圓ノ所得ニ止メシヤ現ニ本邦ニ於テ三萬圓以上ノ所得ヲ有スルモノ夥多ナルヘク又現今コソ四萬圓五萬圓ノ所得ヲ有スルモノハ極メテ乏シカルヘケレ將來ニ在リテハ大ニ増加スルノ見込アルヘシ然ルニ何故ニ累進ヲ三萬圓ニ止メタルヤ是亦ターノ臆測ニシテ更ニ憑據スルトコロナキモノト云フヘシ今仮ニ此ノ方法ニヨリテ三萬圓以上ノモノニ累進稅率ヲ貫徹セントシテ一萬圓毎ニ半分ヲ遞増スルモノトヒハ其計算左ノ如クナルヘシ(計便ノ宜ノ爲メ歲入四、〇〇〇圓ニ達シヨルモハ之ヲ四分ノ稅率ヲ課スルモノト假定シソヨリ歩テハ之ヲ計セリ)

歳 入 稅 率 稅 額

三〇〇〇〇〇以下	三分	九〇〇
四〇〇〇〇〇	四分	一六〇〇
五〇〇〇〇〇	四分半	二二五〇
六〇〇〇〇〇	五分	三〇〇〇
七〇〇〇〇〇	五分半	三八五〇
八〇〇〇〇〇	六分	四八〇〇
九〇〇〇〇〇	六分半	五八五〇
一〇〇〇〇〇〇	七分	七〇〇〇
一一〇〇〇〇〇	七分半	八二五〇
一二〇〇〇〇〇	八分	九六〇〇
一三〇〇〇〇〇	八分半	一一〇五〇
一四〇〇〇〇〇	九分	一二六〇〇



一五〇〇〇〇	九分半	一四二五〇
一六〇〇〇〇	一割	一六〇〇〇

此ノ如ク穩當ナル累進法ト雖モ所得十六萬圓ニ上レハ其稅率一割トナル一割ノ租稅ハ既ニ輕稅ト云フヘカラス而シテ猶ホ此累進法ヲ繼續シテ止マス一萬圓毎ニ一分ノ半ヲ遞増スルキハ後ニハ其割合益々重キヲ加ヘ三六〇〇〇〇圓ノ所得ニシテ稅率二割ニ達シ其遞増左表ノ如ク遂ニ一九六〇〇〇〇圓ノ所得ニ至リテ全ク所得全額ヲ没入スルニ至ルヘキナリ

歳入	稅率	稅額
一六〇〇〇〇	一割	一六〇〇〇
二六〇〇〇〇	一割五分	三九〇〇〇
三六〇〇〇〇	二割	七二〇〇〇

五六〇〇〇〇	三割	一六八〇〇〇
七六〇〇〇〇	四割	三〇四〇〇〇
九六〇〇〇〇	五割	四八〇〇〇〇
一一六〇〇〇〇	六割	六九六〇〇〇
一三六〇〇〇〇	七割	九五二〇〇〇
一五六〇〇〇〇	八割	一二四八〇〇〇
一七六〇〇〇〇	九割	一五八四〇〇〇
一九六〇〇〇〇	一倍	一九六〇〇〇〇

余輩ハ本邦所得稅ノ累進法ハ穩當ナリト云ヒタレハ其賦課ノ原理ノ實際限ナク繼續シタランニハ遂ニハ重稅トナリ後ニハ前ニ舉クル表ニ於ケルヨリモ割合重クナリテ前表ニ於テハ二〇四八〇〇〇圓ニ至リテ租稅額歳入ニ超過スルノ割合ナレハ後表ニ於テハ歳入額未タ二

〇〇〇〇〇〇圓ニ達セザルニ税額ハ早ク既ニ其歳入ニ超過スルニ至ルヲ見ルナリ是故ニ累進税法ハ如何ニ些少ナル遞増ニテモ敢テ底止スルノ程度ナク何處マテモ其主義ヲ貫徹シテ止マサレハ遂ニ歳入ノ一大部分若クハ全額ヲモ没入スルヲ免レサルナリ然ラハ則チ或點ニ於テ其累進ヲ止メンカ是レ實ニ應測應斷ノ誘ヲ免ル、能ハサルナリ以テ累進税法ノ不條理ナルヲ知ルヘキナリ

**第九十三節 第四、累進税法ハ財産隱蔽詐偽申告等社**

會ノ不徳義ヲ誘導獎勵スルヲ 累進税法ニハ一モ道理上ノ根據ナク貧富平均ヲ以テ政府ノ職務トナスカ如キ論據ニ出ツル者ニシテ即チ一片ノ人情論ニ過キス而シテ歳入ノ各段階毎ニ税率ヲ變更スルト雖其變更遞増タルヤ單ニ當局者ノ應測斷定ニ出ツルモノ一シテ是レ亦憑據スヘキ所ナシ然ラハ則チ累進税率ヲ或點ニ止メンム

累進税法ハ隱蔽詐偽等ノ不徳義ヲ誘導獎勵ス

其止メタル點ヨリ以上ノ歳入ヲ有スルモノハ恰モ特別ノ保護ヲ受ケルニ等シク中間ニ位ヒシ累進税率ヲ以テ賦課セラル、歳入所有者ノミ特リ不公平ノ取扱ヲ受ケルモノナリト云フヘシサレハトテ累進ノ主義ヲ貫徹セントセハ如何ニ些少ナル遞増法ヲ以テスルモ竟ニ歳入ノ全部若クハ一大部分ヲ政府ニ没スルニ至ルヲ免レサルヘシ是故ニ該法ハ公正ノ點ヨリ觀察シテ一ノ條理ナキモノト斷定スルヲ得ヘキナリ況ンヤ該法ニシテ實施セラル、其ハ其結果ハ富者ノ財産隱蔽ヲ誘導シ歳入額ヲ政府ニ届出ツルニ方リテ富有者殊ニ税率遞増ノ境ニ臨メル納税者ノ如キハ間々申告ヲ偽ルコトアルヲ免レサルニ於テヤ是レ蓋シ累進税法ハ原ト政府ノ意明カニ富者ノ餘利ヲ減殺セントスル課税主義ニ出テ、當初ヨリ其不公平ヲ是認スルカ故ニ之ニ對スル納税者ノ感覺モ亦自ラ不正ナラザルヲ得ス況ンヤ又人ノ財産ヲ重ス

ルヤ時トシテハ生命ヨリモ優ルノ感アルモノナレハ税率一割ニ超ユルハ詐偽隠蔽ノ惡弊交起リテ政府ト雖底之ヲ防遏スル能ハザルニ於テヤ曾テ合衆國ニ於テ累進税率ヲ以テ歳入税ヲ賦課シタル事例並ニ英國ニ於テピット氏宰相タリシ時歳入ニ一割ノ税ヲ課シ人民大ニ財産ヲ隱匿セシ例証等ニ徴スルモ其弊害ノ及ホス所猶ホ照々乎トノ火ヲ看ルヨリモ其レ明カナリ

第九十四節 第五、累進税法ハ資本ノ外移ヲ促シ又資本ノ分割ヲ促スカ故ニ經濟上社會ニ損失ヲ生スル

累進税ハ富者ニ重ク大財産家大資本家ニ重キカ故ニ資本家ハ之ヲ内地ニ運用シテ其収入ノ増加ヲナセハ隨テ重税ノ之ヲ奪取スルモノアルカ故ニ寧ロ資本増殖ノ途ヲ外國ニ求ムルニ如カストノ感ヲ起シ終ニ之ヲ外國ニ移スアルニ至ルヘシ是レ不條理不公平ナル課税主義ニ

累進税法ハ資本ノ外移ヲ促シ又資本ノ分割ヲ促スカ故ニ經濟上社會ニ損失ヲ生スル

伴フ所ノ弊害ナリ良シ假令萬國同一ニ累進税法ヲ行フトセンカ又政府ノ取締嚴密ニシテ資本ノ外移ヲナスコト能ハサルモノトセンカ然ルモ猶ホ資本家ハ重税ヲ避クルノ道ヲ知レリ即チ大資本ヲ分割シテ數人ノ名前ヲ籍リテ一大資本ヲ所有スルカ如キ是レナリ然ルハ大歳入分割セラル、カ故ニ重税ヲ脱スルコトナシトセス本邦ノ所得税法ニ於テ家族ノ所得ヲ戶主ノ所得ニ合算スルカ如キ即チ所得ヲ家族中ノ數人ニ分チ以テ課税ヲ脱セントスルノ途ヲ豫メ杜絶シタルモノナリ夫レ然リ資本分割セラル、ニ至ルハ只其名義上ノ分割ニ止マラスシテ實際大資本ヲ割キテ數多ノ小資本トナシ用フルカ如キコトナキテ必セス若シ果シテ之レアリトセハ現今ノ工業ノ如キ悉ク大資本ヲ要スル事業多キヲ以テ假令大資本ハ合本會社ノ仕組ニ因テ得ラザルニアラザルモ亦一己人ノ大資本家大財産家ヲ要スル最モ切ナルヲ感ス

然ルニ資本増加シ歳入増加スルニ從テ重税ヲ以テ傍ヲヨリ之ヲ奪取スルニ至ラハ大資本ハ數人ノ手ニ分割セラレ遂ニ大資財ノ効用ヲナスト能ハサルヘシ

累進税法ハ貯蓄勤儉ノ念ヲ減殺ス

第九十五節 第六、累進税法ハ人民ノ貯蓄勤儉ノ念ヲ

減殺スルヲ 累進税法ニシテ資本ヲ外國ニ逐ヒ資本ノ分割ヲ促カスカ如キ極度ニ達スレハ經濟上ノ損失ハ云フマテモナク設令未ダ其極度ニ達セサルトスルモ此税法ハ尙ホ人民ノ勤儉貯蓄ノ念慮ヲシテ減絶セシムルヤ明カナリ夫レ人ハ自己生計ノ程度ヲ高フセントナ欲シテ常ニ勤勉ナルベキハ固ト其常態ナリ然ルニ累進ノ税法ニ在リテハ生計ノ程度ヲ高フスル毎ニ其税率ヲ重フシ即チ所得ノ増加富ノ増進ニ課税スルモノニシテ換言スレハ孜々汲々勤勉貯蓄シテ富ヲ増殖スルニ隨テ竟ニ其歳入ノ大部分ヲ沒収スルニ至ルモノナレハ果シ

累進税法ニ據ルモ巨額ナル歳入ノ巨額ナル望ムヘカラス

テ此税法ニシテ實施セラル、此ハ國民勤儉ノ念慮ヲ抑遏シ從テ貯蓄増富ノ念ヲ剝滅スルニ至ルヘシ是レ累進税法ハ經濟上直接ノ損害ノル所以ナリ

第九十六節 第七、累進税法ニ據ルキハ常ニ財政上巨

大ナル収ヲ入致スヘシト想フハ非ナリ 抑累進税法ハ公正ノ點德義ニ及ボス影響ノ點及ヒ經濟ノ點ヨリ觀察スルモ尙ホ一ノ取ルヘキ所ナシ唯之ヲ財政ノ點ヨリ觀察シタルモノ稍一理ナキニ非ス日夕累進税法ハ比例税法ニ依ルヨリモ政府ニ巨額ナル収入ヲ納ル、ヲ得ヘシト夫レ然リ累進税法ハ固ヨリ比例税法ニヨリモ幾分カ収入ノ巨多ナルヘキハ論ヲ竣タスト雖モ此點ニ於テモ世人ノ豫想推測スル如ク累進税法ニ利益アラサルナリ是レ一ハ各國共ニ巨大ノ歳入ヲ有スル富民ノ數ハ極メテ寡々タル者ニシテ其富民ノ歳入額

収入ノ多カサル所ハ富民ノ少ト重税ニハ財

産隠蔽ノ  
弊之ニ伴  
リテ故ナ

本邦所得  
税納税者  
人員

ハ全國民歳入總額ノ一小部分ニ過キサルト(第一)ハ累進税ヲ行フハ巨大ノ歳入ヲ有スル富民ハ常ニ政府ノ措置不當ナルヲ名トシ財産ヲ掠奪セシムル、ヲ恐レテ隱匿詐偽ヲ逞フシ課税物件減少スルト(第二)ニ由ルナリ

夫レ租税ハ課税ノ基礎廣キモノヲ撰ハサルヘカラス故ニ少數ナル富民ノ有スル贅澤品ニ課税センヨリハ寧ロ消費ノ廣キ日用品ニ課税スルヲ優レリトストハ余カ前ニ述ヘシ所ナリ是レ商業ノ小仕掛ニ於テハ高利潤ヲ獲ルモ收益乏ク大仕掛ニハ低利潤ニシテ却テ巨大ナル收益アルト其理チ一ニスルモノナリ故ニ不條理ナル累進税率ヲ以テ富民ニ重課スルトモ亦決シテ國庫ニ巨利ヲ致スヘキノ方策ニアラス是レ各國富民ノ數ト巨大ナル歳入トハ常ニ極メテ寥々タルモノナレハナリ明治二十年度ニ於ケル本邦所得税納税者ノ調査ハ左表ノ如シ

階級	人員	所得	平均一人所得高
第一級	六三	四〇六、六六八四	六、四五五〇。七
第二級	四五	一〇四、九四八七	二、三三二一。九
第三級	二〇七	二六二、四五四六	一、二六七八。九
第四級	一、三〇九五	二五六八、八四四二	一九六一。七
第五級	一〇、五八八六	四七〇五、二五四四	四四四。三
合計	一一、九二九六	八〇四八、一八〇四	

累進税法ニヨリテ毎級ヨリ得ル處ノ同年度ノ收入ノ豫算ヲ舉グレハ左ノ如シ

階級	税率	收入
第一級	三分	一一、二〇〇〇

第二級	二分半	二、六二三七
第三級	二分	五、二四九〇
第四級	一分半	三、八五三二八
第五級	一分	四、七〇五二五
合計		一〇、五六五八二

右ノ表ニ據リテ見ルモ既ニ第三級以上即チ一萬圓以上ノ所得ヲ有スルモノハ其人員寧ニ僅少ニシテ從テ巨額ノ收入ヲ國庫ニ納ル、ト能ハサルハ則チ累進法ノ利益ヲ少ナキニ因レルト亦推テ知ルヘキナリ若シ第一第二第三ノ階級ニ屬スル所得納稅者ニシテ多カラシメハ或ハ累進法ニヨリテ巨額ノ收入ヲ得可キモ如何セン上級ニ屬スルモノハ漸次其數遞減シ下級ニ屬スルモノ獨リ多ク即チ吾人ハ常ニ下級ヨリ多額ヲ收入シ得ルノ事實アルヲ忘ルヘカラス勿論本邦ノ如キハ富ノ

普國所得稅納者八員

程度未タ上進セス隨テ其配賦モ殆ント平均シテ未タ甚タシキ貧富ノ懸隔ヲ生セス故ニ大財產家ニ乏レキハ爭フヘカラサル事實ナレモ今之レナ外國ニ徵スルモ亦タ巨額ノ收入ヲ有スルノ財產家ハ國民總數ニ比シテ其數尙ホ極メテ少ナキトハ爭フ可カラサルトス一八五三年普魯士ニ於テハ人口千八百萬ニシテ一千「タ」以上ノ收入ヲ有スルモノニ所得稅ヲ課シ一千「タ」以下ノ者ニ等級分頭稅ヲ課セリ今其調査ニ係ル所得稅納稅者人員ヲ舉グレハ左ノ如シ

- 內
- 一〇〇〇「タ」(七五〇圓)以上ノ者 四、四四〇七
  - 一四〇〇「タ」(一〇五〇圓)以下ノ者 二、一七八三
  - 一、二〇〇〇「タ」(八一〇〇圓)以上ノ者 四、四四
  - 二、〇〇〇〇「タ」(一、五〇〇〇圓)以上ノ者 一、六〇
  - 五、二〇〇〇「タ」(三、一八〇〇圓)以上ノ者 二、九

八、〇〇〇〇〇、タール六、〇〇〇〇〇圓以上ノ者

一三

一、二〇〇〇〇〇、タール九、〇〇〇〇〇圓以上ノ者

七

右ノ表ニ掲ケシ所ハ其時代モ既ニ古リニタレト尙ホ富豪者ノ數ノ乏シキヲ示スニ足ラン又一八六四年普魯士國ニ於テ一千「タール」即チ七百五十圓以上ノ所得ヲ有スル者六、八一一人即チ十一年前ノ人數ノ半ヲ増加セリト雖、此人數ニ課シテ得タル普魯士政府所得稅ノ收入ハ尙ホ未タ一千「タール」以下ノ所得ニ同率ヲ課シテ得タル所ノ收入總額ノ三分ノ一ニ及ハサリキ以テ富民ノ所得ハ課稅ノ基礎トシテハ寔ニ狭少ナルヲ見ルニ足ルヘシ

合衆國所得稅納者人員

合衆國ニ於ケル一八六六年ノ人口ハ三五〇〇、〇〇〇ナリシカ六百弗以上ノ所得ヲ有スルモノハ僅カニ四六、〇一七〇人ニ過キス翌年ニ至テ一千弗以上ノ收入ニ所得稅ヲ課セシニ其負稅者ハ僅ニ二五、九三

英國所得稅納者人員

八五人ナリキ

英國ハ其富世界ニ冠タリ其財產家富豪家ニ富ムハ亦怪ムニ足ラサルナリ且ツ英國ニ於テハ富一方ニ偏シ貧者ハ益々貧ニテ殆ント飢餓ニ泣ク者モ數多アレト富者ニハ倚頼モ當ナラサル者亦頗ル多シ然ルモ猶ホ巨大ナル歲入ヲ有スル者ハ其數至テ多ラサルナリ今一八七七年ノ調査ニ據レハ英國所得稅納者ノ數ハ左ノ如シ

所得額

一五〇磅乃至一〇〇〇磅ノ者 三一七八四八

一〇〇〇磅乃至一〇〇〇〇磅ノ者 二、一六九一

一〇〇〇〇磅乃至五〇〇〇〇磅ノ者 一〇六七

五〇〇〇〇磅以上ノ者 九〇

合計一五〇磅以上ノ者 三四〇六九六

其他各國ノ有様及一般ノ所得稅納者ノ員數ヲ見ルニ巨額ノ歳入ヲ有  
 スルモノ、數ハ甚タ少ナキヲ見ルヘシ是ニ由テ之ヲ觀レハ累進稅  
 法ハ決シテ巨額ノ收入ヲ得ルノ道ニアラス故ニ單ニ財政上國庫便宜  
 ノ點ヨリ論スルモ尙ホ累進稅法ヲ庇護スルノ價値アラサルヘシ且ッ  
 累進法ヲ行フトキハ巨大ノ收入ヲ得ルヲ能ハサルノミナラス巨額ノ  
 歳入ヲ有スルモノハ益々其所得ヲ隱蔽スルニ至ルノ現象ヲ呈セン抑  
 比例稅法ヲ用フルモ猶ホ正直ニ所得ヲ申告セシムルヲ能ハスシテ常  
 ニ欺罔ヲ免カレサルハ是レ稅制上免レサル所ナルニ況シテ累進稅法  
 ニヨリテ公然政府カ課稅ニ不公平ナル主義ヲ取ルトキハ人民モ亦タ  
 之ヲ避ケンカ爲メニ安ンシテ所得高ノ幾分ヲ隱匿スルカ如キ惡風ヲ  
 醸成スルニ至ルヘシ斯ノ如ク富民カ其所得ノ幾分ヲ隱匿シテ其負擔  
 ノ平等ヲ保タント計ルトキハ政府ニ於テ累進稅率ヲ課スルノ基礎モ

亦愈狭少ナルニ至ルヘシ

以上余ハ累進稅法ノ公正ノ點ヨリ見テ不條理ニシテ且ッ道義上經濟  
 上ニ不利ナル所以ト財政上ニモ利益渺キ所以トヲ辯セリ然レハ實際  
 ニ於テ純然タル累進稅法ヲ行フ國ハ殆ト稀ニシテ本邦ノ所得稅ノ如  
 キハ累進法ニ外ナラザレハ其累進ノ度急劇ナラス其程度ニモ亦タ制  
 限ヲ置キタルカ故ニ敢テ巨大ナル歳入ノ全額ヲ政府ニ沒入スルノ恐  
 レナシ只實地ニ累進法ヲ行フモノハ唯瑞士國ニ於テ其諸州内ノ租稅  
 ニ累進法ヲ行フモノアルノミ該州ニ於テハ頗ル緻密ナル方法ニヨリ  
 テ累進稅ヲ課スレハ到底此方法ニヨリテ利ヲ得ルヲ難カラシ  
 累進法ニヨリテ富民ノ餘裕ヲ政府ニ沒收スルハ洵ニ不可ナリト雖  
 此ニ幾分カ富民ニ重テ課スルモ亦可ナルノ理由アリ是レ後章ニ至テ  
 詳述スル處アルヘケレハ間接稅殊ニ必要ナル物品ニ賦課シタル消費

間稅負擔  
 ノ不平均  
 補償スル  
 爲メニ



富民ニ稍  
重ク課ス  
ルハ不可  
ナルナシ

三百三十四

税ハ其負擔彼ノ納稅者ノ財力ニ比例セサルモノナリ如何トナレハ消  
費税ハ貧富同一ニ課セラル、モノニシテ例ハ酒税ノ如キ小民之レ  
ヲ飲ムモ富民カ之ヲ消費スルモ均ク同一ノ租税ヲ拂フモノナリ故ニ  
財力ニ比例スルノ點ヨリ更ニ觀察スレハ貧民ニ重クシテ富民ニ輕シ  
ト云ハサルヘカラス此間税ノ不平均ヲ補償センカ爲メニ直接税ニ於  
テ富民ニ重ク課シ貧民ニ輕ク課スルハ策ノ得タルモノト云フヘシ是  
ヲ以テ所得税ヲ課スルニ當リテハ何レノ國ニ於テモ免除點ヲ置キ決  
シテ之レヲ細民ニ及ホサシメス普魯士ハ一千、クローテ以下ノ歲入ヲ除  
キ日本ハ三百圓ヲ免除點トシ英國ノ如キハ時トシテハ百五十磅時ト  
シテハ五十磅ヲ以テ免除點トセリ此ノ如ク一定ノ免除點ヲ設ケ細民  
ノ生計ニ必要ナル最少費額ヲ除キテ租税ヲ賦課スルヲハ主義ニ於テ  
敢テ不可ナルナシ然レモ累進法ノ不道理ナルヲ諸種ノ弊害ノ存スル

トハ已ニ續述セシ所ニ由テ讀者乞フ明知スル所アレ

第十三章 單稅制及ヒ複稅制

單稅制及  
複稅制則  
ノ解

**第九十七節 單稅制及ヒ複稅制ノ解** 租稅制度ニ單複ノ二制アリ單稅制トハ何ソヤ曰ク單稅制トハ凡テ一國政府ノ經費ヲ單一ナル租稅ニヨリテ支持セントスルモノニシテ複稅制トハ之レニ反シ同時ニ種々雜多ノ租稅ヲ人民ニ賦課シ以テ國家百般ノ經費ヲ支辨セントスルモノ是レナリ然ルニ單稅制ハ只一ノ學說ニ止リテ未タ嘗テ之ヲ實地ニ行ヒシ例アルヲ聞カス又今日各國稅制ノ有様ヲ通觀スルモ皆ナ盡ク複稅制ヲ採リテ巧ニ數種ノ租稅ヲ併課スルモノニアラリルハ莫ク財政學者モ亦均ク複稅ヲ以テ實地ニ行フヘキ租稅ノ良制ナルモノナリトセリ然レモ世間猶ホ理論上ヨリ單稅制ヲ賞揚スルモノ

單稅制ノ  
利

ニ乏カラス蓋シ單稅制ト雖モ更ニ理論上ヨリ之カ觀察ヲ下スルハ毫モ利益ナシトハ云フコト能ハサルモノナリ

**第九十八節 單稅制ノ利** 單稅ニシテ若シ非常ノ不公平不平均ヲ租稅ノ上ニ生スルコトナク又タ充分ニ租稅徵收ノ目的ヲ達シ而シテ國庫ニ必要ノ歲入ヲ供給スルコトヲ得セシメハ思フニ利益アルノ稅制ハ復タ單稅ノ右ニ出ツルモノナカルヘシ抑租稅ハ必要ナル可厭的物ナリトハ余カ屢述ヘシ所ニシテ畢竟之アルカ爲メニ經濟ノ發達ニ障害ヲ加ヘ又納稅者ニ煩累ヲ蒙ラス等ノコトアルヲ免レサルモノナレハ若シ單一ナル租稅ニシテ果テ國家ノ經費ヲ支フルコトヲ得ルトセハ租稅賦課ノ爲メニ生スル所ノ繁雜ト束縛トハ是ヨリシテ最少點ニ減少スルコトヲ得ヘク即チ稅制カ經濟上富ノ生産融通分配消費等ノ上ニ及ホス所ノ不良ナル影響ト營業ノ自由ニ加フル所ノ抑制トハ最モ減

少スルニ至ルヘシ且ツ夫レ租税ノ種類一ナルキハ之ヲ賦課徴收スルニ當リテモ唯一ノ方法ニシテ足レルヲ以テ人民モ亦唯一ノ課税物件ヲ申告スルカ若クハ検査セラルルニ止リテ大ニ租税ノ帳簿収税ノ官吏及ヒ官衙等ヲ減省スルヲ得ヘシ故ニ單税ノ制度ハ政府ノ行政上ヨリ見ルモ納税者ノ點ヨリ~~モ~~亦等ク大ナル利益ヲ有スルモノナリ但タ如何セン理論上ニ於テハカ、ル利益アル單税ナレハ實際上ニ於テ人民一般ニ公平ニ課スルヲ難ク又タ單一ノ租税ヲ以テ國家ニ必要ナル巨額ノ經費ヲ支ルニ足ルヘキ租税ヲ發見スルヲ更ニ難キモノアルヲ是レ今日ニ於テ到底單税ヲ實行スルヲ得サルノ理由ナリ請フ是レヨリ歩ヲ進メテ更ニ一層細密ノ論點ニ入ラン

**第九十九節 單税論者諸家ノ說** 今日ニ於テ單税說ヲ主張ス

ル論者ハ甚タ稀ナリト雖モ古來尤モ著名ナル單税論者ハ彼ノ十八世

紀ニ當テ佛國ノ<sup>フビシオウチツクウケイ</sup>重農學派カ稱道セシ地租單一税說即チ是ナリ蓋シ地租ヲ以テ單税トセントスルモノ、外尙ホ消費税ヲ以テ單税トセント主張スルモノアリ又近代ニ至リテハ北米合衆國ニ資本單税說殊ニ不動資本税ヲ以テ單税トナサントスルノ論者アリ其他歳入ヲ基礎トシテ單税ヲ課セント主張スルモノナキニアラス即チ現今ノ所得税ヲ擴張シ更ニ税率ヲ高メテ單税ノ基礎ヲラシメントスルモノ是レナリ然レモ最モ世人ノ熟知スル所ノモノハ地租單税說ナルヲ以テ茲ニハ單ニ地租單税說ニ付テノミ細論セントス

重農學派ノ說ニ據レハ凡ソ財産中土地ハ唯一ノ富源ニシテ純收入ヲ生スルノ財産ハ獨リ斯ノ土地アルノミ故ニ政府ノ課税ハ唯一ノ土地ニ課スル地租ヲ以テスヘシト云フニアリ該學派ノ巨擘ナルグエスナイ氏ハ未タ勞力カ生産ノ一要素タルヲ十分領解セスシテ工業ハ殆

重農學派  
ノ地租單  
税說

土地ハ純  
 入チ生  
 農學派ノ  
 說ハリカ  
 フドウ氏  
 ノ地代ハ  
 餘裕ナリ  
 トノ說ニ  
 符合ス

ント不生産的ノ業ナリトナセシモノ、如シ要スルニ他ノ生産業ニ於  
 テハ資本ト勞力ニ向テ報酬アルノミニシテ其他ニ餘利ヲ生スルコトナ  
 キモ土地ノ耕作即チ農業ニ於テハ通常資本ノ利子ヲ引去リ勞力ニ賃  
 銀ヲ拂ヒタル後尙ホ餘裕ヲ生スルモノナリ故ニ之ヲ稱シテ重農學派  
 ノ士ハ純收入ナリトハ云ヘリ蓋シ此ノ餘裕タル土地ノ生産力ニヨリ  
 テ其高下コソアレ凡ソ土地ニシテ此餘裕ヲ生セサルモノハ亦殆ント  
 之レナシト云フヲ得ヘシ尋テ英國ニ出タル經濟學者リカードウ氏カ  
 主唱セシ地代ハ餘裕ナリト云ヘルモ亦此說ニ符合スルモノナリ夫レ然  
 リ地代ハ餘裕ナリ故ニ地代ハ社會ノ進歩ニ伴テ人口ノ繁殖農産品ノ  
 價格騰貴等ニ從テ自然ニ増加スルノ傾向ヲ有スルモノナレハ地主ハ  
 亦勞セスシテ共與ニ地價ヲ騰貴セシムルノ利アリト云フヘシ即チ土地  
 ハ重農學派ノ所謂純收入リカードウ氏ノ所謂餘裕ヲ生スルモノナレ

ハ之ヲ盡ク政府ニ収ムルモ可ナリ如何トナレハ是レ資本勞力ニ向テ  
 相當ノ報酬ヲ與ヘタル餘利ナレハナリト言ハンカ是レ實ニ地代ヲ以テ  
 國家ノ共有物トシテ國庫ニ入レ更ニ之ヲ以テ國家ノ經費ヲ支ヘント  
 試ミルノ說ニシテ再言スレハ土地ヲ以テ國家ノ公共財産トナシ遂ニ  
 土地私有權ヲ破壊セントスルニアルモノ、如シ然ルニ土地ニ單稅ヲ行  
 ヒ盡ク地代ヲ政府ニ収入セントスルコトハ往古土地カ共有財産タリシ頃  
 ニ在リテハ兎ニ角苟モ現今ノ實際ヲ顧レハ到底其行ヒ得ヘキモノニ  
 アラサルヤ復タ辯ヲ竣タスシテ明カナリ抑、現今ノ地主タルヤ自然惠  
 與ノ土地ヲ所有スルモノニアラス皆相當ノ價ヲ以テ之ヲ購求シタル  
 モノニシテ或ハ之ヲ貸付ケテ地代ヲ得ントスルノ目的ヲ以テ買入レ  
 タル者モアルヘク或ハ自カラ之ヲ耕作シテ勞力資本ノ報酬ノ外更ニ  
 餘利ヲ利セントノ目的ヲ以テ買入レタル者モアルヘシ若シ又地主ニ